し爲め所屬兵團は之を撃滅すべく南進し十一月七日氏の中隊は左縱隊の尖兵中隊として前進し其の日午後零時三十分頃敵は太原南方約五十粁の大谷縣城東方橋梁附近に陣地を占領しあるを知り中隊は直ちに之を攻撃した。此の際氏の屬する岡本小隊は中隊の右第一線となり全線勇猛果敢に攻撃し敵は間もなく退却せし爲め中隊は之を急追し午後一時三十分頃大谷縣東南側に達し城壁上に據れる敵に對し一部を以て正面より主力を以て敵の退路を遮斷する如く迂回攻撃し遂に午後二時敵の退路に迫るや敵は狼狽して退却を始めた。中隊は一齊に敵陣に突入し氏も勇敢に岡本小隊長桂原分隊長と共に突入奮戰格鬪を交へ氏は忽ち敵二名を刺殺し更に敵の下士官らしき者を刺殺したるに該敵は健氣にも刀を揮ひて尙抵抗せし爲め更に第二の刺突を爲さんとせし刹那氏の左側に迫りし敵の將校らしき者其の拳銃を以て氏を狙撃し氏は惜しくも左胸部より右胸部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。之を見た岡本准尉は愛する部下の仇とばかり其の軍刀を以て見事に敵將校を斬り殺した。而して此の敵は調査の結果歩兵中尉白德山なる者であつた。

古來親に孝なる者は君に忠なりと。氏幼より親に對し至孝其の性格極はめて溫厚にして平素は處女の如くであつた。而して一度戰場に立つや勇猛果敢進んで難局に當り獅子奮迅の勢ひを以て死地に入り以て屢々戰勝の端を拓く。正に是れ軍民の龜鑑と謂ふべきである。然るに聖戰の中途斯の如き勇士を喪ふ洵に痛惜の極みである。然かし士は百戰功なき瓦全を恥ぢ。氏や大谷縣城に大和櫻と散華せしも其の芳名と共に千載に語り傳へられ英靈は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙も皇猷を扶翼し奉り又一家の守護神として遺族殊に愛子の將來を加護照覽し佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金績勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　久世節男

輕機彈藥手、寶店鎭に勇戰して三トーチカを占領せしむ

氏は京都市上京區上賀茂菖蒲園の人にして父を豐吉亡母をクニと云ひ大正五年六月二十五日を以て生れ未だ獨身であつた。昭和六年三月上賀茂尋常高等小學校を卒業し同八年四月上賀茂青年訓練所及同實業學校に入り十一年十一月同所並に同校の課程を修了した。責性溫厚篤實而かも進取の氣象に富み殊に勤勉努力家にして小學校時代には學術優等尋常高等兩科を通じ各年級長又は副級長に推され青年團に於ても屢々幹部員に選ばれ能辯家として重きをなし又平素長兄夫妻を助けて家業に格別勉勵し青年團及同業組合より表彰を受けた事數回に及んで居る。

昭和十一年十二月現役兵として龍山歩兵聯隊に入營し熱心軍務に精勵して居たが支那事變勃發するや森本部隊に編入せられて北支方面への征途に就いた。然るに氏は途中不幸にして大腸炎に罹り七月二十日奉天陸軍病院に入院したが幸に八月十六日全快退院し勇躍追及して南苑に於て所屬隊に復歸した。

九月十五日所屬部隊は南苑を出發し北京良鄕を經て翌十六日朝寶店鎭北方無名部落へ到着し待期中であつた。朝來彼我の銃砲聲盛にして戰場一帶は砲煙漲り折々飛來する流彈は或は高く或は低く高粱の幹を打倒す音も無氣味に響き渡り敵陣地附近の村落は我砲彈の爲火災を起し戰場の光景轉た凄慘を極めて居た。此時氏の所屬部隊たる中川支隊は寶店鎭を占領

すべき命令に接し午前九時行動を起し高粱密生の畑地を前進した。氏は第九中隊第二小隊の輕機關銃分隊彈藥手であつたが前進間は警戒兵となり部隊の前方約二十米を先行した。敵陣地の近づくに從ひ鐵道線の兩側に構築せる半永久的のトーチカ陣地より敵機關銃の猛射を受け又小隊の進路上には數個の地雷が爆發し其の物凄き土砂を浴びたが氏は毫も之を意とせず前進を續け警戒の任務を全うし其の後所屬小隊は左第一線として高原に遮蔽しつつ左方に移動し突擊隊形を整へた。

氏は此の際彈雨を冒して彈藥を運送し輕機關銃分隊の戰鬪準備を遺憾なからしめた。やがて所屬小隊は高粱畑より不意に現出し敵のトーチカ目かけて猛烈果敢なる突擊を行ひしに敵は周章狼狽手榴彈槍青龍刀を投げつけて遁走し遁げおくれし敵はトーチカに立籠り必死の抵抗を試みた。依つて氏の所屬分隊は之を猛射して撲滅し鐵道線路附近に在りし三個のトーチカを瞬く間に占領するを得た。此の時敵の增援隊は裝甲列車に依り來援し氏等の部隊を包圍し熾烈なる火力を發揚して逆襲に轉じて來た。氏は更に動せず彈雨の下に彈藥補給に任じ以て輕機關銃の威力を最高度に發揮せしめ遂に逆襲部隊を擊破し同日午後二時頃第一線部隊と共に敵陣地の要點に突入せんとして敵前二三米に肉薄せる一刹那前額部に貫通銃創を受け微かにも萬歲を唱へ壯烈なる戰死を遂げた。所屬中隊は氏等二十五名の戰死傷者の勇戰に依り同日午後二時十分完全に敵陣地を占領するを得た。

氏は出征に方り軍用列車が黃州驛通過の折未知の見送人と談話中私は身體は丈夫ですし帝國臣民として斯樣な光榮は二度とありませんから人後に落ちぬ樣働いて來ます故御安心あれと人一倍元氣であつた。而して鄉里には未だ何等の通信もして居らぬ事を聞いた其の見送人は深く感動して氏の鄉里に出征狀態を通報したとの事であつた。氏や靈忠報國の志橫溢し任務の前には敵彈も堅壘も眼中になかつた。其勇猛果敢なる行動は自づから戰友の志氣を激勵し又機宜に適する彈藥補充を行ひ以て本戰鬪勝因の礎石となつた。參戰早々斯かる勇敢有爲の士を喪へるは痛恨限りなしと雖も氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史に牢記せられ不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　桑野正助

元氏の掩蓋機關銃を撲滅し戰勝の途を拓きし輕機關銃手

氏は茨城縣稻敷郡木原村の人にして亡父を由助母をよねと云ひ大正五年一月十日に生れ未だ獨身であつたが家庭の都合に依り桑野福子を氏の養女として入籍して居る。性快活敏捷にして事に當るや沈着果斷であつた。諸事實直にして特に友人間の信頼厚く模範青年として其の將來を囑目されて居た。昭和五年三月木原小學校高等科を卒業したが身體輕捷殊に器械に依る跳躍運動等は觀衆絕讃の的となつて居た。又手工に巧みにして昭和三年十一月大禮記念全國小學校生徒成績展覽會に出品し總裁傳恭王殿下副總裁勝田文部大臣同望月內務大臣會長德富猪一郎氏の連署を以て褒狀を授與された。更に青年團に入團中は劍道及角力の名選手として好評を博した。昭和十二年一月現役兵として水戶步兵聯隊へ入營し熱心軍務に精勵して成績良好就中銃劍術に於ては同年兵中第一人者を以て目せられて居た。

支那事變起るや同年八月石黒部隊に屬し輕機關銃分隊員として勇躍北支戰線へ出征した。九月十四日永定河々畔北相各莊附近の戰鬪に於ては所屬中隊は大隊の左第一線となりしが氏は第二小隊第三分隊に屬し敵彈下に勇躍濁流を徒涉し速かに敵岸に取りつき有效適切なる猛射を以て敵を壓倒し以て小隊の突擊を誘起し其の突擊に方りては果敢なる行動に依り中隊の陣地奪取を容易ならしめ續いて追擊に移るや地形の錯雜と疲勞とに屈せず勇敢なる行動に依り戰果擴張に寄與せる所頗る大であつた。

翌十五日は引續き敵を急追し琉璃河々畔に進出したが暗夜且熾烈なる敵火を意とせず氏は分隊長の指揮下に勇戰して此の敵を一蹴し翌十六日拂曉北相附近の攻擊に參加した。北相附近の敵陣地は極はめて堅固に構築せられ守兵亦必死の抵抗をなし激戰を展開するに至つたが氏は能く分隊長を中心とし敵の熾烈なる彈雨を冒かしつゝ勇戰を續け一進一止遂に敵前尺寸の地に肉薄し遂に猛烈果敢なる突入を敢行して敵を西方に擊退し以て敵陣地を占領確保した。

其の後所在に殘敵を席捲して猛追擊に移つた。此の時は急遽なる追擊に給養續かず終には食ふに食なく剩さへ大雨沛然として到り泥濘膝を沒すれど氏は克く困苦缺乏に堪へつゝ松林店附近の敵を擊破し逐次南方に向ひ急行軍を續けた。所屬大隊は既に連續十有二里の强行軍を實施し人馬の疲勞其の極に達したが息つく間もなく大冊河々畔の敵陣地を攻擊の爲め展開した。所屬中隊は大隊の左第一線となり九月二十一日夜半大冊河を渡涉するや水深胸に達し敵岸近く水雷敷設の中を而かも敵彈驟雨の如く射注ぐ下に勇敢に敵岸に取りつき更に十字の敵火を浴びつゝ石頭村の堅壘目がけて肉薄した。此の時隣接せる坂西部隊は敵の猛射を受けて渡河實施困難の狀況となり又所屬大隊當面の敵陣地前なる二條の水濠と鐵條網に阻止せられ極めて苦境の狀態となつたが所屬中隊は擲彈筒の集中射擊に膚接し敢然當面の敵陣地に突擊を敢行するに決した。氏等は此の際死力を竭して擲彈筒射擊に協力し突擊點及び左右の側防機關を制壓して突擊の動機を作爲し遂に突擊を敢行するや機を失せず敵陣地に突入して之が奪取並に確保に協力した。而して翌二十三日は敗敵を急追し保定の西方より南方へ進出し衆兵は疲勞と飢渴に身體綿の如くなりしに拘はらず氏は克く志氣を鼓舞し殘敵掃蕩の任務を完遂した。

九月二十九日所屬中隊は軍旗護衛の重任を受け敗退する敵を追ふて滹沱河を渡河し石家莊に向ひ前進の途中敗殘部隊の反擊を擊退し又獨立機關銃大隊を掩護する等機宜に適する行動に依り積極的に任務を遂行し十月十日元氏附近に進出した。

元氏附近の敵陣地に對し攻擊を準備するや所屬中隊は大隊に復歸し再び第一線に活躍するに至つた。即ち十一日元氏の敵陣地を攻擊するや所屬小隊は敵の猛烈なる彈雨を冒して一進一止肉薄し其の間氏は克く輕機關銃の威力を發揚したが特に第五次の敵陣地の攻擊に於ては氏の所屬分隊は敵の掩蓋機關銃の猛火を冒して之に肉薄し好機に投じて率先此の敵に突入して沈默せしめ以て小隊の戰鬪を容易ならしめた。惜しい哉此の時氏は偶々敵の手榴彈の爲め左後背部に破片創を受け壯烈なる戰死を遂げた。

氏や夙に盡忠報國の志厚く身體輕敏武技亦優秀にして克く分隊の中堅となり分隊長を輔佐した。而して難局に遭遇するや志氣益々旺盛常に戰友を激勵し綽々として輕機の全威力を發揚し突破戰線實に一百里每戰所屬中隊の戰勝獲得に至大なる素因を與へた。寔に是れ皇軍步兵の精鋭であり一般軍人の模範であつた。斯かる有爲精悍の士を喪へるは眞に痛惜に堪

へざるも其の累次の功績たる北支戰史に輝き其の芳名は後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　倉田一鹿

所屬隊の危機に方り重要傳令の任を果して西保障に玉碎す

氏は長野縣伊那郡會地村の人にして父を誠毋をヒサと云ひ大正五年十一月二十日に生れ未だ獨身であつた。性溫良にして義務心厚く事を行ふや周密熱心交際亦圓滿にして諸人の愛敬を受けて居た。昭和五年三月會地小學校を卒業し其の後は家庭に在りて家業を手傳ひ孝養怠りなかつた。昭和十一年一月現役兵として松本歩兵聯隊へ入營し擲彈筒手として教育を受け熱心精勵良成績を擧げ翌十二年六月選ばれて千葉陸軍歩兵學校教導聯隊に分遣された。

支那事變起るや同年八月原隊へ復歸し遠山部隊に屬し關中隊の擲彈筒彈藥手として勇躍征途に就いた。北支到着後は降雨泥濘を冒して永定河々畔に進出し同河南岸一帶の地區に堅固に陣地を占領しありし敵に對し所屬部隊は九月中旬敵陣地の左翼方面を突破して敵を急追し九月十六日には琉璃河々畔塲頭鎭の敵陣地を一蹴し九月二十一日には大册河々畔に至難なる敵前渡河を敢行し直ちに黃村附近の敵陣地を夜襲し慘烈極まる激戰の後之を擊破した。氏は其の間勇敢機敏に行動し最も緊密に筒手に協力して重要目標を制壓して小隊の攻擊戰鬪を容易ならしめた。

黃村附近に於て敵を擊破せる所屬部隊は息つく暇もなく敵を追擊して保定方向に前進したが二十二日所屬中隊は尖兵中隊となり氏の所屬小隊は尖兵として追擊前進中富昌屯附近に於て退却中の敵機關銃を發見するや氏は疲勞困憊に屈せず勇敢機敏に行動し以て適切有効なる猛射を浴びせ遂に之を殲滅した。爾後引續き敵を追擊し保定附近の殘敵を掃蕩したる後所屬部隊は保定附近に兵力を集結し更に追擊準備を整へた。氏は其の間道路偵察に或は警戒勤務に連日連夜に亘り献身的に任務を遂行した。

所屬部隊は九月二十九日より約一週間に亘り滹沱河々畔の敵陣地に對し攻擊を準備したが氏は其の間偵察斥候となり危險を冒して敵陣地に接近し斥候長の命令意圖に從ひ勇敢機敏に行動して敵情地形を偵察し以て敵前渡河計畫の爲め貴重なる情報をあげ又愈々其の敵前渡河實施に際しては猛烈なる敵の彈雨を意とせず率先渡河を決行し破竹の勢ひを以て對岸の敵を擊破し機を失せず敗退する敵を追擊する等所屬部隊の戰鬪に貢献せし處頗る大であつた。

十月十一日以來列車追擊隊に屬し石家莊元氏及び順德附近の掃蕩戰に參加し次で塲頭鎭及び磁縣附近の戰鬪には豪膽機敏なる行動に依り敵の抵抗を排除して所屬隊の戰鬪に大に貢献し遂に當面の敵を潰滅するに至つた。

所屬部隊は尙も殘敵を驅逐して之を障河々畔に壓迫し十月二十日より同河南岸地區の一堅壘西保障に對する攻擊を準備した。所屬中隊は二十日夜半水深胸に達する障河を渡河し大隊の右第一線中隊となり氏の所屬小隊は中隊の豫備隊となり敵砲彈下に陣地構築に從事した。二十一日夕刻所屬大隊は優勢なる敵に包圍せられ激戰を交へ死傷續出刻一刻苦戰の狀態

となつた。氏は此の時小隊長の命に依り傳令となり第一線に出である中隊長の下に派遣された。折しも十字の敵砲火頻りに附近に落下炸裂し頗る危險なりしに拘はらず氏は勇敢に中隊長の許に至り任務を果たし再び豫備隊の位置に戻らんと數歩駈出したる其の瞬間敵の迫擊砲彈飛來し氏の身邊に落下炸裂し爲めに大腿部及陰部に爆創を受け壯烈なる戰死を遂げた。當時所屬大隊の危機に直面せる折柄大隊の最右翼に位置せる當中隊豫備隊の運用及其の行動は重大價値を有して居たのであらう。此の際に於ける氏の決死的傳令行動は戰勝の一素因をなしたと所屬中隊長が述べて居るに徴しても這般の消息を推察するに難くない。

氏や鄉に在りては誠實溫厚の孝子であり軍に從ひては忠誠勇武衆兵の模範であつた。而して聖戰に參加するや突破戰線實に百數十里其の間降雨泥濘飢渴の苦難を克服し幾度か大河の敵前渡河を敢行し決死敵の彈雨を冒して重任を果たし遂に部隊の危機に方り身を挺して任務を完遂玉碎した。斯かる有爲勇敢の士を喪へるは轉た痛惜を禁じ得ざるも氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史に輝き不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　山崎林

兄は滿洲事變に戰死し弟は王口鎭激戰に彈藥補充の任を完うして職に殉す

氏は鳥取縣東伯郡東鄉村の人にして父を福十郎母をせきと云ひ大正七年十二月五日を以て生れ未だ獨身であつた。兄槙男は昭和八年現役志願をなし松江歩兵聯隊に入隊滿洲事變に參加し同九年三月滿洲國吉林省依蘭縣九里六に於て勇戰奮鬪の後戰死し功に依り勳八等に叙し功七級金鵄勳章を授けられた。氏は昭和八年三月東伯郡東鄉尋常高等小學校を卒業し爾來父母を扶けて農業に從事し入營時に及んだ。性質溫順にして熱誠事に從ひ毫も勞苦を厭はず品行亦方正にして鄉黨一般の風評誠に良好であつた。昭和十一年兄と同じく現役志願に合格して翌十二年一月に松江歩兵聯隊に入營し歩兵砲隊に編入せられ日夜軍務に精勵し良成績を擧げて居た。

昭和十二年七月支那事變勃發するや氏は中井部隊に屬し速射砲中隊の砲手として八月中旬勇躍北支方面の征途に就いた。北支到着以來泥濘汎濫の惡路を冒し飢渴を忍びつゝ津浦線に沿ひ連日の難行軍を續け八月二十五日二堡北方地區に進出した。津浦線の北部地方は渤海灣に注ぐ大小の河水輻輳し又沼澤地域多くして且鐵道線の兩側は楊柳鬱蒼と茂つて敗殘兵の潛伏には屈强の要衝であつた。果然敵は二堡附近にも蟠居して皇軍の南進を阻止せんとして居た。所屬部隊は八月二十九日午後一時三十分頃より之を攻擊したが氏は敵彈雨飛の下に六番砲手として勇敢適切に彈藥搬送の責務を完うし以て速射砲の威力を發揮せしめ午後三時頃敵陣地を奪取するを得た。續いて八月三十一日靜海縣西方王口鎭附近の戰鬪に於ては所屬中隊は安永大隊長の指揮下に午前一時頃折柄の豪雨を衝いて行動を起し未明王口鎭の北方約六百米に陣地を占領午前五時頃天明と共に先づ道路右側の敵機關銃に對して猛射を加へた。敵亦正面及左右の陣地より猛射を浴びせ來り彼我の銃砲戰激烈を極はめた。然れども我が速射砲の適切なる支援射擊に依り友軍歩兵は午前十一時頃には同部落の東北端の一角

を占領するを得所屬中隊は引續き約一時間に亘り敵の占據せる附近の家屋其の他に向つて掃蕩的猛射を浴びせた。然れども頑強なる敵は此處を最後と抵抗を續け我が速射砲陣地にも敵の銃砲彈は急霰驟雨の如く集中し來り所屬分隊も屢々苦戰に陷つたが氏は敢然として其の職責に邁進しよく速射砲の全威力を發揮せしめた。斯くて午後一時頃我が第一線部隊が王口鎭北城門外の一軒屋附近に達せる時氏の屬せる第二分隊の砲側彈藥將に缺乏せんとするや氏は決然敵彈雨飛の間に砲側に彈藥を搬送し來り將に所定位置に置かんとしたる其の瞬間敵彈飛來無念なるかな氏は胸部及心臟部に貫通銃創を受け午後一時三十分壯烈なる戰死を遂げた。所屬分隊は氏の機宜に適せる彈藥補充に依り其の後間もなく敵の掩蓋機關銃を撲滅し以て右第一線中隊たりし第八中隊の攻擊に極はめて適切なる支援を與ふるを得又所屬部隊は氏等の尊き犧牲に依り爾後の戰鬪有利に進展し折柄友軍飛行機の協力を得て當面の頑敵に痛擊を加へ敵は多大なる損害を受け算を亂して南方へ敗走した。

氏や鄕に在りては純朴眞摯の孝子たり純忠の迸る處現役志願をなして軍に從ひ日夜精勵軍人精神を涵養し武技を鍛錬し上下の信望を受けて居た。果然聖戰に臨むや名狀すべからざる泥濘路に運動容易ならざる火砲彈藥車を運搬し愈々砲火を開くや敵彈雨飛の下に毅然として自己の職責を全うして遂に玉碎した。寔に是れ皇軍步兵砲隊の本領を發揮し又一般軍人の模範たる者であつた。斯かる勇士を喪へるは痛惜禁ずる能はざる所而かも兄弟相續いて皇國の爲め最も尊く身命を捧げたるは烈々として皇軍戰史を飾り秀芳千古に傳ふべきであり其の不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　山本唯夫

幹部を喪ふも尙奮戰大敵を擊破す

氏は大分縣南海部郡東中浦村の人にして亡父を五良吉母をリヨと云ひ明治三十四年一月七日に生れ故山本善治郎の養子となり妻タケノとの間に長女和枝を擧げた。性溫順にして諸事實直を旨として世間の風評も良好であつた。大正二年三月東中浦尋常小學校を卒業後漁業に從事し入營時に及んだ。大正十年十二月現役兵として步兵第七十七聯隊へ入營し同十三年一月善行證書を附與せられ滿期除隊となつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召長谷川部隊に屬し中支方面への征途に就いた。十月中旬梅丹宅附近の守備に於ては所屬隊は重藤支隊の指揮下に入り老丹宅附近の陣地を守備したが當時連日降雨の爲め泥濘脛を沒する難路且暗夜を冒して敵前百米內外の線に向ひ匍匐前進したが連續的に敵の重輕機關銃の猛射を受けつゝも勇敢沈着に所望陣地を占領し爾來殆んど不眠不休の努力を以て敵情監視其の他の重要任務を完全に遂行した。

十月十四日よりの都宅附近の守備に於ては佐藤部隊の指揮下に在りて許宅附近に位置し新鎭方面の敵情監視及散兵壕の構築鐵條網の設置等に熱心從事し所屬部隊に寄與する所多大であつた。續いて十月十七日より約一ケ月に亘り黃宅附近の守備に就き依然佐藤部隊の指揮下に周宅附近に陣地を占領する事になつたが夜暗を利用し敵前二三百米の地點に進出し晝夜を別たず散兵壕を構築し又間斷なき敵火の下に小隊長との連絡を確保し尙壕內浸水中に在りて率先警戒勤務に精勵した。

十一月中旬劉河鎭附近の戰鬪に於ては所屬部隊は小野部隊の指揮下に第一線攻擊部隊となりしが氏は第三小隊第二分隊

小銃手として敵彈雨飛の中を從容として前進路の偵察に任じ十四日拂曉には勇敢に敵陣地に突入し奮戰力闘所屬隊をして赫々たる戰勝を獲得せしめた。十一月十五日以後南京攻略時に至る迄は軍司令部の警備に任じ大場鎭古里村常熟蘇州無錫句容に移動し南京攻略時には湯水鎭に位置して居たが十二月十三日午前十時三十分頃敵兵三四千人南京方面より湯水鎭の北方孟塘方面に向ひつゝありとの情報に接し所屬中隊は大隊長河野少佐の指揮の下に此の敵を擊攘すべき目的を以て孟塘に向ひ急進中孟塘の南方約千五百米の地點に於て先づ重輕機關銃を有する約四五百名の敵と遭遇し忽ち激戰を展開するに至つた。友軍は僅かに二百餘名の寡兵なるに中隊長は重傷を負ひ小隊長は戰死し其の他三十餘名の戰死傷者を出したが氏は戰友を勵まし勇敢に奮闘し交戰一時間三十分に亘りしが敵兵東方に敗走の徴を認むるや神速果敢に追擊に移らんとせる時不幸敵彈の爲め右上膊部に骨折貫通銃創を負ひ第三野戰病院に收容され手厚き治療を受けたが十四日午前八時竟に悼ましくも江南の華と散つた。併し氏等の勇戰に依り敵は數百名の死體と多數の小銃機關銃迫擊砲を遺棄して敗走し所屬部隊は其の後該敵を湯水鎭北方高地に擊滅し軍司令部警備の重任を全うするを得た。

氏は齡既に後備役の末期に達し志氣益々旺盛進んで難局に當り克く皇軍々人の精華を發揚した。あゝ泥土にまみれ散兵壕の雨水に腰を沒し缺食不眠不休あらゆる困苦缺乏に耐へ又熾烈なる銃砲彈雨を身に浴び乍ら唯々君國の爲めに大敵たりとも懼れず死力を竭して奮戰し竟に聖戰の尊き犧牲となつた。洵に愛惜に堪へないが併し氏の勳功たるや天晴れ皇軍戰史に至記せられて其の芳名は千載に傳はるべく英靈亦不滅に生き尙も皇國並に一家特に愛子の將來に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功六級　山本貞夫

突破戰線百數十里屢々殊勲を奏し正太戰線の華と散る（良民良兵の範）

氏は廣島縣佐伯郡觀音村の人にして父を六一母をアサノと云ひ大正五年二月十八日に生れ未だ獨身であつた。性溫厚篤實にして孝心深く上を敬ひ下を慈しみ責任觀念强く氣慨に富み實踐躬行以て青少年を感化する等世上稀に見る模範青年であつた。近鄕近在の人々よりもうちにもあんな息子が居たらなア、あんな息子がほしいものだと歡賞されて居た。事實氏は六歳の頃より佛壇の前に合掌禮拜し長ずるに從ひ言動愈々眞摯透徹せる信念の下に倦む事を知らざる努力を捧げた。例へば毎朝三時に起床し馬に飼葉を與へ月を踏んで田圃に出でゝ父母の家業を助け星を載きて家路に就くといふ有樣で裕々一町六反歩の自作をなし更に農繁期には他家の分まで手傳ひ又家計簿の記入及び收支決算に至るまで一切を引受け尙夜分は早稻田講義錄に依り研究を續け寄席映畫にも近寄らず酒煙草は一切口にせず又入營後に於ける父母の勞苦を察しては三ケ年分の薪を自ら用意したる程の孝心勤勞の人にして氏の日常を見聞せる村民は涙を湛へて歎賞せざる人はなかつた。

昭和六年三月鄕里の高等小學校を卒業したが頭腦明晰常に優秀なる成績を擧げ又在學間を通し氏と同方面より通學する下級生を途中收容同行して細大となく世話をなし爲めに學校職員よりも感謝されて居た。小學校卒業後は家業に從事する

傍ら青年學校へ通學し辯論及び武道特に劍術に長じ學校を代表して屢々辯論大會及劍術大會に出場し常に第一位を占め各方面より賞狀賞品を授與された。氏は亦青年訓練の成績群を抜き常に修養を怠らず青年團員を指導誘掖して團の向上發展に資すると共に個人の品性を矯正陶冶する等青年の模範として査閲官より表彰狀青年團長より褒賞狀を與へられ其後青年團の役員及防護團第一分團長に推擧せらるゝ等一村の信望を蒐め尚農業にも創意工夫を加へ蔬菜品評會に自作品を出品し一等賞或は二等賞を與へられた。昭和十一年十二月現役兵として龍山歩兵聯隊へ入營常に優秀なる成績を擧げ下士官候補者として採用せられた。

支那事變起るや森本部隊深野中隊に編入せられたが氏等下士官候補者は八月下旬に至り屯營を出發し良鄕に滯在中の所屬中隊へ追及した。而して九月十二日氏は竹鼻將校斥候の要員として良鄕より約三里を隔つる小十三里村附近の敵情偵察に出かけ豪膽にも敵前二十米に接近して偵察中隣家に潜みありし敵より急射を受けた。氏は冷靜一發も應射せず約三十分間に亘り靜かに敵情を偵察して貴重なる資料を得て之を提出した。同月十四日氏の所屬分隊は夕刻に至り重要命令を受けた。即ち川井分隊は中隊の進路上約二里の某要點を占領し明朝に於ける中隊主力の進出を掩護すべしと謂ふのであつた。其處は敵前約六百米の地點で分隊の爲め實に決死的の任務であつたが分隊は該地に達した。氏は徹宵至嚴なる警戒に任じ翌十五日午前三時半中隊主力に合し其の後所屬大隊の中央第一線となり寶店驛の敵陣地を攻撃し午前六時三十分之を占領し餘勢を以て其の西南部落を攻撃して之を奪取した。敵は其の夜裝甲列車其の他を以て再三夜襲して來たが悉く之を撃退した。翌十六日所屬中隊は寶店鎭の敵陣地を攻撃したが敵は半永久のトーチカに立籠り熾烈なる猛射を浴びせ來り中隊は山西曹長以下二十三名の戰死者を出した。氏は此の時手榴彈を以て渡り合ひ遂に小隊長と共に敵主陣地に突入し一番乘りの榮譽を擔つて頑敵を粉碎した。爾來四日間兵團豫備隊となり追撃前進を續け月末に滹沱河北岸地區に進出した。

滹沱河南岸一帶の敵陣地は戰線實に二十里敵の精鋭二十五萬を以て北支戰線最後の支撐と恃む堅壘に據り乾坤一擲の決戰を企圖して居た。此の時所屬部隊は西北正面たる王母村附近の攻撃を擔當し九日午後四時行動を起し同八時二十分より戰鬪を開始した。氏は第一線小隊の散兵として本戰鬪に參加したが九日夜氏の分隊は工兵隊と協力して渡河せんとするや敵彈驟雨の如く飛來し加ふるに鐵舟坐礁し進航不可能となつた。此の時氏は率先河中に飛び入り身を犧牲にして鐵舟の引出作業に着手せる爲め工兵隊も勇氣百倍數名の戰友亦之に協力し遂に引出作業に成功し中洲に到着するを得た。然るに暗夜先遣小隊の位置不明なりし爲め之が連絡を命ぜらるゝや氏は勇躍熾烈なる敵銃砲火を冒して遂に其の位置を確めて中隊主力を誘導し其の後第一線分隊内に在りて勇戰奮鬪十日午前八時二十分當面の敵を撃破して王母村南端に進出した。

所屬部隊は其の後正太線に沿ひ太原方面への作戰に從事するに至つたが十月二十一日より三十日にかけ木曾附近の戰鬪には迂回隊となり殊功を奏し續いて松溝村柏水井溝附近の戰鬪には敵の退路を遮斷し又石門口附近の戰鬪には同地北方高地夜襲の爲め將校斥候の一員として大膽機敏に活躍して克く斥候長を輔佐して其の任務を完うした。

所屬中隊は十月二十九日東溝村附近の敵陣地を攻撃する目的を以て午前七時五十分行動を起し午前九時三十分より攻撃を開始した。氏は其の際第一線火線分隊員として東溝村北側高地の敵に向つたが沈着豪膽常に分隊の先頭に在りて敵に肉薄し以て分隊員の攻撃前進を誘起した。然るに敵も必死の抵抗を試み嵐の如き猛射を浴びせ來りし爲めに我が前進は困難

となつた。此の時氏は敵前の一地區に死角のあるを發見して速かに之を分隊長に報告すると共に單身前進を繼續して敵前三十米に達せし時小隊長以下も之を知り一意此の死角に向ひ猛進しありしが竟に敵の發覺する所となり已むなく前進を中止し決死隊數名を選拔して之に輕裝せしめ手榴彈を以て突入すべく命じた。氏は即時志願して之に加はり手榴彈二個を携行し敵陣地目かけて投擲すれば見事に命中續く一個を投げつけ炸裂の瞬間を利用して突入し敵兵四、五名を瞬く間に刺殺して同陣地占領の端緒を開き小隊突擊の動機を與へた。折しもあれ敵第二線陣地の敵機關銃より猛烈なる側射を集中された。氏は其の機關銃位置を確めんと立ちかけるや無念頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。然かし所屬中隊は氏等の決死的奮鬪に依り午前十一時敵を粉碎して同陣地を占領した。

氏の鄕に在るや現代稀に見る模範青年にして又戰塵の餘暇には父母の安否を尋ね毎日「無理して身體を損せぬ樣に」と希ひ又實弟に對し質實剛健の敎訓を施す等寔に至誠の躍如たるものがあつた。更に出でゝ軍務に服するや成績拔群常に下士官候補者の第一位を占め其の前途に多大の期待をかけられて居た。而して今次聖戰に參加するや突破戰線實に百數十里其の間屢々殊勳を奏し將兵齊しく感激措く能はざる所であつた。寔に是れ皇軍步兵の精銳にして一般軍人の龜鑑たる者である。斯かる忠勇精悍の士を喪ふ眞に痛恨哀悼の情を禁じ得ざるも氏が累次の功績たるや皇軍戰史に異彩を放ち芳名は千古に流れて懦夫をも起たしめ烈々たる其の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

因に氏の訃報を得たる兩親は一滴の涙さへ見せず倅がお國の爲めにお役に立つたので滿足です。御奉公させたい爲め今日迄大切に育てゝ來たのですから本懷此の上もありません云々と又氏の實兄も步兵下士官で曾つて陸軍戶山學校に於て恩賜の銀時計を賜はり目下戰線に活躍中である。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に破格にも功六級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　山本新五郎

忠孝兩全の勇士、湯水鎭附近の危機を救ひて玉碎す

氏は大分縣南海部郡中浦村の人にして明治三十一年四月三日の生れ亡父を菊藏亡母をとよ妻をゼンと云ひ二男四女があつた。性篤實上長を尊敬し隣人との交り圓滿にして信仰心殊に厚く部落內の各種の信仰會には必らず參加勤行して部落民の宗敎信念の啓發に寄與する所大なるものがあつた。父は氏の幼少の頃より病床にあつた關係上氏は早くより身を以て之が看護に當り具さに浮世の苦勞を嘗めた。父母によく仕へ弟妹を勞はり入りては勤勉業に服し出でゝは公正範を示し鄕黨の信望最も厚かつた。明治四十四年東中浦尋常小學校卒業後專ら家業（農兼漁）に從事して居た。母は大正三年十月三十日實業之日本社婦人世界孝女節婦表彰會より表彰せられた程の賢婦人で永年に亘る病夫の看護と子女の扶育とに身を捧げたのであつて實に此の母にして此の子ありと謂ふべきである。

大正十年一月徵兵として步兵第七十七聯隊に入營し在隊中成績良好にして除隊に際しては善行證書を授けられた。又在隊中給與の大部分を貯蓄して之を家鄕に送金する等父母を思ふ純情に至つては誠に感嘆の外はない。

支那事變起るや昭和十二年八月應召長谷川部隊河野隊大賀隊に屬し九月勇躍征途に就いた。斯くして江南の一角に上陸以來日夜精勵十月初旬に亘る間各地に於て或は戰鬪に或は警備に任じ克く困苦缺乏を征服して其の責務を完うした。

十月十三日南京を距る數里湯水鎭附近の戰鬪に於ては氏の所屬隊たる河野隊は當時軍司令部の警衛に任じて居たのであ

るが午前十時三十分頃敵兵二、三千南京方面より軍司令部の北方高地孟塘方向に向ひつゝありとの報に接し氏の屬する中隊は之を攻擊の爲め出動し午前十一時二十分孟塘西方千五百米突の地點に達したる時多數の自働火器を有する四、五百の敵と遭遇し約一時間三十分に亘る激戰の後之を東方に擊退せしめた。其の間氏は率先勇猛果敢に奮鬪し多數の敵を射殺し寄せ來る大敵に對し數度の突擊を敢行して多數の敵を刺殺した。氏は猶も後方部隊の有無を偵察せんと立上りし時不幸一

彈飛來顏面に貫通銃創を受け惜しくも壯烈なる戰死を遂げた。抑も此の戰が如何に激戰であつたかは中隊長重傷を負ひ小隊長戰死し其の他戰死傷者三十有餘名に達し敵の遺棄屍體亦實に數百に上つた事に依つても察せらるゝ次第である。而して此の激戰に各指揮官を失つた氏が尙不屈不撓一意沈着射擊を續行し敵に多大の損害を與へ遂に之を潰走せしむるの因を作つた事は其の武功拔群と謂はねばならぬ。

氏や鄕に在つては父母に孝にして而かも村の中堅となつて各方面に活動し今次軍に從ひ遂に江南の華と散りしが其の忠勇壯烈は永く南京攻略史上に輝き英靈は護國の神として皇國を守護し又必らずや遺兒の將來に於ける多幸の爲絕え間なき加護を與へる事であらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　山本半次

津浦線邱莊の激戰に傳令の重任を果たし職に殉る

氏は兵庫縣加西郡北條町の人にして大正五年三月十九日生れである。父を林吉母をきりと云ひ氏は未だ獨身であつた。資性溫厚篤實家業に克く精勵し親孝行であつた。昭和五年三月北條高等小學校を卒業昭和十一年七月青年訓練所の課程を修了した。小學校に於ては尋常高等の各學年共に學力操行優秀にして每に優等賞を授與せられ又青年訓練所に於ても精勤賞を授與されてゐる。而して昭和十二年一月徵兵として入營したのであつたが半歲の後支那事變勃發するや沼田部隊に編入せられ勇躍征途に上つたのである。北支上陸後は息つく暇もなく軍の集中間或は警備に或は掩護に任じ愈々九月二十四日中隊は第一線部隊となり午前三時張新庄附近の最後陣地たる第四陣地を攻擊奪取し拂曉には張新庄の村落を占領した。此の間氏は中隊長の傳令として初陣にも拘はらず彈丸雨注の下夜間兎もすれば中隊の所在を見失はんとする困難を冒し中隊長の意圖命令を各小隊に傳達した。張新庄村落占領後敵より夜襲を受くるや兵員僅少にて防戰に事缺くと見た氏は勇敢にも第二小隊防禦方面に駈出し敵に猛射を浴びせ中隊の逆襲擊退を容易ならしめた。斯くて九月二十八日正午頃より劉八里庄及び周八里庄の敵に對する攻擊十月二日午後二時五十分より趙官屯及王院附近の敵に對する攻擊十月六日德縣附近に於ける次期作戰の準備間共に中隊長傳令として克く活躍し其の任務を完うした。

十一月八日午前八時中隊は二ケ小隊を第一線とし盧莊北端より邱莊方面に攻擊を開始した。此の攻擊は中隊の獨立攻擊なりし爲め戰鬪正面擴大し相互の連絡容易ではなかつた。而かも戰鬪の進捗に伴ひ王李莊占領後第二小隊は左第一線より右第一線に移動せし爲め一層の困難を加へ剩さへ邱莊の敵より猛火を蒙り戰場は平坦據るべき地物なく之が連絡は頗る困

難に陷つたのであつた。此の間氏は中村伍長と協力し鋭意連絡確保に努力し敵前百五十米の地點附近まで前進するに至つた。此時中隊長より盧莊附近に到達せる大隊長に砲兵の掩護射撃を要求すべく命ぜられ彈雨の下平坦地を疾驅して大隊本部に無事到着し其の旨傳達し任務を果たして中隊長の許に復歸せんとし王李莊東北側まで歸りし其の際右大腿部に貫通銃創を受け動脈出血の爲め間もなく名譽の戰死を遂ぐるに至つた。

氏は小學校在校時代の成績に徴するに勤勉にして秀才であつた。初年兵の身を以て終始選ばれて中隊長傳令に服したるも亦宜なりと謂ふべきである。傳令の如き獨立任務に對し安心して委せ得る人物であつたからである。事實累次の戰鬪に於て身命を君國に捧げ死力を竭し危險を冒し困難を排除して其の任務を完うしてゐる。其の旺盛なる責任觀念は永く軍人の範として傳へらるゝであらう。父母の觀たる氏は「此の上なきよき行をする者でした」と謂ふのであつた。子を觀る親に如かず實に氏は親に對しては孝君に對しては忠鄕にありては良民であり戰場に立ちては眞に良兵であつた。是れ蓋し古來稀承尊重せる大和民族の精華と讃へ得るであらう。氏や前途洋々の身を以て中途に斃る。惜みても尙餘りありと雖も顧て考ふるに百歳の齡を保つもの幾人かある。死所を得て玉と碎け惜まれて逝く。氏や寧ろ本懐であつたであらう。氏今や王李莊の華と散り亡せしと雖も其の職責遂行の示範其の武勳は永く青史を飾るべく不滅の英魂は護國の神として良兵良民の上に又一家の守護神として其の多幸繁榮の爲めに加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　柳内宗三

沈著寡默の勇士、馬落坡に奮戰し突擊の動機を作りて玉碎す

氏は兵庫縣姫路市の人にして大正七年十月八日生れである。父は宗太郎母はことと云ひ氏は未だ獨身であつた。資性溫厚從順寡默にして友情深き人であつた。昭和九年五月縣立姫路中學校四年を修了した。曾て十歳の折大阪朝日新聞の童謡募集に應じ一等に當選しレコードにも吹込まれたことがあつた。卽ち「ハトハトドコマデトブアヲイソラノ上ヲサムイ風キツテドコマデトブ小サナハト」氏は此道の天才であつたやうだ。昭和十二年一月徴兵として姫路歩兵聯隊に入營機關銃隊に編入せられた。

支那事變勃發するや沼田部隊に屬し勇躍征途に上つた。北支上陸後八月二十七日馬廠河附近の攻擊戰鬪に於て敵陣地前千米附近に達せし時敵の一齊射擊を蒙つたのが氏の初陣であつた。氏は四番銃手として猛火の中に自若として毫も危險を顧みず迅速機敏に機關銃の全威力を發揚し隣接中隊の行動を容易ならしめた。其後九月二日より陳官屯に向ふ集中行軍に際しては腰を沒する泥濘惡路を冒し己の勞苦を顧みず愛馬を勞はり以て集結に遺憾なからしめた。九月九日丁莊の夜襲に際しては午後十一時行動を起し第一線中隊が丁莊の側背より突入せんとするや敵は之を察知し小銃重輕機關銃に迫擊砲さへ加へて猛火を浴びせて來たのであつたが之れを冒し膝を沒する泥濘地を跋涉し水濠を跳越え敵陣地前地雷の爆煙中を物ともせず第一線歩兵に密接跟隨したが東部丁莊に健在せる自動火器が特に猛威を逞ましうしつつあることを偵知し直ちに

此敵を猛射し致命的損害を與へて之を覆滅し克く大隊の丁莊占領を容易ならしめた。本戰闘に於ける光輝ある勝利は實に氏の勇敢機敏なる行動に俟つ處多く殊勳拔群と認められて居る。

九月二十一日の馬廠坡附近敵陣地の夜襲に方つては突擊中隊たりし第二中隊が敵の前進陣地に近迫中陣地前五六十米の所に於て竟に敵に發見せられ頑强なる抵抗を受けて前進を阻害せらるゝに至つた。此時氏は直ちに同地に陣地を占領して敵の自動火器に猛射を加へて之を沈默せしめ突擊中隊をして突入せしむるを得たのである。爾後第一線歩兵に先立つて勇敢にも敵主陣地前二百米の近距離に挺進するや俄然前方掩蓋機關銃より猛烈なる射擊を受くるに至つた。沈着剛膽なる氏は直ちに同地に陣地を占領して此の側防機關銃を射擊し之を制壓中不幸敵彈頭部を貫き壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

戰友の書面に述懷して曰く「平常は靜々默々とした彼だつた」「已に頭部の貫通、言切れて行く、唯只殘るものは重任を果たした喜びの如く感じられる從容たる面持であつた、あゝ勇敢なる彼にして果たし得たのだ」此の短き一節の中に氏の面目躍如たるものがあるではないか。氏は實に默々不言實行の人であつた。此の如き爲人は平時見榮はないが實戰には役に立つものである。勇敢沈着剛膽之れ戰闘の勝敗に重大なる影響を及ぼす機關銃の射手としては不可缺の要件で此上もなき適材であつた。氏が分解搬送に方り機關銃の銃身を擔ひて彈丸雨注の中を勇敢に躍進する其姿は戰友の感嘆措かざる所であつた。此戰績の華々しかりにつけ氏の童謠を振り返つて見ねばならぬ。氏は子供心にも傳書鳩が重い使命を翼に負ふて勇ましく大空に颯風をも脈はずに飛び行く姿が腦裡に描かれたのであつた。而來氏は十年の月日を閲し猛暑肌を灼く大陸の地に機關銃手たる重き責任を荷ひ之を果たすが爲に彈雨の下勇躍奮進す曾て幼き心に點描せる憧憬を默々として而かも勇敢に剛膽に實踐し以て重大なる職責を果たしたのである。欣然瞑目せりと云ふも宜なりと謂ふべきである。氏今や馬廠坡に華と散りしと雖も燦たる武勳は靑史を飾り其遺せる不言實行及び責任觀は永く軍人の鑑として仰がるべく不滅の雄魂は護國の神として尙も大陸の天地に雄飛して聖戰を加護することであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　安丸友治

臨終に尙支那軍の膺懲を叫んで德州郊外の華と散る

氏は群馬縣高崎市通丁の人にして父を次平亡母をはつえと云ひ大正二年九月二十日に生れ未だ獨身であつた。性溫順にして寡言實行力に富み又孝心深く弟妹を勞はり家業に精勵し一鄕の模範靑年として知られて居た。昭和三年三月高崎中央小學校高等科を卒業昭和八年十二月現役兵として龍山歩兵第七十九聯隊へ入營昭和十年十月一等兵を以て現役滿期となつた。

支鄕事變勃發するや昭和十二年八月下旬應召森田部隊に屬し勇躍征途に就いた。而して十一月二日第五中隊は王莊附近の敵陣地に對し攻擊準備中であつた。氏は後方より此中隊に補充され同日午後一時到着第三小隊第二分隊に編入せられた。斯くて中隊は午後六時より王莊の敵陣地を攻擊して之を奪取したが氏は此村落の北端入口を確保の爲徹宵警戒に任じ

三日午前四時三十分に至るや敵約一中隊の夜襲を受けた。氏は沈着克く之に應戰多大の損害を與へて擊退した。

十一月三日所屬小隊は除庄に據る敵を攻擊すべき目的を以て午後二時三十分王庄を出發し先づ四盤磨に向ひ前進した。時恰も除庄西側及南側の敵は斜射側射を加へ頑强に抵抗したるを以て敵前六百米に於て友軍砲兵の集中火力の效果を利用し逐次第一線を進める事になつた。氏は此際所屬小隊の散兵線内に在りて前進中であつたが中隊主力の突擊決行時には第一線の左側を警戒しつゝ突進し愈々第一線が突入に移るや氏は機を失せず其左側より敵陣地に突入敵兵一名を刺殺し身を以て中隊の左側を安全ならしめた。

十一月四日所屬中隊は彰德附近高樓庄の敵陣地に對し午前七時より攻擊を開始したが氏は所屬第一線小隊の左分隊の散兵として勇猛果敢に攻擊前進し鐵條網破壞班の突擊路完成と同時に機を失せず之に突入し潰走する敵に尾して該村東端に進出し鐵道線路上を停車場方向に退却する敵を猛射し之に多大なる損害を與へた。次で所屬小隊が該停車場の占領を命ぜらるゝや鐵道線に沿ひ其兩側附近に於て抵抗する敵を撃破し電光石火の勢を以て停車場北側に進出し圍壁内に於て手榴彈を以て抵抗する頑敵に對し或は射擊を以て或は手榴彈を投擲して之を制壓し愈々突擊に移るや氏は猛然として突進敵兵三名を殪して將にホームに進出せんとする一刹那掩蔽部内より投擲せる敵の手榴彈は氏の心臟部に爆創を與へ氏は其場に打倒れた。戰友は駈寄つて何か言ふ事はないかと尋ぬれば氏は「何も言ひ遺す事はないどうか支那軍を徹底的にやつゝけてくれ」と言ひ終つて瞑目した。

前山分隊長の日記に依れば『此日の戰鬪は森田部隊出征以來の激戰であつた。午前五時より行動を起したが吐く息も白く土塀も屋根も枯柳からも水蒸氣が立昇つて居た。殷々たる砲聲は曉霧を破つて響き渡る。前進！　の命令と共に勇躍攻擊を開始すれば敵の小銃彈は空氣を切つて耳元をかすめ行く。安丸！　井野！　之は一昨日補充された許りの新部下の身を案ずる分隊長の安否點檢の聲であつた。二人は元氣よくハーイと答へる。馳せては伏し伏しては馳せ絶間なき決死の躍進であつた。突擊準備だ！　元氣で行くぞ！　目指す安陽驛は目前だ。何時呼んでも安丸の返事はおくれなかつた。何時の間にやら安丸は分隊の最前線に崩れた土塀を楯に敵を必死と撃ちまくつて居る。安丸！　もう一息だ頑張れと叫ぶとハーイと元氣な返事遂に分隊も小隊も一團となつて突擊を敢行した。だが敵の班長は一番先きに進んだ安丸を殪した。安丸斃るゝや戰友等は此奴がと件の班長を目茶苦茶に叩き潰して安丸の仇を其場に打取つた』とある。

彰德攻擊に方り此停車場は一の要點であつた。而かも蔭蔽して死守せる敵に對し勇猛果敢率先一番乘りをなせる氏の膽勇は一際目立てる武者振であつた。果然大隊戰勝の一素因となつた。斯くして尊き人柱となつたが氏の功績は北支の皇軍戰史に輝き其名は皇軍の華と謳はれて千載に芳ばしく其英靈は不滅に生き皇國を守り又一家の多幸繁榮を加護するであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　安田保壽

良民良兵の範、保安攻撃に偉勲を樹てゝ散華す

氏は茨城縣筑波郡旭村の人父を昇母をたけと云ひ大正五年八月五日生れで未だ獨身であつた。昭和七年筑波郡吉沼高等小學校を卒業し爾後上京して織物商を修業した。氏は責性溫厚篤實にして責任觀念頗る强く學業成績も亦常に優秀で級中の模範生であつた。又兩親に對しては溫良で孝養至らざるなく爲に近鄕の評判頗る良好であつた。

昭和十二年一月十日徵兵として水戸歩兵聯隊機關銃隊に入營し誠心誠意演習勤務に精勵し其成績優秀にして七月一等兵に進級し同時に同部隊中より唯一名拔擢されて暗號教育を受くることゝなつた。

支那事變勃發するや間もなく溫井部隊古泉隊に屬せられ北支方面へ向け征途に就いた。出發に際し必ず戰功を立て皇國の爲め靈忠報公の誠を致しますと兩親に誓ひ戰地到着後も屢々兩親に宛て常に健全である愉快である何卒懸念すること無き樣にと兩親の安心を希ひ又每回家門に恥ぢぬ樣皇國男子として充分に働く覺悟であると申越して居る。之と云ふのは氏は自己の生家は過ぐる嘉永五年地頭用所より「勤行相盡候間苗字帶刀御免」の覺書を下附せられてある事を兩親より聞ひ聞かされ又其の實物を見せられ小供心にも感銘し幼少の頃より此の家門の名譽を汚さぬ樣にと常に念頭に戴き一言一行と雖も忽がせにしなかつた爲である。

氏北支に上陸するや當時該地方一帶は稀なる豪雨の後にして到る所出水し道路は泥濘膝を沒し我が軍行動の困難は名狀し難きものあり其の補給機關は惡路と急速なる軍の行動に追隨意の如くならず第一線部隊は屢々粟甘藷に漸く飢を凌ぐ狀況であつた。斯かる狀況下に所屬隊は敵を驅逐しつゝ日夜强行軍を續け將兵の勞苦は言語に絕するものがあつた。此の間氏はあらゆる辛酸困苦缺乏を克服し中隊指揮班員として勇敢積極的に活動し以て重要なる命令の傳達或は各部隊間の連絡の任を完うした。斯くて所屬兵團は九月二十二日より保定附近の敵陣地を攻撃する事となつた。保定は京漢線上の要衝にして附近一帶の陣地は地の利を占め構築には長年月を費し頗る堅固なものであつた。所屬溫井部隊は二十三日郭莊附近の敵を攻撃し續いて二十四日午前六時半より保定城北門陣地に向ひ攻撃した。氏は依然指揮班員として終始中隊長に隨行し敵の

猛火を冒して勇敢に東奔西走、中隊長の命令意圖を各小隊長に傳へ其の指揮を容易ならしめた。而して我が第一線歩兵部隊の攻撃進捗に伴ひ中隊長は張莊東側にありし第一小隊を率ゐ敵陣地前三百米の地點に射撃陣地を推進した。此の射撃陣地は敵の要點殊に其の側防機關を射撃するに最も適當なる地點にして第一小隊は玆に陣地を占領するや急襲的猛射を敵に浴びせ多大の効果を擧げた。間もなく第二小隊も此の位置に陣地を占領し猛射を開始し中隊長は更に第三小隊を第二小隊の右に進出せしむべく其の命令傳達を氏に命じた。氏は此の時とばかり霰の如く降り來る敵彈を冒して第三小隊長の許に至り無事傳達を爲した。氏は其の傳達を終るや勇敢にも再び雨下する敵火の下を中隊長の許に歸つた。時に午前八時四十分頃にして中隊長は夫より十數分前悼ましくも壯烈なる戰死を遂げたのであつた。氏は悲嘆やる方なく同時に敵愾心は奮然として氏の胸に湧き必ず敵を撃滅して中隊長の仇を討たんとして立つた。其瞬間惜しや氏は左大腿部に盲貫銃創を受けて其の場に倒れた。時に午前八時五十分にして傍に居た戰友並に染谷衞生兵は直ちに應急手當を施し後送して第四野戰病

院に入院せしめた。而して第三小隊は氏の命令傳達に間もなく陣地を推進し玆に中隊は全力を擧げ機關銃隊の威力を最高度に發揚して敵の側防機關を制壓し歩兵の突擊を援助し遂に午前九時五十分北門陣地は我が有に歸して城頭高く日章旗を飜すに至つた。其の後氏は保定第三兵站病院に於て厚き療養を受けたが何分重傷の爲其の甲斐もなく十月二十二日午後七時二十五分眠るが如く華北の華と散つたのである。

氏重態に陷り臨終の近きを自覺するや附添の看護兵野口豐吉氏に代筆を依頼し左の二首を認め兩親に送らしめて靜に瞑目した。

辭世

國の爲いくさの庭に立いでゝ花と散るこそうれしかりけれ

兩親へ

思へどもつきぬ思ひの數々を遺し行く身ぞ悲しかりける

嗚呼氏幼より親に孝にして常に家門の名譽を汚さゞらん事に努め其の聖戰に從ふやあらゆる困苦辛酸を克服し至誠一貫水火尙辭せず從容として死地に其の任を完うす。正に是れ皇國軍民の龜鑑と謂ふべきである。斯の如き有爲の士を聖戰の初期に喪ひたる事は洵に痛惜の極みである。然かし土の戰場に臨むや元より生還を期せず。氏の生涯は短かゝりしと雖も其の赫々の武勳は永へに皇軍戰史に輝き千載に語り傳へられて家門の名譽を高上し其の英靈は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙も皇猷を扶翼し奉り又尊き加護佑助を兩親の上に垂るゝ事であらう。

氏は戰傷死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍工兵上等兵勳八等功七級　八木爲一

傳令の重任を果し瀕死の重傷を負ふも尙戰友を勵まし江南の華と散る

氏は神奈川縣高座郡大澤村の人にして亡父を宗太郎母をウシと云ひ大正四年八月二十五日に生れ未だ獨身であつた。資性快活機敏にして積極進取の氣象に富み交際圓滿大事に臨みては頗る沈着剛膽であつた。昭和五年三月横濱市浦島高等小學校を卒業し其の後は農耕に從事する傍ら鐵道保線見習として精勵し家計を扶けて居た。昭和十一年一月徵兵として赤羽工兵聯隊に入隊爾來克く軍務に精勵し同年十二月一等兵に進級した。

支那事變起るや獨立工兵今田部隊に編入若山中隊喇叭手兼中隊指揮機關の一員として昭和十二年十月十二日勇躍征途に就いた。之れより先き勳員下令に當り家郷に送りし書面中「渡支の後は日頃練り鍛へた腕を十二分に發揮し御奉公致す覺悟で居ります云々」と又出征途中大阪より村役場宛の書信中には「此の上は村のため國のため君の御爲めきつと〳〵立派な手柄を立てる覺悟です。生きて再び故郷に歸ることは期しません」とあり一死殉忠の決意牢固たるものがあつた。中支戰線到着後十月十二日中隊が金絲娘橋、新倉鎭を經て目的地たる廣幅橋に向ふ途中廣陳鎭附近に差懸るや午後五時三十分頃敵の射擊を受け之に應戰し交戰實に數時間に及んだ。此の間氏は彈雨の中を傳令として數回に亘り神速確實に都度重要使命を果たし以て中隊長の戰鬪指揮を容易ならしめ遂に敵を擊退して目的地に向ひ前進を繼續することを得しめた。又航行中は常に積極的に舟長を輔佐する等氏の活躍は衆の模範であつた。

十月十四日所屬中隊長の指揮に屬し根東挺進隊に配屬せられ折疊舟に乘船歩兵と共に午後十時行動を起してクリークを航行前進中廣幅橋附近に差懸るや「トーチカ」陣地に據れる敵より機關銃及小銃の猛射を受くるに至つた。挺進隊長は此

の敵を撃滅するに決し午前四時五十分頃上陸準備の命令を下し午前五時クリーク左岸に停舟して上陸せしめ其の完了を待つて攻撃前進の命令を下した。此の時氏は命令一下勇躍して上陸し第一線に在りて敵彈雨飛の下勇敢機敏に中隊長と小隊長間の連絡に努め上陸直後に於ける困難なる中隊長の掌握指揮を確實ならしめ以て中隊長の意圖の如く各小隊を行動せしむるを得た。次いで氏は再び中隊長と共に前進を起し愈々猛烈果敢に敵陣地に突入せんとしたる際無念腹部に貫通銃創を受けた。然し剛氣の氏は之に屈せず尚も勇敢に前進したるも終に力盡きて倒れ戰友は直ちに手當せんとせしに氏は之を肯ぜず「俺にかまはず前進して敵を殪せ」と戰友を勵ました。其のまごころに胸打たれた將兵は仇は討つてやるぞと許かり悲憤の涙を抑へつゝ遂に午前九時三十分目ざす陣地に突入頑敵を粉碎した。氏は其の後手當を受け後方に護送中舟内に於ける衛生部員の手厚き看護も其の甲斐なく十六日午後五時三十分臨字圩附近を航行中かすかに萬歳を唱へ暮れ行く空に從容として江南の華と散り去つた。

氏の鄕に在るや一家の柱石として父母の生計を扶け出でゝ戰陣に立つや中隊指揮機關として彈雨の下勇敢機敏に傳令たるの重任に邁進し中隊の戰力を發揮せしめて遺憾なかつた。殊に重傷を負ふも屈せず介抱せんとするも肯ぜず眼中生死無く一念唯々皇軍戰勝を祈つて息まなかつた。寔に是れ其の生涯を通じて至誠に生くるの人一死報國生還を期せざる烈々たる盡忠至誠の發露鬼神も尚哭するものがあつた。あゝ聖戰幾何もなくして江南の華と散りしは惜みて尚餘りあるも奮戰玉碎以て樹てたる其の拔群の武功は萬世不朽皇軍戰史に輝き英魂亦不滅に生きて護國の神となり神靈尚も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日工兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍工兵上等兵勳八等功七級　柳川重信

忻口鎭軍艦山敵の側防機關を爆破し戰勝の端を拓く

氏は兵庫縣飾磨郡家島町の人にして父を石松母をしげと云ひ大正四年九月二十日生れで未だ獨身であつた。資性溫厚篤實にして責任觀念旺盛の人であつた。昭和五年三月家島小學校高等科を卒業し爾後家庭に在つて兩親を助け專心家業に從事し昭和十一年一月現役兵として岡山工兵聯隊に入隊し同年五月支那駐屯軍工兵隊に派遣せられ北支に於ける我が權益居留民の保護に任じて居た。

昭和十二年七月七日夜突如蘆溝橋事件勃發するや我が北支駐屯軍は直ちに出動準備を爲すと共に隱忍自重之を平和的に解決すべく努力したが支那軍の傲岸なる挑戰に竟に勘忍袋の緒を切つて膺懲することゝなつた。而して氏の所屬大賀工兵隊奥田中隊の武田小隊は七月二十七日我が通州駐屯部隊に屬し同地駐在の支那第二十九軍第三十九旅の一營を攻撃し翌二十八日には石溜莊附近に於て南苑攻撃に參加し更に二十九日には苑平縣城を攻撃占據した。此の攻撃の際氏は第二梯子班に屬し雨下する敵火を冒し勇敢機敏に苑平縣城壁に梯子を架し突撃路を開設して歩兵の突撃を容易ならしめた。其の功績は偉大なるものであつた。斯くて蘆溝橋（苑平縣城）占據後は酷熱降雨泥濘を冒して連日連夜道路の補修開設作業に從事し八月中旬より北平に移り同月下旬以後は俘虜三百名を以て工程隊を組織し飛行場及道路補修工事に當らしめ氏は工程隊

一部の指揮指導を命ぜられた。當時敵の敗殘兵や匪賊便衣隊は日夜出沒し其の間に俘虜の使役は頗る危險且困難なるものであつたが氏は克く宣撫指導し大なる工程を擧げた。其の後十月中旬大賀部隊は萱島支隊に配屬せられ平綏線に添ひ山西省忻口鎭に向ひ前進し十月二十三日敵の第一線を距る約二千米の南懷化に達し翌二十四日正午より忻口鎭西北方軍艦山の敵陣地に向つて攻擊を開始した。敵は精鋭を以て誇る中央軍にして其の陣地は天嶮を利用し數線に重疊して頗る堅固に構築せられ頑强に抵抗し爲めに我が攻擊は意の如く進捗せず特に墓地の高地兩端突角部にある側防機關銃の爲め我が第一線は死傷續出して爾後の前進は殆んど不可能の狀況になり萱島支隊長は日沒後破壞班を以て敵の側防機關を撲滅して突擊を決行するに決し氏は此の時選ばれて破壞班に加はり日沒後出發した。然るに敵は晝間に於ける我が猛攻擊に對し增援隊を得たるものゝ如く午後九時頃より敵は數次に亘り逆襲し來り爲めに彼我混戰亂鬪一大修羅場と化したが敵に多大の損害を與へて之を擊攘した。支隊長は直ちに部隊を整理し更に午後十一時三十分敵の側防機關を擊破して突擊するに決した。此の時氏は小隊長以下七名より成る第二破壞班の爆藥手となり小隊長に從ひ決死敵の側防機關銃陣地に肉薄し同じ爆藥手の戰友森下、小谷、石野一等兵等と共に火を吐く敵の機關銃に爆藥手榴彈を投擲し其の炸裂の爆音は暗を破つて天地に轟き同時に我が歩兵部隊は機を失せず勇猛果敢に敵陣に突入し奮戰格鬪の上遂に軍艦山の一角を占領したが氏は爆藥手榴彈を敵機關銃に投擲して間もなく左胸部に貫通銃創を受け同じ爆藥手淺尾、森下一等兵等と共に壯烈なる戰死を遂げた。然かし我が軍は氏等の奮鬪と尊き犧牲に戰勝の端を拓き更に戰果を擴張して激戰を續くる事十日間遂に十一月三日明治節の佳辰に堅壘を陷れ忻口鎭の城頭高く旭旗を翻すに至つたのであつた。

氏生來責任觀念特に旺盛にして今次聖戰に從ふや其の任務の爲めには水火尙辭せず從容として死地に入り就中軍艦山敵陣地攻擊には剛膽挺身敵の側防機關銃に爆藥を投擲して之を撲滅し以て我が歩兵の突擊を容易にし苦戰の間に戰勝の端を拓きたる其の功績は正に拔群であり又工兵の龜鑑とするに足るものである。今や斯の如き勇士を喪ふ洵に痛惜の極みである。然かし氏の武勳は赫々として永へに靑史に輝き芳名は後世に謳はれ其の英靈は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙も皇猷を扶翼し奉り父母一家の前途に加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日工兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　松本秋信

北滿匪賊討伐に奮戰敵中に突入して玉碎す

氏は和歌山縣海草郡松江村の人にして父を信次郎母をアイノと云ひ大正四年一月十一日生れで未だ獨身であつた。資性溫厚親に孝にして氣慨あり殊に負けぬ氣の人であつた。昭和二年三月鄕里の尋常小學校を卒業し其の後は家業たる農に從事しつゝ靑年訓練所に通ひ熱心勉勵して精勤章を授けられた。

昭和十一年一月徵兵として和歌山歩兵聯隊に入營し四月二十八日所屬隊と共に滿洲に派遣せられ遼陽に駐屯し六月二十日三江省湯原縣竹簾鎭に轉駐し主として同地附近の警備と關東軍測量隊の測量掩護に任じ七月末和田小隊第二分隊に屬し

三道流に派遣せられ同月三十、三十一日浩遼河附近の匪賊を討伐し續いて八月一日は湯原縣、八月十二日は「リウシーヘサ」河附近、九月二日は四合台附近、九月八日は竹蓮西方地區、九日は將軍溝附近、十日は克爾氣附近の討伐に參加し歸駐の後は再び三道流の警備に當り九月下旬より架橋掩護の爲め窪卅河に派遣せられた。此の間氏は克く困苦と戰ひ危險を冒し日夜精勵警備の任を完うし其の討伐に向ふや輕機關銃手として困難なる山岳地帶に或は濕地を踏破して連日連夜の搜索警戒に任じ一度敵と遭遇するや每戰勇猛果敢に奮戰し所屬隊の匪賊掃蕩に貢獻する所大なるものがあつた。

九月二十九日氏は龜井部隊命令に基き中尾小隊第二分隊に屬し孫大李附近の匪情搜索に參加し續いて當日午後四時二十分より僅々二十二名の討伐隊を以て約三百の敵と交戰するに至つた。氏等討伐隊員は寡兵を以て勇戰奮鬪逐次敵に肉薄し愈々突入せんとするや敵は優勢を恃んで頑强に抵抗し尙も我に向つて猛射を浴びせて來た。負けぬ氣の氏は忽ち其の天性を發揮し小癪の匪賊とばかり敵の側背より敢然身を躍らして此の敵中に突入した。然るに其の刹那無念敵彈腹部を貫通し惜しくも壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。然かし所屬隊は氏等の奮戰と尊き犧牲に遂に匪賊を潰滅するに至つた。噫此の一戰一人以て十に當り而かも敢然側背より突入す其の壯烈鬼神をも哭かしむるものがある。氏の心頭唯々滿洲建國玆に六年未だ皇化に靡かぬ不逞の徒輩に正義の利劍を加へて皇業を扶翼せんとする以外何ものもなかつたのであらう。氏は一粒種の子として至孝の人であつた。而かも戰線に立つや家を忘れ身を棄て大義に就き忠以て孝ならんとす。是れ即ち三千年來繼承尊重せる日本精神の顯現である。嗚呼氏今や滿洲建國の華と散りしも其の名は朽ちず。氏が赫々の武勳は忠孝一途の範と共に千載に傳ふべく又氏が不滅の英魂は護國の神となり尙北滿に神鎭まりて八紘一宇の皇謨を翼贊し奉ると共に一家の守護神となりて父母の前途に尊き加護を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　松本武平

最然敵トーチカを奪取し壯烈敵機爆彈に殪る

氏は群馬縣北甘樂郡月形村の人にして父を松太郎亡母をうたと云ひ大正五年十一月九日に生れ未だ獨身であつた。昭和五年三月月形尋常高等小學校高等科一年を又昭和九年三月同實業補習學校本科二年を修了した。小學校修了後は家にあつて農業に精勵してゐたが昭和十二年一月現役兵補缺として高崎步兵聯隊に入營し熱心軍務に精勵した。

支那事變起るや昭和十二年八月十四日森田部隊に屬せられ勇躍征途に就いた。北支上陸後九月十三、十四日永定河附近の戰鬪に方つては氏の中隊は旅團豫備隊として司令部並に車輛部隊の掩護に任じ又殘敵を掃蕩しつゝ勃々たる勇心を押へ第一線に跟隨した。

九月十六日拒馬河畔望海庄附近可西務の敵陣地攻擊に方つて氏は新井准尉の指揮に屬し第二分隊の散兵として戰鬪に參加した。中隊は同日午後零時三十分行動を起し午後二時三十分より攻擊を開始したが敵は堅固なる既設陣地に據り頑强なる抵抗を爲し殊にトーチカ式側防火器を以て猛射を浴びせ來り爲に中隊の攻擊前進は著しく困難となつた。此時氏の所屬

第三小隊は中隊長より此側防トーチカの撲滅を命ぜらるゝや小隊は敵の十字火を冒しつゝ一進一止躍進して敵に肉薄し愈々突擊命令下るや氏は分隊長等と共に敢然敵陣地に突入してさしも堅固なりし該トーチカを見事奪取し中隊の攻擊前進を容易ならしめた。然るに午後五時三十分頃約一ケ中隊の敵兵我正面に逆襲し來りしを以て所屬分隊は白兵を揮つて此敵の側背に迫り爲に敵が退却を始むるや分隊は之に追尾して遂に可西務の一角に突入該陣地を奪取し尚も敵を追擊中南方より敵機一機飛來爆彈數個を投下した。氏は此際無念頭部に爆創を受け壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏の征途に上るや入營以來各期の教育を經最も緊張したる新進氣鋭の戰士であつた。果せる哉戰場に立つや初陣なりしにも拘はらず勇戰奮鬪先づ堅陣を奪取し次で逆襲を反擊し尚敗敵を急追して及向ふ敵は悉く之を粉碎して遺憾なかつた。かくの如きは身命を君國に捧げ責任を遂行せずんば已まざるの人にして初めて能くし得る所である。氏緒戰に於て不幸爆彈に斃る。惜みても尚餘ありと雖も士の戰場に立つや累戰功なき瓦全を恥ぢ一戰玉碎名を遺すに如かず氏今や一身を捧げて存分に活躍し兵の本分を完うして斃れた。あゝ斯る忠誠勇武の士を喪へるは眞に痛惜に堪へざるも其責任遂行の示範と赫々たる武勳とは永く後世に傳ふべく不滅の英魂は護國の神と仰がれ其神靈は尚も皇國の前途を守護し又一家の守護神として其將來に尊き佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　松本善雪

忠孝兩全の勇士、聖戰の初期に奮鬪して南苑の華と散る

氏は和歌山縣那賀郡粉川町の人にして大正四年一月三十一日生れ父を善之助母をユキと云ひ氏は未だ獨身者であつた。資性溫良にして孝心深く弟妹を慈しみ世人に對し極めて親切にして諸人より敬愛せられて居た。昭和二年三月粉河小學校尋常科卒業後約二年間紀北製絲工場へ雇傭されたが其後粉河郵便局集配人として勤務し職務勉勵に付大阪遞信局より金五圓の慰勞賞金を授けられた。氏は農家が俄雨等にて乾物取込に困つてる場合等には進んで之を手傳ひ自らの喜として居つた。昭和十年十二月現役兵として歩兵第七十七聯隊へ入營し射擊及銃劍術共に優秀にして射擊に於ては第一種徽章並に賞狀二回銃劍術に於ても二回に亘り賞狀を附與せられた。

支那事變起るや鯉登部隊增子中隊に編入せられ勇躍征途に就き郎坊園河村並に南苑附近の戰鬪に參加した。昭和十二年七月二十五、六日郎坊附近の戰鬪に於ては第二小隊第二分隊に屬し第一線分隊員として勇猛果敢に奮戰し敵を擊破した。後安定まで汽車追擊に參加したが反轉して再び郎坊驛北側部落の殘敵を掃蕩し疲勞困憊を意とせず常に衆に先立ち難局に當つた。翌二十七日我軍は南苑兵營を攻略するに決したが所屬小隊は黃村附近に在りて友軍部隊の下車掩護黃村鎭附近の敵通信所を占領すべき獨立任務を以て之が重任を遂行した。時に所屬大隊は敵が黃村驛の東北方團河村に陣地を占領しあるを知り午後三時四十分之に對する攻擊部署に就いた。偶々氏の所屬小隊も黃村附近の守備を他部隊と交代し所屬大隊に追及すべきを命ぜられ急進したるに所屬中隊主力は早や團河村西北方の敵警戒陣地たる墓地高地線の敵と激戰中にして所屬小隊も直ちに第一線に加入を命ぜられた。氏は敵彈雨飛の下を勇敢機敏に行動し絶えず敵情を偵察して適時有力なる報

告を提供し又戰友を激勵し小隊の戰鬪に貢獻せる所多かつた。

翌二十八日は愈々午前八時四十分より南苑兵營の攻擊であつた。時恰も百三十度の炎熱にして流汗上衣を濕ほし暍病患者續出し地形平坦にして丈餘の高粱繁茂し全く通視不能なれど敵は亂射亂擊を加へて居た。氏は第二中隊の第一線小隊に屬し意氣益々軒昂神色自若として勇敢に南苑兵營西南に向ひ肉迫した。やがて中隊長より中隊は今より前面の敵陣地に突入する輕機は現在地に在りて敵を制壓せよとの命令があつた。氏は此時大聲「ヤルゾ」と附近の戰友を勵まし突擊の號令一下率先陣頭に立ちて疾走し疾風枯葉を捲くの概があつたが敵前二十米に達せる時惜しいかな敵彈飛來頭部に貫通銃創を受け玆に壯烈なる戰死を遂げた。されど氏の勇敢なる行動は二隊の志氣を鼓舞し激戰の後午後一時三十分遂に當面の敵を擊破し南苑兵營北側に進出し之を確保するを得た。

あゝ氏や家庭に在りては一家の柱石として孝養怠りなく世人に接しては博愛衆に及ぼし軍に從ひては忠誠勇武衆の龜鑑となつた。寔に是れ軍民一般の鑑たる者にして其功績は亦皇軍戰史を飾るものであつた。今や其人亡しと雖其英靈は永世に生き尙も皇國を守り又一家を護り其名は千載の下大和櫻と咲き匂ふであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　松下正一

勇敢なる傳令克く其の任を果たし小隊長の戰鬪指揮を容易にす

氏は兵庫縣宍粟郡城下村の人にして父を石松母をアキと云ひ大正四年二月四日に生れ未だ獨身であつた。資性溫良にして責任觀念强く事に當り不屈不撓勇敢であつた。昭和二年三月城下尋常小學校を卒業し其後は家貧困の爲荷馬車挽となり一家の生計を扶け克く父母に孝養を盡し昭和十二年一月徵兵として鳥羽歩兵聯隊に入營し爾來熱心軍務に精勵して居た。

支那事變起るや長野部隊第十二中隊に編入せられ第一小隊の小隊長傳令として昭和十一年八月九日勇躍征途に就いた。而して北支戰線に到着し九月七日より馬廠附近の攻擊に參加し引續き十三日より滄州の攻擊開始せらるゝや所屬中隊は二十一日滄州陣地の前哨陣地とも謂ふべき人合庄東側陣地攻擊の爲午後四時三十分高官屯を出發し津浦線に沿ふ地區を前進した。逐次敵に近接し其戰鬪距離に達するや小隊は中隊の左第一線となり鐵道線路上の敵火點に向ひ攻擊前進を開始した。此頃戰場一帶は全く敵の銃砲火を以て覆はれて居たが氏は其の猛火を冒して戰線を右に走り左に駈け小隊長の命令意圖を分隊長に傳達し各分隊は小隊長意圖の如く躍進又躍進午後六時頃には敵陣地前七百米附近に到達することを得た。然しながら敵彈は益々熾烈となり爾後の前進は頗る困難となつた。恰も此時中隊は大隊命令に基き

爾後の攻撃前進は夜に入るを待つゝことゝなり暫く此線に停止して交戰しつゝありしが愈々日暮るゝや中隊は夜陰に乘じて敵の右側背を衝くべく迂回行動を開始した。午後十時半頃となるや敵は我軍の夜襲を察知し熾に小銃機關銃の猛射を浴びせて來た。殊に鐵道線路上の敵火兵よりする射撃の爲小隊の前進は頗る困難なりしが我輕機の制壓により逐次近迫して敵の右側背百米附近にまで達し突撃準備に着手することを得た。氏は此夜間行動間動もすれば方向を誤らんとし又掌握を離れんとする分隊との間に彈雨を冒して活躍以て小隊長企圖の如く掌握と方向維持を確實ならしめた。斯くして突撃準備間氏は雨飛する敵彈下勇敢に敵前を横行して此小隊長の命令を迅速に分隊長に傳へ其任を果たして小隊長の許に復歸し愈々小隊長突撃を令するや氏も亦小隊長と共に突撃せんとして起つ其の刹那無念敵彈左胸部を貫き竟に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。時に午後十一時頃であつた。然し中隊は氏等の奮闘と尊き犧牲とにより翌二十二日午前十時さしも頑強に抵抗せる人合庄東側陣地を完全に奪取することを得た。

氏の選ばれて小隊長傳令となるや彈雨の中常に積極勇敢責任を重んじ不屈不撓傳令たるの任務を完うし小隊の戰力を發揮せしめて遺憾なかつた。かくの如きは傳令たる重き使命の存する所身命を君國に捧げ全力を傾倒して任務に邁進せる盡忠至誠の發露と謂ふべきである。然るに征戰日ならずして斯かる勇士を滄州の華と散らしめし事は惜みても尙餘ある次第である。然かし氏の忠孝一如と職責遂行の示範とは其拔群の武功と共に後世軍民の鑑となり其英魂は不滅に生きて護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を守護すると共に兩親の多幸を加護して已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級　松井一雄

勇敢なる小銃手、堅壘に奮闘して職に殉す

氏は兵庫縣神崎郡田原村南田原の人にして父を政吉母をいさと云ひ明治四十五年七月十四日を以て生れ未だ獨身であつた。昭和二年三月田原小學校高等科を卒業し爾後家庭に在つて農業に從事して居た。資性溫順而かも氣慨あり沈着寡言實行の人にして父母に對する孝養の如きも世の模範となすべきものがあつた。昭和八年一月現役兵として歩兵聯隊に入營し間もなく滿洲事變に出動し功に依りて勳八等に叙せられ白色桐葉章を賜はり從軍記章を授與された。

昭和十二年七月支那事變の勃發するや八月應召長野部隊に編入せられ勇躍北支方面への征途に就いた。

斯くて北支に上陸するや間もなく馬廠の攻撃は開始せられた。此の攻撃に於て氏の所屬第二中隊は九月十日午前二時三十分小王莊の敵陣地を夜襲した。此の時氏は第二小隊第三分隊小銃手として衆と共に水深胸に達する大水濠を渡渉し雨下集中する猛火を冒して夜襲を決行し遂に敵第一線陣地を奪取して該地を確保し更に小王莊部落の西北方陣地に殘留せる敵を攻撃し奮戰之を驅逐して克く其の任務を果たした。

九月十三日より二十五日に亘る滄縣附近の戰闘に於ては氏は依然第二中隊長田卷大尉の指揮下に二十三日午後六時三十

分より東花園北方の敵主陣地に對し攻撃を行ひしが引續き夜襲を强行するに至つた。此の時氏は第三小隊第三分隊小銃手として克く分隊長を輔佐して勇敢に奮戰し殊に夜襲に際しては猛烈果敢に突入し二十四日午後一時十分其の第一線陣地を占領し引續き二十五日にかけ東花園に向つて戰果を擴張し更に滄縣並に娘々河に向つて急追擊した。此の急追擊に氏の中隊は娘々河橋梁を迅速に占領せんが爲め敗退する敵に尾して猛攻擊を爲したが其の途中敵の一彈は氏の頭部を貫通し竟に壯烈なる戰死を遂げた。抑々東花園の敵陣地たるや縱深約三千米に亘る奥深き堅壘にして第一線陣地直前には深さ身長を沒する水濠を設け其の南岸堤防に沿ひ鐵條網を張りまはしトーチカ式の掩蓋機關銃座を碁布し配するに近代兵器の精鋭を以てし眞に難攻不落の要衝たるを思はしめた。然るに氏等の忠烈なる奮鬪に依り流石の堅陣も二十五日午前六時頃完全に之を攻略するを得滄州一帶の敵陣地崩壞に重大なる影響を與へたのであつた。

噫聖戰の初期氏の如き忠烈勇敢の士を喪ふ洵に痛惜の極はみである。然かし氏が小王莊の夜襲に更には東花園の奪取に於ける勇敢機敏の行動奮戰は中隊戰勝の素因を爲したるものにして其の赫々の武勳は皇軍戰史に牢記せられ其の勇名と共に千載に輝き其の英靈は不滅に生きて護國の神と仰がれ靈德尙も皇國を護り遺族に尊き光と佑助を垂ることであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　牧一雄

致命傷を負ふも尙保彈鈑を差しのべ新樂の激戰に散華す

氏は長野縣上高井郡高井村の人にして父を榮太郎母を登里と云ひ大正五年三月二十三日を以て生れ未だ獨身であつた。資性誠實にして進取の氣性に富み百折不撓の氣概があつた。昭和五年三月上高井郡尋常高等小學校を同九年三月同校補習學校を卒業爾來農業に從事し家庭の都合で青年訓練所には出なかつたが陸軍壯丁教育會發行の入營準備講義錄等により日夜獨學修養に努めて居た。

昭和十二年一月徵兵として松本歩兵聯隊に入營機關銃中隊に配屬し下士官候補者に選拔せられた。

支那事變勃發するや遠山部隊に屬し昭和十二年九月上旬勇躍北支戰線に出動した。出發に當り友人に告げて曰く機關銃隊のあらん限り最早や再び母國の土を踏むことは思ひません。今後留守宅をよろしく願ひますと悲壯の決意を洩らし勇士の面目眞に躍如たるものがあつた。北支到着以來は炎熱惡路を征服し常に衆の模範となり一意任務に邁進して居た。

斯くて永定拒馬の兩河川戰鬪に於て拔群の功を奏せる氏の所屬田鎖部隊は九月二十五日午後遠山部隊の先遣隊として裝甲車に乘込み爆破されたる新樂鐵橋の復舊工事掩護の任務を帶び敵陣地の眞只中に飛び込んだ。所屬部隊は沙河の對岸から架橋工事中の濠部隊を猛射しある敵部隊を掃蕩すべく二十七日朝新樂を出發し午後二時新樂驛の西南約二粁の地點に於て敵前渡河を敢行した。折柄濁流渦まき水深胸に達し對岸からは敵彈霰の如く射注がれ剩さへ上陸には敵の輕爆擊機の編隊が來襲し其の一機は地上二三十米から爆藥數箇を投下する中を氏は泰然自若として率先勇敢にも沙河を渡河して對岸に取りつき攻擊の爲め立脚點を確保した。斯くて午後三時より小趙村の敵を攻擊す

る事になつた。此の時氏は第二小隊第四分隊の二番銃手として敵陣地中最も堅固なる正面に萬難を排して敵前二百米に進出し正確且猛烈なる制壓射撃を開始した。敵亦此處を先途と熾烈なる火力を集中し來れるが氏は克く沈着して彈藥裝塡に細心の注意を拂ひ聊かの故障をも起さしめず適切有效なる射撃を繼續せしめ重機の全威力を遺憾なく發揚したが午後五時二十分不幸にして氏は敵彈に頭部を貫通され鮮血にまみれた。されど責任觀念の旺盛なる氏はそれにも屈せず尙裝塡操作を續けんとして保彈鈑を手より放さず幾度か手をさし延べたが力及ばず午後五時三十分銃側より後退せしめられ軍醫の手當を受けしも其の甲斐もなく萬歳を叫びて心靜かに瞑目した。時正に夕陽は廣漠たる河北大平野の彼方に沒せんとし秋風徒らに高粱の葉に吹き渡りいとど戰友等の暗涙を誘はしめた。併し氏が此の崇高なる最期を目撃せる將兵等は復讐の念抑へ難く勇戰奮鬪を續け翌二十八日午前五時當面の頑敵を粉碎して完全に小趙村を占領し朝風に日章旗を飜へすを得た。

噫頭部貫通の致命傷を受けつゝも尙保彈鈑を差延べんとする其の心其の動作は大和魂の結晶にあらずして何ぞや嚴肅なる死の前に苦痛を忍びつゝ尙萬歳を唱へて瞑目せる氏の魂は忠誠壯嚴なる軍人精神にあらずして何ぞや。正に皇軍の精華として百世に傳ふべき譽である。氏の功績は皇軍戰史に牢記さるべきは勿論氏の英靈は萬世に生き皇國並に一家の守護神として其の繁榮を加護すべく其の名は大和櫻と謳はれて千載に唉き匂ふであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　萬場潔

勇敢なる輕機彈藥手、決死隣中隊との連絡を完うし燒窰盆の華と散る

氏は鳥取縣東伯郡社村の人にして父を藤吉養母をさだと云ひ大正五年二月十二日に生れ未だ獨身であつた。責性溫厚篤實にして責任觀念に富み諸人の愛敬を受けて居た。昭和五年三月社村小學校高等科を卒業し其の後は家庭に在りて農業に從事し親に孝養を盡して居たが昭和十二年一月現役兵として松江歩兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵し斯くて同年七月一等兵に進級した。

支那事變起るや間もなく福榮部隊に屬し揚井中隊の輕機分隊第二彈藥手として勇躍征途に就いた。而して北支到着以來は降雨泥濘の惡路を踏破しつゝ津浦沿線を南進し夏庄に據る敵を一蹴して九月五日燒窰盆に據る敵陣地を攻撃するに至つた。此の陣地は馬廐陣地の一角を成す要點にして敵第二十九軍第三十八師が必死の抵抗を爲さんが爲め事變數ケ月前より陣地を構築し而かも馬廐河の水流を利用して陣前に汎濫地帶を設け又陣地直前には水濠を廻らして難攻不落を誇り守兵約一千人を以て頑强なる抵抗を企圖して居つたのである。氏の屬する沖田大隊は正午唐官屯驛に集結し直ちに攻撃を準備し所屬揚井中隊は右第一線第二中隊は左第一線となり友軍砲兵の射撃開始と共に午後三時より攻撃前進に移つた。氏は中隊の左第一線小隊第六分隊に屬し前進を始めたが敵の小銃機關銃並に迫撃砲彈は雨霰の如く射注ぎ來り中隊は一進一止彈雨を冒して敵前三百米に近迫した。此の時敵の火力は益々熾烈を極はめ水深亦愈々增大したが氏は神色自若泥人形となつて高粱畑を匍匐し敵前二百米に近接した。此の頃友軍砲兵の砲聲殷々頭上の空氣を震はせつゝ敵陣地に命中し物凄き爆煙

と共に諸材料の飛散するを認めたが敵は更に堤防を決潰して汎濫せしめ水深頸を沒するに至り敵陣地の全線亦銃口火を吐いて嵐の如き猛射を我が第一線に浴びせ來り我が第一線には負傷者續出するに至つた。斯くて日沒となつたが敵の猛射は暫しも息まず午後六時三十分氏は隣の彈藥手負傷するや之に代りて彈藥を搬送し所屬分隊をして敵の側防機關銃を完全に制壓せしめ以て小隊の前進を容易ならしめた。小隊が前進するに伴ひ左第一線中隊との連絡絶え且左前方の敵機關銃の斜射を受け玆に再び小隊の前進は停頓するに至つた。氏は此の際敢然左中隊との連絡に任じ身邊に蝟集する敵彈を物ともせず前進の途中左肘に負傷せるも之に屈せず遂に左中隊の位置を確認して之と連絡を取り所屬小隊長に報告せんと小隊長の許に近づきし一刹那無念にも左前方より飛來せる敵彈の爲め頭部に貫通銃創を受け午前七時五十分壯烈なる戰死を遂げた。然れども氏の勇敢なる行動に依り所屬中隊は隣接中隊との連絡を確保して爾後の戰鬪を有利に進展せしむるを得た。

氏は鄕に在りて溫厚篤實の孝子たり出でゝ聖戰に參加するや泥濘飢渴幾辛酸を克服し默々として難行軍を續け愈々銃火相見ゆるや率先任務に邁進し眼中敵彈なく汎濫泥濘地帶物の數ならず躍進又躍進常に銃側に所要の彈藥を補充して輕機關銃分隊の全威力を發揮せしめ以て中隊の進路を開拓し又突擊の動機を作つた。而かも緊要無二の重要時機に隣接中隊との連絡絶ゆるや進んで之が保持を恢復せるが如きは正は決死的行動であつた。寔に是れ所屬大隊戰勝の獲得に第一素因を與へたものと謂ふべきである。あゝ斯かる忠勇義烈の士を此の一戰に喪へるは眞に痛惜を禁じ得ざるも氏の赫々たる勳功は永く皇軍戰史に輝き不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り又一家の將來に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵上等兵勳七等功七級　丸山東右衞門

難局に彈藥補充の重任を果たし保定城外の華と散る（忠孝一如の母と子）

氏は長野縣下水內郡豐井村の人にして亡父を悅治母をはつと云ひ明治四十五年一月一日に生れ妻はつとの間に長男保豐を擧げた。性溫厚篤實にして親に孝兄弟にやさしく家庭平和の中堅となり又一般交際も極めて圓滿であつた。大正十五年三月豐井小學校高等科を卒業し其後は家庭に在りて農業に精勵し同村農會調査員となるや特に產業の發達に意を用ゐ果樹栽培を奬勵して良好の成果を收め又同村青年會幹事となり鄕黨青年の質實剛健の氣風を作興するに盡力した。昭和八年一月現役兵として松本步兵聯隊へ入營し間もなく滿洲警備の爲渡滿し各地の警備討伐に從事し翌九年六月凱旋の上歸休除隊となり滿洲事變の功に依り勳八等白色桐葉章を賜はつた。歸鄕後は益々良兵良民の實を擧げ特に生來信仰心深く且軍隊敎育に依り涵養し得たる信念と相俟ち渾然一體崇高なる思想信念を以て行住坐臥を律し自づから鄕黨一般の垂範示敎となつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召溫井部隊に屬し楯機關銃中隊の彈藥手として勇躍征途に就いた。氏は出征に當り彌陀は「天皇陛下の御爲に盡せよとて皇國に生をお授け下さつたのであるから私は淸く身命を君國に捧げる」と言つて見送人に別れを告げた。

北支到着後は連日降雨泥濘を冒して永定河畔に進出し同河南岸の敵を擊破して京漢線に沿ひ追擊に移るや行けども泥と汎濫高粱の密生地帶にして所屬部隊の車馬の前進は名狀すべからざる困難に遭遇した。氏は其間自己の疲勞を意とせず屢々股をも沒する泥中に入り全身泥人形となり馬匹を誘導し或は車輛の後押をなし所屬中隊の追擊前進に貢獻し又

進んで兵器馬匹の愛護に任ずる等能く分隊の中堅となり分隊長を輔佐した。九月十六日所屬部隊が南臺子附近に於て敵と遭遇するや氏は連絡兵となり敵彈雨飛の中に所屬分隊長と小隊長間の連絡に任じ其任務を完全に遂行した。超えて同月二十三日所屬中隊が大劉莊の戰鬪に參加するや敵は保定の前哨戰として頑强に抵抗し正面射斜射の十字火雨霰の如く飛來し極はめて危險なる狀況下に氏は克く分隊長の指揮下に沈着勇敢に彈藥補充に任じ完全に其任務を遂行し以て所屬分隊の戰鬪威力を最高度に發揚せしめた。

翌二十四日午前八時頃より保定城の攻擊を開始するや氏の所屬小隊は敵前至近の距離に在りて敵陣地の要點に活躍する機關銃を求めて猛射を加へたが敵亦小銃の十字火を以て之に應射し戰鬪刻一刻慘烈を極はむるに至つた。折柄所屬分隊の一、二、三番銃手相次いで負傷し五、六、七番銃手之に代りて射擊を繼續したが銃側の準備彈藥も盡きんとし且缺員の爲爾後の彈藥補充困難なりと見たる氏は決然敵の集中火の危險をも顧みず彈藥小隊長の許に至り第一回の補充を終り更に第二回の補充をなさんとして分隊の位置を距る約二十米の位置に近づきし際左方より飛來せる敵機關銃彈の爲胸部に盲貫銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。然れども氏の尊き犧牲に依り所屬分隊は戰機に投じて卓越せる射擊效果を收めて突擊の動機を作爲し同日午前九時五十分友軍第一線部隊をして保定の堅壘を奪取せしむるに至つた。

氏は義に滿洲事變に赫々たる武勳を奏し又今次の聖戰に參加するや旣に生死を超越して君國に一身を捧ぐるの決意鐵石よりも堅かつた而して各戰決意の如く死力を竭して奮戰力鬪し直接有效に所屬隊の戰果獲得に尊き素因を寄與するに至つた。其持續的至誠の發露は蓋し氏の如き堅固なる信念の人にして之を求め得るのである。氏は一彈藥手に過ぎざりしと雖其忠勇義烈たるや天晴れ軍人の龜鑑と謂ふべく其累次の功績たるや亦烈々として皇軍戰史を飾り其芳名を後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝであらう。

因に氏の母は氏の出征に方り「斯樣な時は　御上天皇陛下の御爲身を粉にしもお盡し申上げて呉れ、こんな時でなければ何時御大恩をお返し申上ぐる事が出來るか」と眞實罩めての母の敎訓に氏は「お母さん決して心配なく、必ず御恩はお返へししします」と別れを告げたが戰死の報に接した母は弔問者に對して「戰死とは云ふものゝ何の功もなく北支保定で散りました。御仁慈深き　天皇陛下には靖國神社に合祀下されその上光榮身に餘る金鵄勳章さへ賜はり感涙に咽ぶ外はありません。あれも草葉のかげに皇恩に感激し七たび生れ替はつても　陛下の大稜威を世界の偶々までも輝さん事を誓つて居る事と存じます云々」と洵に此母にして此子あるを思はしめらるゝ。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し靑色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍衞生上等兵勳八等功七級　松田靜馬

敵の空襲中に敏活積極的に任務を完遂し大場鎭の華と散る

氏は靜岡縣志太郡葉梨村の人にして大正二年三月二十九日に生れ父を金一母をりうと云ひ妻きく江を迎へて居る。性質溫順孝心厚く幼少の頃より能く父母を扶けて農事に從ひ弟妹を慈しんで居た、

昭和二年三月葉梨高等小學校を卒業後同地青年訓練所に入り昭和八年三月同所課程を終了し專ら家業に從ひ農事の研究に專念し模範青年として鄉黨に敬愛せられ勤勉努力一家の復興見るべきものがあつた。昭和十一年四月葉梨村青年團下六鄉支部長として推され滿期退團迄勤務し同團の向上進歩に貢献せる所多かつた。

昭和九年一月徴兵として歩兵第三十四聯隊に入營同年七月看護兵を命ぜられ在營間精勤章を受くること二回歸休除隊に際しては善行證書を附與せられた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召、渡邊部隊に編入せられ勇躍征途に就き九月江南の一角に上陸し同月六日より十月十六日に亘る間各地に於て野戰病院經理室附として物品、被服、糧食の補給分配等繁忙なる經理官の助手勤務に日夜精勵又此間收容患者多數の治病看護に努め功績大なるものがあつた。

十月十六日より二十四日に亘る大場鎭附近の戰鬪の際北店宅に於て同じく野戰病院經理官附として精勵して居たが十月二十二日夜半突如病院開設地附近に猛烈なる敵砲彈の集中射擊を受けた。此の時氏は克く危險を顧みず本部經理室炊事場附近を巡察して其の警戒に任じたが更に翌々二十四日午前零時五十分警戒勤務中空襲警報を發せらるゝや直ちに本部經理室炊事附近の警戒遮蔽に任じ率先勇敢に敵彈を冒し他兵を勵まし迅速且周到に任務を遂行しありし所午前一時頃敵飛行機來襲し其の投下したる爆彈の爲不幸にも前頭部、顏面、胸部、右手背、兩大腿部に爆彈破片創を受け玆に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。誠に惜しむべき極はみである。

氏は上陸以來日夜野戰病院に在りて劇務に從事し又收容されたる多數將兵の爲終始一貫献身的努力を爲したる勞苦は誠に尊き功績と謂はざるを得ない。特に野戰病院が敵砲彈の危險に曝さるゝに至るや剛膽勇敢に活動し竟に任務に殉したる其犧牲的行動は第一線將兵の奮鬪に比し何等遜色なく眞に武人の鑑みとすべく身は假令大場鎭の華と散りしと雖其の芳名は氏の功績と共に永へに聖戰史上に燦として輝くべく忠誠孝悌の其英靈は永世に生き尙も皇國並に一家の爲尊き加護を與へるであらう。

氏は戰死の日衞生上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　藤原幸治郎

兵站自動車兵、敵襲に最後迄奮闘す

氏は京都府船井郡五ヶ莊村の人にして亡父を熊吉亡母をよしと云ひ明治四十五年四月十日に生れ妻てるとの間に長男幸夫、二男幹男の愛兒がある。資性溫厚篤實にして精勵事に從ひ責任の命ずる所水火尙辭せざるの氣魄を具へて居た。昭和元年三月五ヶ莊村小學校高等科を卒業し後豫備役未入營補充兵となつてゐたが支那事變勃發するや昭和十二年八月召集せられ中西自動車輜重部隊要員として勇躍征途に就いた。

北支上陸後は息つく暇もなく或は八達嶺の嶮に或は永定河の濁流に或は泥濘輜を沒する難路を克服し殘敵と戰ひつゝ連日連夜あらゆる缺乏に耐へ克く難局を打開して各種輸送の重任を完うし次いで九月二十二日より廿五日に亘る山西省長城線附近の戰鬪に於ては中隊は板垣部隊次いで三浦部隊に配屬せられ追擊先遣隊の輸送に任じたが當時惡路の爲自動車の衰

損甚だしかりしも氏は鋭意之が修理保全に努めつゝ不眠不休の努力を續け中隊をして先遣隊輸送の重任を完からしめた。

斯くて中隊は輸送を終り九月二十五日長城線小寨村附近に達するや突如各種銃砲を有する約千五百名の敵より襲撃を受けた。此の時氏は中隊の自衛第一小隊に屬し最左翼班にあつて防戰大に奮鬪したが戰鬪酣となるに及び正面の戰況愈急迫を告げ中隊長は豫備隊を氏の小隊の左に增加した。されど敵は漸次兵力を增加して中隊を包圍攻撃し來り衆寡敵せず戰況愈々危機に瀕し我が死傷續出するに至つた。此時氏等は今は之迄と分隊長以下戰友と共に敢然として躍起白刃を揮ひ銃砲彈の集中火を冒して敵の翼側に向つて突撃し小隊又之に續いて全員阿修羅の如くに殪ぎ倒し突き屠り此勢に此の方面の敵は敗退を始め中隊は攻勢に轉じ遂に危機を脱する事を得た。然し此の格鬪中氏は右大腿部に盲貫銃創を受け續いて一彈は右下腿部を貫通した。剛毅にして氣力旺盛なる氏は銃を杖突いて立たんとしたが終に能はず伏して銃を執り追撃射撃を加へた。敵は間もなく稜線に沒し氏は戰友に援けられて關口村衛生隊に收容せられ手厚き看護を受けた。然かしその甲斐もなく戰友の手を握り締めつゝ「車を頼む」の一言を遺し從容として護國の神と化したのであつた。

氏は北支戰場に立て以來連日連夜危險を冒し困苦と戰ひ缺乏に堪へ其の敵襲に會するや奮戰力鬪率先敵中に突入し愈々死に臨むや尙且つ公事を叫んで一言私事に及ばず其の献身奉公の至誠に至りては烈として大和民族の氣魄を吐いたものと謂ふべきである。噫聖戰の尊き人柱其名は皇軍戰史に牢記せられて末代までも芳ばしく其英靈や不朽に生き尙も皇國並に一家特に二愛兒の前途に尊き加護を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日歩兵一等兵に更に上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　藤原八郎

忠烈勇敢の連絡兵、至難の戰況下に克く其の任を果たして姚官屯に玉碎す

氏は兵庫縣神崎郡瀬加村の人にして父を喜作母をきみと云ひ大正三年九月十一日に生れ未だ獨身であつた。資性溫良淡白寡慾にして寛容の德を備へ犧牲的精神に富み趣味としては相撲が得意であつた。又親孝行にして克く失明の母を勞はり孝養を盡し家業にも極はめて勤勉であつた。昭和四年三月瀬加高等小學校を卒業し引續き瀬加村青年訓練所に入り同九年三月同所の課程を修了し同十年一月徴兵として鳥取歩兵聯隊に入營した。在隊間は熱心精勵良好の成績を以て翌十一年七月歸休除隊した。

支那事變起るや昭和十二年七月應召長野部隊第六中隊に編入せられ中隊指揮班員として同月九日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後滄州陣地攻撃の直前父に寄せたる書面の一節に「いよ／＼敵の主陣地たる滄州に進撃せんとす、武人が戰場に臨み戰死するは是れ我等の本望とする所なり、我等が戰友中にも既に幾多の戰死傷者あり、我未だ死所の得ざるは誠に殘念なり、然れ共時節は到來せり、我若し戰死せば德次に賴む宜しく父母を大切になし孝道を盡さんことを願ふ、戰場に到らんとする時心氣輕く志氣旺盛なり、敵前一里半にて」とあり盡忠決死の覺悟其の攻撃直前の意氣實に壯と謂ふべきものがあつた。九月二十一日所屬隊は滄州攻撃の序幕戰として人合庄北端に據る敵を攻撃した。此の時氏は中隊長の直轄連

絡兵として屢々敵彈雨飛の中を冒して小隊長との連絡に任じ中隊長の戰鬪指揮に遺憾なからしめつゝ終始中隊長に隨從して逐次敵に近迫し遂に敵陣地前の水濠を越え更に鐵條網を突破し中隊長と共に敵陣地に突入して勇戰奮鬪遂に之を奪取し夜暗となるや中小隊間の連絡は頗る困難となりしも氏は全力を盡して其の連絡を確保し中隊長をして常に部下の掌握を確實ならしめ中隊長企圖の如く遂に人合庄の部落を奪取し更に前方一軒家の線に進出することを得しめた。

續いて九月二十三日午後六時中隊が姚官屯附近の敵に對し攻擊を開始するや氏は敵彈雨霰の中を右に走り左に駈けて中隊長を輔佐しつゝ勇敢に敵に近迫中日は既に沒して四面暗黑となりしが敵の各種火器の亂射は益々暴威を逞しうし死傷續出するに至れるも氏は更に屈せず終夜小中隊間の暗夜に伴ふ困難なる連絡に活躍し常に各小隊をして中隊長の確實なる掌握裡に中隊長の意の如く敵前四十米の水濠内に突擊準備を整へしめ機熟して中隊は二十四日午前四時突擊を起し鐵條網を突破し敵陣地に突入して其の一角を奪取し尙も頑强に抵抗する殘敵に對し再び猛烈に突擊し戰果の擴張に努めた。此の間氏は中隊長に從ひ勇敢に突入奮戰し又混亂せる中小隊間の連絡に活躍し中隊長の企圖せる如く遂に全陣地を奪取することを得しめ更に機を逸せず中隊長に從ひ追擊前進せんとせる刹那無念顏面及頭部に敵の手榴彈創を受け竟に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。然し中隊は氏等の勇戰奮鬪と尊き犧牲とにより午前九時さしも頑强に抵抗せる姚官屯の敵陣地を完全に占領することを得た。

夫れ忠孝は一道なり氏の家に在るや至孝、出でゝ戰陣に立つや素より身命を君國に捧げ唯只其の難しとせる死所を擇ばうとした。果せる哉其の決意と忠誠の迸る所夜間彈雨の下殊には突入紛戰後の混亂せる至難の戰況下に連絡の重き使命を帶び不屈不撓全魂全力を傾倒し中隊長を核心とする團結の强化に努め其の戰力を發揮せしめて遺憾なかつた。然るに聖戰幾何もなく滄州の華と散りしは惜みても尙餘りある次第である。然かし死生命あり氏今や死所を得て玉碎せる殉忠の芳名は拔群の武功と共に萬世不朽に輝き其の英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も出でゝは皇國を守護すると共に入りては兩親の多幸を加護して已まぬであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　福岡正文

優秀なる運轉手、克く輸送を完うし敵襲に奮戰小隊の危機を脫す

氏は奈良縣山邊郡都介野村の人にして大正二年五月二十六日生れである。亡父を作藏母をつたゑと云ひ氏は未だ獨身であつた。資性寡默溫厚篤實勤勉の人であつた。昭和三年三月並松高等小學校を卒業し同五年十月奈良自動車學校に入學翌六年二月運轉手免許を得て貨物自動車營業に從事し粉骨碎身家業に精勵した。

支那事變起るや八月應召大畠部隊に編入せられ勇躍征途に上らんとするに際し家人に遺せる詞の一節に「必ず生還は期せぬ立派に働いて家名を擧げ其の再興を期す」又「必ず立派な働きをする覺悟だ若し幸に本望を遂げることが出來れば其の名譽を母校と在鄕軍人會に分けてくれ」と一死報國生還を期せざりし覺悟の程が窺はるゝのである。北支上陸後九月二

十二日氏の所屬隊は三浦部隊に配屬せられ同部隊が敗敵を追擊するに方り其の先遣隊の輸送に任じた。其の使用自動車は徵發車にして整備十分ならず衰損破損尠くなく非常に困難したが不眠不休の努力に依り之を整備しつゝ遂に輸送を完うし先遣隊の追擊に遺憾なからしめた。

九月二十五日長城線附近に於て所屬隊は千五百を下らざる各種銃砲を有する敵の攻擊を受け戰鬪を交ふるに至つた。氏は自動車警戒の任務を受け敵情を監視中敵は逐次包圍近接するに及び報告の爲め中隊長の許に急派せられ猛烈なる敵火を冒して傳達したが時恰も中隊は豫備隊を第一線に增加の際なりしを以て氏も亦之に加入を命ぜられ豫備隊と共に第一線左小隊の左翼火線に增加して戰鬪に加はつた。此の頃敵は益々兵力を增加し當面の敵兵力三百に達し我れを包圍し來り戰況愈々危殆に瀕するに至つた。此の際氏は最左翼班にありて敢然敵中に突入し格鬪敵を斃し遂に敵を擊退し小隊の危機を脫せしめた。其の武勳は赫々たるものであつた。

九月二十八日長城線に於て待機中自動車第一〇八號機關の調子不良なりしを以て翌朝までに加修を命ぜられ加藤戰友と共に敵彈下にありて鋭意之が修理に努め將に完成を見んとせる時不幸飛來せる敵彈の爲め背部より右下腹部を射貫せられ惜しくも名譽の戰死を遂ぐるに至つた。

氏は鄕に在りて家業に精勵自動車に關し優秀なる技能を有せしと雖も戰場徵發のもの衰損多く而かも惡路嶮難戰況亦分秒を爭ふ狀況下に之が運轉又は修理に任ぜし者の辛苦は想察に餘りありと謂ふべきである。而かも九月二十五日大敵の攻擊を受くるや敢然敵中に突入し之を擊退し以て愛車に一指だも染めしめざりし如き身を棄てゝ車を守護せる愛車の精神は自動車兵の龜鑑として感嘆措かざる所である。夫れ職分の存する所責任之に伴ふ。身命を君國に捧げて之を遂行し斃れて後已む之れ我邦古來繼承尊重せる軍人精神の精華である。氏今や亡しと雖も其の透徹せる職責の遂行と赫々の武勳とは千載に傳へて鑑とすべく。氏が不滅の英魂は護國の神として永久に仰がるゝことであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵上等兵勳七等功七級　古池仁

忠實勇敢なる重機關銃手、難局に奮鬪して殪る

氏は茨城縣眞壁郡中村の人にして父を市松亡母をきくと云ひ明治四十四年十一月三日に生れ未だ獨身であつた。性溫良着實にして義務心厚く事に臨みては剛毅果斷であつた。昭和三年三月中村小學校高等科を卒業し昭和六年四月上京して千住吾妻汽船會社現業員として入社勤務中翌七年一月現役兵として水戸步兵聯隊へ入營し機關銃中隊に編入せられ熱心精勵良成績を擧げて居た。而して同年六月滿洲派遣部隊に屬して渡滿し各地に警備討伐の重任を果たし功を以て勳八等に叙せられ翌八年十二月滿期除隊となつた。歸鄕後は翌九年十月より東京市千住原町のパブコ工業株式會社の現業員として入社し引續き忠實に勤續して居た。

支那事變起るや昭和十二年八月應召石黑部隊に屬し機關銃中隊六番銃手として勇躍征途に就いた。斯くて北支に到着し九月中旬永定河々畔の戰鬪開始せらるゝや所屬中隊は先づ大隊の渡河掩護に任じ續いて敵彈下に勇躍渡河を敢行し渡河後

は地形錯雜且敵彈愈々熾烈なる情況下に勇戰し所屬中隊の任務遂行に大に貢献した。其の後敵を急追し拒馬河々畔北相の堅壘に對して攻擊を準備するに至つたが渡河實施前より猛烈なる敵の十字火に曝されつゝ常に第一線中隊内に在りて敵の逆襲に備ふると共に前面の敵を攻擊し十五日夜の渡河並に渡河後の激戰に方り勇敢機敏なる行動に依り敵を壓倒して突擊の動機を作爲し又戰機に投じて敵の逆襲を阻止する等中隊の任務達成に重大なる素因を與へた。

九月二十二日大冊河々畔石頭村附近の激戰に於ては强行軍に引續き二十一日夜半の激戰及び兵團の迂回追擊戰闘を通じ濕地斷絶の困難なる地形に行動し疲勞困憊其の極に達したるも氏は旺盛なる志氣を以て戰友を激勵し克く上官の命令意圖を體し積極的に活躍を續け以て所屬中隊をして赫々たる武勳を奏せしめた。二十二日夜十二時更に追擊を續行して七里餘を突破し宋家屯附近に達せし時敵兵約百名に遭遇した。此の時氏は三番銃手として之に潰滅的打擊を與へ迫擊砲三門輕機關銃三銃を鹵獲し翌二十四日午前八時三十分頃堡定南方約二里の北溝頭に於て再び敵兵約七、八十名を潰滅して友軍第六中隊の前進を容易ならしめた。

十月初旬淳沱河々畔陳村附近の戰闘に於ては水深身長を沒する濁流而かも河底軟弱にして渡河極はめて困難なるに拘はらず氏は率先勇敢に渡河を敢行して所屬中隊の渡河行動を容易ならしめ尙渡河後の戰闘及掃蕩に關し常に勇猛果敢衆兵の模範となり中隊戰闘に寄與する所頗る多かつた。

十月十一日元氏附近の攻擊開始せらるゝや所屬中隊は終始第一線先頭に進出し他中隊の戰闘を容易ならしめたが氏の所屬第三小隊は晝間第九中隊に配屬せられ最も勇敢に行動して同中隊の戰闘を有利に進展せしめ同夜更に第八中隊に配屬替となり益々奪闘克く重機關銃の威力を發揚して同中隊の攻擊を容易ならしめたが當面の敵亦頗る頑强に抵抗し彼我の銃砲戰は白熱化するに至つた。此の時氏は六番銃手として篠つく敵の彈雨を物ともせず神速機敏に彈藥を補充し所屬小隊の戰闘續續に毫も遺憾なからしめた。然るに氏は此の時飛來した敵の一彈に悼ましくも口唇部に裂傷を受け衞生隊に收容され治療看護を受けたが其の甲斐もなく同月十五日竟に戰場の華と散つた。其の後我が軍は氏等の尊き犧牲に依り元氏附近の頑敵を粉碎して臨城方向に敵を猛追した。

氏や曩には滿洲事變に赫々たる武勳を奏し散じて鄕黨に歸へるや質實剛健家業に精勵し以て無言の裡に世道人心を感化し更に聖戰參加の光榮に浴するや既得歷戰の經驗に基き克く分隊の中堅となり分隊長を輔佐し他銃手と渾然一體となり幾多の障碍を克服し又適時適切に銃側に彈藥を補給し以て重機關銃隊の精鋭を發揚して戰勝の途を開拓した。寔に是れ皇軍歩兵の本領を發揮せるものにして又一般軍人の鑑となすべきである。今や其の壯容に接すべくもなく痛惜に堪へざるも氏が累次の功績たるや天晴れ皇軍戰史に牢記せらるべく其の不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　藤垣英也

此の父にして此の子あり、滄州攻撃に奮戰玉碎す

氏は兵庫縣城崎郡五ノ莊村の人にして父を丈三母をしなと云ひ大正五年九月一日に生れ未だ獨身であつた。資性寡默温良にして一見快活の風なきも意志强固にして一度決せし事は必らず遂行せざれは止まさる烈々たる氣慨と實行力とを持つてゐた。昭和五年三月五ノ莊村小學校を業卒後專念農に從事し殊に居村農業振興の爲め村農會に於て奉仕的に活動し村民一同より感謝せられてゐた。又家庭に在りては孝養至らざるなく且弟を慈しみ一家平和の中心を爲してゐた。斯くて昭和十二年一月徴兵として鳥取歩兵聯隊に入營專心軍務に精勵する事となつた。

支那事變起るや長野部隊第五中隊に屬し第一小隊第二分隊小銃手として昭和十二年八月十日勇躍征途に就いた。其の出征に際して村人に「白木の箱で歸つた時は萬分の一でも國の爲めになつたと喜んで下さい云々」と固き決意を述べて一同を感激せしめた。

所屬隊は北支上陸後天津附近の殘敵を掃蕩し九月中旬滄州攻撃の爲め津浦線に沿ひ南進し九月二十一日夕より滄州の前哨陣地とも謂ふべき人合庄の堅陣を攻撃した。此の時氏は足立少尉の指揮する獨立小隊にありて勇敢に奮戰して人合庄西端無名寺を占領し引續き敵を掃蕩追撃し所屬隊の戰勝に大なる貢献を爲した。

九月二十四日愈々滄縣の敵主陣地を攻撃するに當りては所屬中隊は未明より接敵前進を開始せしが暗夜にも拘はらず敵彈甚しく殊に側面トーチカよりする射撃は最も激烈を極はめた。氏はかくの如き猛射を物ともせず勇敢に前進又前進し第一水濠を越え敵前五十米に迫り第二水濠に到達した。此の時第一小隊は中央に增加され突撃準備に着手し愈々機熟して突撃を決行するや當時敵彈一層激しく宛も篠つく雨の如くであつたが一同猛火の下之に屈せず決河の勢を以て敵陣に殺到し喊聲は曉の天地を震駭し忽ち壯烈なる肉彈戰は展開せられ格闘の聲は隨所に起り彼我の死傷續出する中に刻一刻我が將兵は敵を撃滅しつゝ前進し氏は此の際勇敢にも率先分隊の先頭に立ちて突入敵陣内に突進して奮戰格闘の上逃げんとする敵を追撃中無念敵彈腹部を貫通し竟に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。然し中隊は氏等の奮戰と尊き犧牲とにより午前八時さしも頑强なりし敵陣地を占領することを得た。

因に戰死の報傳はるや父丈三氏は「私の兄は日露の役に戰死しましたがこゝに又伜も戰死致しました。第一線に立つて戰つての戰死と思ひますが御國の爲めに勤めを果した事は家門の譽です」と健氣に語つた。

愛兒を君國に捧げて家門の譽と語る忠誠の父に養育せられし氏は其の出陣に當り素より決死殉忠の覺悟があつた。果せる哉其の決意の迸る所身命を君國に捧げて剛膽勇敢率先奮闘克く兵の本分を完うして遺憾なかつた。聖戰幾何もなくして氏の如き忠勇の士を喪へるは痛恨に堪へざるも一戰玉碎して以て樹てたる拔群の武功は千載の下皇軍戰史に輝き擧家父祖傳承尊重せる日本精神の發露は氏の武勳に一段の光彩を添へるものと謂ふべく其の英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國を守護し更に一家の守護神として遺族の將來を加護照覽する事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級　藤本利市

難局に陣地占領掩護の重任を全うし黄河北岸の華と散る

氏は兵庫縣加東郡米田村の人にして大正二年七月十日生れである。父を熊市母をかねと云ひ妻たねとの間に一子春雄を擧げた。性質温順にして孝心深く父母を安んずるを以て第一義となし又同情心に富み知己朋友との交誼圓滑農繁期に在つては自家の仕事のみならず進んで親族の分迄も手傳ふ程の勤勉家で地方青年の模範であつた。昭和二年三月米田尋常高等小學校高等科第一學年を修了し爾後專ら家に在りて長兄を輔け農に從事して居た。

昭和七年十二月徴兵として姫路歩兵第三十九聯隊に入營し其の後滿洲事變に參加し其の功により勳八等に叙せられ瑞寶章を賜はり且滿洲國より建國功勞章を授けられた。昭和十一年五月滿期除隊となつたが在營間射擊優秀に付射擊の優等賞狀を又除隊に際し善行證書を授けられた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召沼田部隊淺野隊に屬し勇躍征途に就き北支上陸後は隆暑に耐へ泥濘を征服し大小十數度の激戰に克く輜機關銃分隊員として勇戰奮鬪し拔群の功績を樹てた。

馬廠附近の戰鬪に於ては糧秣の不足と惡水に惱まされつゝ惡道を踏破して强行軍を行ひ八月三十一日以後所屬部隊が胡連莊附近の警備に任ずるや刑家埝に於て敵の銃砲彈の猛射に曝されつゝ水深腰部に達する水濠に在りて或は斥候或は歩哨勤務に服し敵情監視の任務を完うし滄州附近馬落坡の戰鬪に於ては所屬部隊は聯隊豫備隊となつたが九月二十一日夜より二十三日霊に亘る長時間敵の彈雨に曝されつゝ第一線大隊たりし第一大隊の後方二百米を前進し二十四日午前一時三十分敵陣内を前進中突如左翼方面より敵の逆襲を受けた。此の時氏は速かに輜機分隊長の隷下に之を反擊して其の企圖を挫折せしめ以て所屬部隊の危急を除去し爾後中隊が第一線となり張新庄を占領するや數回に亘り約四百名の敵より逆襲を受けたが當時我が陣地の設備は未だ不完全にして優勢なる敵部隊より猛烈なる銃砲彈を集中され容易ならざる戰況となつた。併し氏は沈着剛膽危險を顧みず彈藥運送を圓滑にし以て輕機の全威力を發揚し之を擊退するを得た。

爾後德州に向ふ追擊戰鬪に入つたが九月二十八日正午頃所屬中隊は釣角台及劉八里庄を攻擊して一擧に之を占領し氏は之等部落の殘敵を掃蕩中午後五時頃周八里庄に約四百名の敵逆襲し來れるを知り所屬中隊は之が救援に向つた。此の時氏の小隊は中央火線に增加し正確猛烈なる射擊を以て敵に多大なる損害を與へ遂に之を潰走せしめた。十月二日午後三時頃趙官屯の敵を攻擊するに方りては氏は第一線中隊左小隊に屬し次で王院の攻擊に參加し十月上旬より同月下旬に亘る德縣附近に於ける次期作戰準備間は李莊附近に位置し勤務繁劇の裡歩哨斥候等として常に積極的に活躍し所屬中隊の諸準備に貢献する所多大であつた。

十一月上旬黄河北岸の掃蕩作戰に於て所屬中隊は十一月四日東蔡家附近の敵情及地形の威力偵察を命ぜられ午後一時二十分より約一時間三十分の戰鬪を行つたが氏は其の間右迂回隊たりし第二小隊要員として勇敢に戰鬪し次で十一月八日所屬中隊は右迂回隊として十一月八日午前四時五十分鳳凰店を出發し苗家方面邱莊に向ひ前進した。當時氏は第二小隊に屬し約八百米の間一木一草もなき平坦開濶地を彈雨を冒して勇敢に前進し約五十名の監視部隊を驅逐して王李莊に突入し次で其の西北より邱莊の敵を包圍すべく凹道を利用して前進した。然

るに敵約二百名は土壁の銃眼に據り樹木池沼の障碍を恃みとし猛烈なる狙撃火を浴びせて來た。所屬中隊は猛火を冒し部落の西側二百米まで接近し東面して此の敵を攻撃するに至つた。氏は第一彈藥手として分隊長に跟隨し射撃準備を整へんとしたが附近は平坦開濶地にして適當なる陣地を求め得なかつた。だが前方百米の墓地と覺ぼしき小堆土五六個を發見し分隊長以下悲壯の決意を以て此の堆土に向つて躍進した。敵は我が勇猛なる躍進に恐れをなし前方五六十米の近距離より益々猛烈なる狙撃を加へて來た。氏は克く沈着剛膽に小銃を以て應射し多數の敵を殪し分隊の行動を掩護して居たところ不幸敵彈飛來左下腿部に貫通銃創を受けた。併し氏は何にタソと負傷部の手當も行はず尚數彈を發射中又もや第二彈飛來右胸部に貫通銃創を受けた。氏は是れ迄と思ひしか分隊長！　矢内！（射手の姓）賴むぞと云ひ遺し大聲で　天皇陛下萬歳を絶叫し壯烈なる戰死を遂げた。本戰闘は所屬分隊長以下八名中七名迄死傷した程の激戰であつたが氏の勇敢壯烈なる行動は多數の戰友を鼓舞し以て所屬中隊の重大なる任務達成に貢献し以て戰捷獲得の素因を確立せしめた。

氏や郷に在りては一家の中堅となり諸人の愛敬を受け軍に從ひては誠實勇敢上下の信賴厚く重要戰局に處し常に身命を惜まず報國の至誠を捧げ皇軍戰勝獲得の爲め尊き人柱となつた。其の功績たるや皇軍戰史を飾り其の芳名は千載に讃はれ其の英靈は永世に生き尚も皇國及一家の守護神として尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　藤井藤吉

勇敢なる輕機關銃手、鎭邊攻撃の華と散る

氏は新潟縣三島郡與板町の人にして父を藤作母をフジと稱し大正三年三月十一日に生れ未だ獨身であつた。性溫厚寡言の半面に豪膽不撓の風格を備へて居た。昭和四年三月與板小學校高等科を卒業後大工奉公をなし餘暇を以て青年訓練所に通學し熱誠以て修學に努めて居た。昭和十一年一月現役兵として高田歩兵聯隊に入營し同年十二月一等兵に進級し翌十二年四月滿洲派遣隊に編入され五月二十四日より同月三十一日迄濱江省に於て第一次討伐に參加し其の後哈爾賓附近の警備に任じ各種の勤務に服して居た。

支那事變勃發するや同年八月猪鹿倉部隊植田部隊森中隊の第一小隊第二分隊輕機關銃手として聖戰に參加し哈爾賓より大同に向ひ前進中鎭邊附近の戰闘に參加し九月十日猪鹿倉部隊が黄土溝北方高地の敵陣地攻撃に方りては所屬中隊は植田部隊の右第一線となり午前八時三十分より攻撃前進を開始した。此の時中隊は先づ第二小隊をして一、三三〇高地を又第一小隊及び機關銃小隊を以て其の後方陣地を攻撃せしめた。然るに當面の敵は中央軍の精鋭であり且つ巧に地隙を利用して堅固に陣地を占領し其の銃砲火線に機關銃の火力は物凄くも急霰の如くであつた。氏は第一線小銃手として沈着勇敢其の猛火の中に正確なる射彈を敵に送り一進一止敵に近迫しつゝ常に敵情に注意して之を分隊長に報告し其の指揮を容易にする等實に第一線兵の模範であつた。斯くて氏は小隊と共に將に敵陣地直前の斜面に取りつかんとして猛進中不幸敵の一彈は氏の心窩部並に腰部を貫通し竟に其の場に倒れた。時に午前十一時三十分であつた。氏は其の後隊繃帶所に收容せられ厚き看護を受けたが終に其の效なく同日午後十一

時戰友に護られながら從容北支の華と散つた。然かし氏等の勇戰に依り中隊は遂に戰勝を博し敵の堅陣を奪取したのであつた。

氏本戰闘開始の直前嚴父に宛てたる書信の一節に「今回突然我等軍人が名譽此上もない大命を拜し二十日ハルビン發云々……何分敵は倍數の兵力との事に聞て居ります。何も自分より申上げる事はありませんが今迄私より度々通知致した通り此度は元氣溢剌一死を以て皇軍の爲に大に戰ひます。では之れを最後の手紙として御受取下さい。皆樣に特によろしく」とあつた。其崇高なる覺悟其勇敢なる行動は眞に滅私奉公の至誠に燃え熾るものであつて今や肉體空しと雖其の赫々たる武勳は皇軍戰史に輝き其の勇名は天晴れ皇國軍人の華と謳はるべく氏が英靈は父母に生き遺族に生き又戰友後輩に生きて皇運を扶翼し奉り又一家の將來に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　深田義助

勇敢なる輕機銃手、敵の猛火を浴びつゝ戰勝の途を拓く

氏は鳥取縣米子市万能町の人にして父を銀太郎母をトヨと云ひ大正五年一月十五日に生れ未だ獨身であつた。資性正直にして眞面目親に仕へて孝心深かく又弟妹をいたはりて家業を扶け世人との交際亦圓滿にして地方青年の模範者であつた。昭和三年高等小學校を一年にして中途退學し昭和十一年徴集兵として松江歩兵聲隊に入營した。

支那事變起るや福榮部隊に屬し昭和十二年七月二十七日勇躍征途に就いた。北支上陸後八月二十五日より九月六日に亘る間に於ては津浦沿線大郝庄附近の彈闘に大小行李の掩護警戒に任じ孫門口附近の戰闘には同村南側の敗殘兵を掃蕩し燒窰盆附近の戰闘には第一線として參加勇戰し引續き九月中旬に於ける馬廠の激戰には馬廠川右岸地區の殘敵を掃蕩し九月十三日牛新庄附近に於ては再び第一線となり、九月二十七日より十月五日に至る間德縣に向ひ敵を追擊し十月六日より十日に亘り王村店附近に於て諸種の警戒勤務に從事する等此間泥濘膝を沒する惡路を踏破或は食糧缺乏飢餓に耐へ而かも警戒勤務に從ひては不眠不休の努力を續け或は晝夜兼行の强行軍を以て敵を追擊し或は殘敵を掃蕩して治安を確保し又第一線に立ちては輕機關銃射手として勇戰奮闘する等克く各種の任務を完うした。

十月十三日所屬中隊は大隊の第一線となり正莊の敵を攻擊するや氏は第二小隊輕機關銃射手として河上少尉の指揮に屬し本戰闘に參加した。此の日中隊は午後四時三十分より行動を開始し攻擊前進せしが敵は堅固に陣地を占領し各種の障碍を設け頑强に抵抗した。氏は彈丸雨飛の間敵彈を物ともせず勇敢率先躍進を續け其間我第一線の前進を妨害する敵機關銃を求めては適時正確なる射擊に依り猛火を浴びせて之を制壓して以て中隊の前進を容易ならしめつゝ敵に近迫し愈々中隊が突擊に移るや氏は其の突擊點を猛射して中隊の突擊前進を援助し機を失せず追及して敵陣地に突入せんと疾驅前進した。其の途中午後五時五十分敵前七十米の地點に於て惜しくも胸部に盲貫銃創を受け其場に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。而して所屬中隊は氏等の勇戰奮闘に依り午後七時敵陣地を奪取し午後九時完全に掃蕩するを得た。

氏や郷に在りては孝悌の人、出て丶戰場に戰ふや常に率先前進し猛火の下勤々もすれば膠着せんとする戰線を驅つて推進に貢献し其止まりて銃を据へるや沈着正確適時敵に多大の損害を與へて之を壓倒震駭した。歩兵の攻撃前進間に於ける輕機關銃射手の任務として此れ以上の働きはなく氏の如き實に其職分を完うして毫末も遺憾なかつた。かくの如きは身命を君國に捧げ斃れて後已むの人にして初めて能くし得る所である。あゝ斯る忠誠勇武の士を喪ふ眞に痛惜に堪へず然れども氏の赫々たる武勳と職責遂行の示範とは永く後世に傳へて皇軍戰史を飾るべく又不滅の英魂は護國の神と仰がれ其神靈は尚も皇國を護り又一家の守護神ともなり遺族の前途に清き光明と強き力とを惠み其多幸を佑助して已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　福島龍吉

壯烈敵の掩蔽部に突入し蘆溝橋の華と散る

氏は東京市本郷區駒込千駄木町の人にして亡父を福次郎母をユウと云ひ大正五年六月十五日に生れ未だ獨身であつた。資性温順責任觀念旺盛にして而かも不屈不撓の氣慨に富んで居た。昭和四年三月根津尋常小學校を卒業し間もなく日暮里の吉場煖房機製作所に勤め昭和十二年三月現役兵として北支那駐屯歩兵聯隊に入隊した。當時北支に於ては物情騷然として排日侮日の行爲愈々露骨に行はれたが氏は此緊張せる狀況下に只管軍務に精勵しつゝ天津附近の警備に任じて居た。

支那事變勃發するや氏は直ちに安達部隊第五中隊の小銃手とし北平方面へ出動した。斯くて七月二十八日の南苑總攻撃に方りては所屬中隊は大隊の左第一線となり南苑の西北角に向ひ早朝より攻撃準備を整へ友軍砲兵の攻撃前進の信號彈の焦煙を合圖に勇躍前進したが午前九時萬字地西端の敵より猛射を受け中隊は先づ此の敵を撃破するに決し之を攻撃した。然るに敵の掩蓋機關銃の猛射を浴び前進頗る困難となつた。此時氏は堅忍奮闘終始正確なる射撃を以て敵を火制し中隊の戰勝に多大の貢献を爲した。續いて翌二十九日の蘆溝橋攻撃に際しては氏の所屬中隊は再び大隊の左第一線となり高粱地帶を遮蔽して前進し午後六時三十分敵陣間近き沙凸子西端附近に進出して友軍砲兵の突撃準備射撃の効果を待つた。午後七時頃我砲撃に敵の銃砲火稍劣へたるを見たる第一線大隊は重輕機關銃及擲彈筒等の掩護射撃の下に敵陣地の東端に向ひ一齊に決然突撃を敢行した。斯くと見たる敵は再び猛射を浴びせ來り爲に我死傷續出するに至つたが我第一線將兵は雨と降り來る彈丸を物ともせず勇猛果敢に突入して一擧東門樓上を占領した。此の時氏の屬する第二小隊は第一分隊を先頭として東門樓上より城壁上の殘敵を掃蕩しつゝ其西南端目がけて前進した。然るに西南端城壁上の敵機關銃及城壁東方凸角部に在る掩蔽部よりの猛射に會ひ前進頓に困難となつた。茲に第一分隊長は折柄の薄暮を幸ひ獨斷先づ掩蔽部を奪取して小隊の前進を掩護するに決した。此時迫影の形に副ふ如く分隊長より離れず奮闘を續け居たる氏は分隊長と共に敵の設けし塹壕内を巧に潜行して掩蔽部の直前約十米に近迫し敢然壕より躍り出で白兵を揮つて勇猛果敢に掩蔽部に突入した其の瞬間無念西南凸角壘上の敵より數發の手榴彈を投げつけられ氏は頭部に其破片創を受け分隊長と折重なつて共に壯烈なる戰死を遂げた。

氏は出動に際し遺言を認め之を中隊長に託した。其の中に「國家の非常時に北支の第一線に居る自分は今は何も思ひ遺す事はない。東京の家に居た時母上に對し思ふ樣に孝行と云ふ程の事も實行して居なかつた。今國防の第一線に於て軍務に邁進して居る事が自分に取つて一番大切であり又母上への孝行だとも思つて居る。萬一戰死した後は兄弟皆樣で宜敷母を賴む」とあつた。嗚呼氏急遽出動に際し父亡き後の母の慈育高恩を偲び忠孝一如の道を思うて決死報國を覺悟したのであらう。南苑攻擊に蘆溝橋攻擊に氏の勇敢なる行動活躍は全く死を超越し殊に蘆溝橋に於て決然分隊長と共に敵の掩蔽部に突入せる如きは眞に一身を君國に捧げ斃れて後已まんとする靈忠至誠忠孝一如の精神の發露と謂ふべきである。噫氏聖戰に參加して僅かに一旬蘆溝橋の華と散る洵に痛惜の極みである。然かし士は百戰功なき瓦全を恥づ。氏が現世は餘りに短かゝりしも氏の赫々たる武勳は燦として皇國戰史に輝き其の英魂は永へに護國の神と祀られ神靈尙も皇國を守護し又一家の守護神として遺族に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　小林侶章

安仁街の激戰に死力を以て一角を死守し戰勝の途を拓く

氏は島根縣大原郡日登村の人にして父を源三郎母をチリと云ひ大正五年三月十四日に生れ未だ獨身であつた。性溫良にして氣慨に富み幼時より軍人を好んで居た。昭和五年三月西日登小學校高等科を卒業し又同七年二月には日登實業補習學校を卒業の上家庭に在りて家業を扶けつゝ日登青年訓練所に入所同十一年三月所定の課程を終了し翌十二年一月現役兵として松江歩兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵し成績亦良好であつた。

支那事變起るや同年八月福榮部隊に屬し揚井中隊の小銃手として勇躍北支戰線への征途に就いた。斯くて八月下旬より津浦沿線の夏庄燒窰盆馬廠滄州の各戰鬪に參加し其間氏は泥濘汎濫地帶に彈雨を浴びつゝ敵陣地に肉迫し又突擊に當りては率先勇敢に敵陣地に突入する等克く分隊の中堅となり戰勝獲得に寄與する所多かつた。特に九月二十日滄州附近王子家瑪頭の攻擊に際しては正確迅速なる射擊を以て敵を壓倒したる後所屬第三小隊長と共に敵陣地に突入して戰果を擴張し敵の逆襲を受くるや沈着有效なる射擊を以て見事に之を擊退した。其後所隊中隊は十月初旬にかけ興濟鎭及德縣附近の警備に任じ氏は下士哨勤務として日夜至嚴なる警戒勤務に服し任務を全うした。

所屬中隊は十月十三日平原城附近の敵情捜索を命ぜられ午前八時行動を起し敵陣地に近接せしが午後一時頃に至り有力なる敵の警戒部隊に衝突し中隊長は獨力之を攻擊するに決した。氏は此際左第一線小隊内に在りて正確なる射擊を以て敵を壓倒し突擊に方りては率先小隊の先頭に立ち敵陣地に突入し之が占領に貢獻せる所甚だ大であつた。中隊は更に敵主陣地に對し威力偵察を續行したが氏は斥候要員として選拔され敵の猛烈なる彈雨を冒して敵陣地に肉薄し豪膽機敏に陣前の障碍物を詳細偵察して斥候長に報告し以て爾後に於ける中隊戰鬪に貴重なる資料を與へ又翌十四日拂曉攻擊に際しては第一線小隊の小銃手として地雷鐵條網の在る地區を巧に前進し遂に平原城の一角に突入し所屬中隊戰勝の一素因を作つた。

其後同月十八日には鳴鶏店の敵陣地を撃破し十一月十日より黄河北岸の掃蕩戰に參加するに至つた。當時津浦線を敗走せる敵は北上せる山東軍に合し黄河の線に於て必死の抵抗を企圖し黄河北岸地區にも堅固なる陣地を構築して歩々の抵抗を試みたのである。所屬部隊は同月十三日此敵に對し攻撃前進を起し所屬中隊は尖兵中隊となり未明行動を起した。此日快晴なりしも霜曠野に滿ち水面亦薄氷を見る中を氏の所屬松原小隊は勇躍前進を續け午後四時敵前渡河を敢行し輕敵を驅逐して安仁街附近に到達した。此時前面の部落に據れる敵は俄然輕重機關銃の集中火を浴びせ來り我が主力は完全に渡河を實施し得ず僅かに二中隊を以て攻撃を開始するに至つた。氏の小隊は憤然敵の猛火を冒しつゝ敵前百米に近迫して薄暮となつた。中隊は此機を利用して夜襲するに決し更に前進を起した。此時敵は兵力を增加せるものゝ如く驟雨の如き猛射を浴びせて來た。所屬松原小隊は中隊の最前線に在りて熾烈なる火力を以て敵を制壓しつゝありしが好機を見つけて小隊長は突撃令と共に率先秋水一閃隼の如く敵陣目がけて突入した。此時氏は小隊長を撃タスナと叫びつゝ小隊長に次いで突入し手榴彈を投げつける敵を氏も亦手榴彈を投げつけると同時に格闘して之を殪した。小隊長は脚に負傷したが之に屈せず氏等と共に烈しき手榴彈戰を交へ遂に敵陣地の一角を占領した。小隊長分隊長は部下數十名と共に此激戰に壯烈なる戰死を遂げたが氏は之に屈せず尙も手榴彈を以て逆襲し來る頑敵を阻止し占領地域を死守した。然るに執拗なる敵は新手を替へつゝ群がり來りし爲氏は銃劍を揮つて數人を仆す中不幸一彈飛來頭部を貫通され小隊長の傍らに執銃のまゝ壯烈なる戰死を遂げた。松原小隊に續いて突撃を敢行せる中隊主力は水濠に阻まれ拂曉頃漸く敵陣地に突入しやがて大隊主力は敵を包圍して之に殲滅的の打撃を與へ赫々たる戰勝を獲得するに至つた。

因に氏の實兄小林茂之助伍長は同一戰場に參戰中であつたが氏の戰死の報に接し麥畑を擔架で運ばれ行く變はり果てたる弟の死骸に取りつき「おう侶章！　立派に死んでくれたか」と呼びかけた。傍の衛生兵も暗然として弟さんは敵を五人まで刺殺し六人目の時小銃彈でやられたのですと傳へた。兄伍長は弟も本望でせう子供の時から兵隊が好きでしたからナと默禱を捧げたと云ふ事である。

氏や忠誠勇武突破戰線實に百數十里其間泥濘飢渴を克服し時には砲煙彈雨に曝されつゝ不眠不休の激戰に常に一死報國の念燃ゆるが如く幾多の勇戰奮鬪を續け所屬部隊をして赫々たる武勳を奏した。殊に最後の參戰たるや壯烈鬼神を泣かしめ上官に對する情義亦人をして肺肝に銘せしむるものがある。あゝ是れ正に軍人精神に徹底せるの士今や其壯容に接する能はずと雖も其功績たるや天晴れ皇軍戰史に輝き不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　小林正

壯烈敵の奇襲に會し分隊長代理として而も自ら輕機銃を執り激鬪玉碎す

氏は新潟縣北魚沼郡川井村大字川井新田の人にして父を三治郎亡母をカヨ繼母をマツと云ひ大正四年三月二十二日の生れで未だ獨身であつた。昭和二年三月川井尋常高等小學校を卒業し同年十月東京市に出で鍍金工の見習ひとなり同六年青年訓練所に入所し同十一年一月現役兵として高田歩兵聯隊に入營した。資性溫順業務に熱心軍隊內に於ても成績良好にして入營後半歲にして一等兵に進級し翌十二年四月には所屬隊と共に滿洲に派遣せられ濱江省五常縣向陽山着同地附近の警備に任じ五月には關東軍第一期肅正として第一次討伐に參加した。

昭和十二年七月支那事變の勃發するや猪鹿谷部隊に屬し八月下旬勇躍して北支方面の征途に就いた。やがて十月三日崞縣附近の戰鬪の際氏は第三小隊第一分隊長宮川軍曹の指揮に屬し本隊に追及中三日午後八時崞縣城東北方二粁の地點に至るや突如數十發の射擊を受くると共に約五、六十の敵歩兵襲擊して來た。此の時氏は克く分隊長の命に從ひ勇敢に應戰遂に分隊は優勢なる敵を見事擊退し本隊に合したのであつた。續いて所屬隊は翌四日より原平鎭に向つ總攻擊を開始した。當時氏の中隊は第一線に在りて攻擊前進したが五日午後三時半頃敵の銃砲火は猛烈を極はめ死傷續出攻擊意の如く進捗せず斯くする內氏の分隊長宮川軍曹又負傷し直に大橋上等兵分隊長代理として起つや間もなく壯烈なる戰死を遂げた。大橋分隊長代理の戰死を見た氏は直に起て分隊を指揮し先づ輕機關銃手小林一等兵をして敵の掩蓋機關銃を猛射せしめたが小林一等兵も亦負傷した。茲に氏は自ら其輕機關銃をとり敵を猛射すると共に部下を激勵し奮戰を續けありしが暫くして氏も亦頭部に貫通銃創を受け竟に壯烈なる戰死を遂げた。

負傷せる宮川分隊長は氏の父三治郎氏に宛て(前略)小林上等兵は當分隊の中堅として至る所大敵を擊破致し其行動は鬼神にも優る勇敢な奮戰を致しました。分隊は時には敵兵を捕虜とし或時は敵の夜襲を擊退し攻擊に追擊に常に任務を完全に遂行致し特に小林上等兵の率先垂範は分隊の戰鬪を有利ならしめ最も其剛勇を發揮して居ります(後略)と。戰場に於ける氏の奮鬪の如何に華々しかりしかは推察に難からざる所斯くて積極的に分隊長を輔佐し又分隊長代理としての勇猛果敢なる行動、機宜に適したる指揮は克く戰捷の因をなしたる次第にて其功績は拔群であり又百折不撓の攻擊精神及旺盛なる責任觀念は克く中隊將兵の志氣を鼓舞し眞に軍人の龜鑑となすに足るもので氏は聖戰に參加の日こそ淺けれ其勇名は赫々たる武勳と共に千載に芳を留むるであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　小島竹治

孟村の激戰に奮鬪して重傷を負ふも意氣昂然たる輕機關銃手

氏は茨城縣眞壁郡鳥羽村の人にして父を新次郎母をしまと云ひ大正五年八月二十五日に生れ未だ獨身であつた。性溫厚篤實にして孝心深く家業に精勵し而かも常に明朗快活同情心に富み交際亦極めて圓滿にして友人間に爭ひ事等起りし場合も氏が出でゝ仲裁すれば必ず圓滿解決すると云ふ有樣にして一般世人の愛敬を受けて居た。昭和六年三月鳥羽小學校高等科を卒業の後は家庭に在りて兩親を扶け農業に精勵し傍ら青年訓練所へ通學し昭和十一年鳥羽農業青年學校研究科を修了した。翌十二年一月現役兵として水戸歩兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵し同年七月歩兵一等兵に進級した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召石黑部隊に屬し川上中隊の輕機關銃射手として勇躍征途に就いた、北支到着以來所屬部隊は九月中旬永定河畔に敵前渡河を決行し蜿蜒たる敵の堅陣の鎖鑰を成せる北相各相の堅壘を突破し爾後息つく暇もなく京漢線に沿ひ敵を急追し九月十六日には拒馬河南岸地區に望海庄可西務の數線陣地を攻擊し激戰奮鬪の後遂に之を奪取し九月二十二日には敵が大冊河の大障碍を利用し其南岸一帶に亘り多數の日子を費やし最も堅固なる陣地を構築し以て難攻不落を豪語せる一大陣地帶の重要據點たりし石頭村附近の敵陣地を夜襲を以て攻略し次で保定に入城し更に敵を追擊

して石家莊の線に達し爾後の蕩揚戰に準備した。氏は其間或は泥濘脚をも沒せんとする高粱畑を彈雨に曝され乍ら率先敵陣地に肉薄し或は水深身長を沒する急流而かも敵岸水際には水雷を布設せる危險界を突破し或はトーチカ火を吐く數線陣地に剛膽不敵の行動に依り輕機關銃の全威力を發揚して戰勝獲得の端を開く等目覺ましき活躍を續けた。氏は體力氣力常に旺盛にして重量の重き輕機關銃を連續二日間も一人で擔ぎ通し其勞力容易ならざるを見て戰友等は交代せよと勸めたるも「何に大した事はない」よと平然として居た。

十月上旬に至り敵將商震は隷下二萬八千の大兵を率ゐ元氏附近を根據とし京漢線に沿ひ南進せる皇軍を阻止せんと既設陣地に據り頑强なる抵抗を企圖して居た。所屬部隊は之を撃破すべき任務を以て十月十一日午後五時半行動を起し敵陣地の一角たる孟村の堅壘に對し攻撃を準備した。所屬中隊は大隊長平櫻小佐の指揮下に第一線中隊となり氏は第一線小隊第六分隊射手として勇敢機敏に射撃位置を占め十二日午後零時五十分より愈々射撃を開始した。氏は慧眼克く當面の要點と敵情を看破し適時適切なる有效射撃を以て敵を壓倒震駭し以て攻撃前進の好機を作り又躍進に方りては常に率先勇敢に適切なる射撃位置を求め克く分隊長を輔佐し頑敵に殲滅的大打撃を與へた。而して敵が最後迄死守せる一據點に肉迫し奮鬪中敵前二十米に於て敵手榴彈の爲左前膊に破片創兼骨折の重傷を受け後送された。あゝ左腕は肩のつけ根まで四つに裂け見るも痛ましき重傷なるに拘はらず氏は毫も苦痛を訴へず「こんな傷は何んでもない直ぐ治つて皆と一緒に戰場に起つぞ」と極めて元氣であつたが其後容態急變し同月十五日夕陽大行山脈の彼方に沈む午後七時頃從容として戰場の華と散つた。而して所屬大隊は氏等の勇戰に依り當日午後三時頃孟村の敵陣地を占領するを得た。

氏や郷に在りては一村青年の中堅として將來を囑目され軍に從ひては快活明朗而かも武技に習熟し選ばれて輕機關銃射手の要職を命課さるゝや剛勇機敏克く小隊戰鬪の骨幹となり正確迅速なる猛射克く頑敵を壓倒し以て中隊戰勝の重要素因を作つた。洵に是れ皇軍歩兵の精鋭にして又一般軍人の魂鑑たるものであつた。斯かる忠勇義烈の士を喪へるは轉た痛惜に堪へざるも氏の功績たるや天晴れ北支戰史に輝き其の芳名は千古に讃はるべく其不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　後藤勳

難局に處し犧牲的精神を發揮し上海市政府郊外に玉碎せる擔架兵

氏は愛知縣西春日井郡新川町の人にして亡父を安次郎母をなかと云ひ明治四十二年十二月四日に生れ妻かぎ子との間に嗣郎、忠久の二愛子を擧げた。性善良にして責任觀念强く殊に母に仕へて孝養怠りなく忠實業務に精勵して居た。大正十一年三月新川小學校高等科を卒業し其の後は糸屑會社の店員として勤務し入營時に及んだ。昭和五年一月現役兵として名古屋歩兵聯隊に入營し克く軍務に精勵し良成績を擧げたが特に射撃は常に優秀なる成績を擧げ所屬大隊の特別射撃に優勝し大隊長より賞狀を授與せられた。氏は又曾つて戰友が名古屋城の外濠に墜落して藻掻きあるを發見するや我が身の危險

を顧みず何等の躊躇なく水中に跳び込み苦心慘憺努力の後遂に之を救出したが部隊長の知る所となり表彰せられ二日間の賞賞休暇を附與せられた。翌六年歸鄉の後は能く業務に精勵し在鄉軍人の模範として世人の信用益々昂まつた。

支那事變起るや昭和十二年八月應召大島部隊の擔架隊に編入せられ勇躍中支方面への征途に就いた。斯くて上海に到着直ちに傷者收容の諸準備に從事した。九月九日我が軍が上海市政府附近の敵陣地に對し攻擊を開始するや大島部隊長は氏の所屬矢井分隊に對し即時現在地を出發し吳淞鐵道棧橋の西方約一千米に在る才四附近に到り傷者を收容すべき任務を授けた。氏は矢井分隊長の指揮下に午後五時勇躍所屬隊の位置を出發し先つ除家宅に在りし歩兵聯隊本部に連絡せる後更に前進を續け除家宅西方約一千米に在る張家宅附近に差しかゝるや此の部落の西南方約百米の廟家宅に敵兵現はれ俄然小銃機關銃の猛射を受けた。附近は泥濘膝を沒する稻田であり歩行極めて困難且遮蔽物とても僅かに稻の葉を利用し得るに過ぎず目的地才四は張家宅の西方に望見し得るも前進路は依然として敵の銃火に暴露して居た。分隊の自衛火器は極はめて少く敵はそれを知りてや尙も猛射の手を緩めなかつた。今や第一線は刻一刻死傷者を增すの情況下に氏は皇軍將兵の一人たりとも速かに收容せねばならぬ。我が身の危險なるが故に躊躇すべき時にあらずと奮然敵の猛火を冒して挺身、分隊の先頭に立ちて前進した。此の時不幸一彈飛來腹部に貫通銃創を受け一時どつと倒れたが氣丈な氏は「何クソ」と再び起ち上り前進せんとせしに憎くや第二の飛彈に依り胸部に貫通銃創を受け再び打ち倒れ「分隊長殿ヤラレマシタ」と叫んだ。

分隊長は駈け寄つて「後藤ッカリセ傷は淺いぞ」と勵ませば氏は最早や答ふる力もなく唯微笑を浮べ從容として瞑目した。分隊長以下居並ぶ分隊員は氏の崇高なる犧牲的精神に深くも胸を打たれ涙と共に深き〳〵默禱を捧げた。其の後分隊全員は勇奮任務に邁進し所命の任務を完うした。

氏や鄉に在りては溫厚篤實一般青年の模範となり出でゝ軍に從ふや誠實義俠一隊の將兵を感動せしめ更に聖戰に從ふや難局に遭遇するも唯々至誠奉公一身を君國に捧げ切つて決死任務に邁進し竟に玉碎するに至つた。あゝ聖戰參加幾何もなくして今や其の壯容に接すべくもない。哀悼痛惜禁ずる能はずと雖も士の戰場に臨むや素より生還を期せざる所而かも其の死所を得るや洵に難しとする所であるが氏の功績たるや天晴れ皇軍衞生戰史に牢記せられて芳名を後世に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り又一家の守護神として一家殊に愛子等の前途に限りなき加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　後藤荒男

無錫鐵道の連絡兵、三十名の敵に襲はれて奮鬪し竟に職に殉す

氏は札幌市南一條東四丁目の人にして母をタケと云ひ明治三十六年三月一日に生れ妻貞子との間に一子大世を擧げた。性質溫順にして責任觀念に厚かつた。小學校を卒業後大正七年四月仙臺商業學校へ入校大正十二年同校卒業同年十二月現役兵として歩兵某聯隊へ入營し歩兵一等兵を以て歸休除隊となつた。

支那事變勃發するや八月二十五日應召後備歩兵隊羽田部隊に屬し勇躍江南戰線へ赴いた。十月四日及同月九日の兩日は將校斥候要員となり上海方面紀家灣南方天樂寺方向の敵情捜索に任じ慧眼剛膽よく將校斥候長を輔佐し的確なる情報を擧げ其の任務を全うした。十月十三日及同月二十六日天樂寺より張家宅附近に亘る敵陣地の攻撃に方りては第一小隊第二分隊に屬し克く分隊長の指揮下に敵火を物ともせず沈着正確なる射撃に依り多數の敵に損害を與へ以て頑敵撃退の素因を作

爲した。

次で十月二十六日所屬大隊が江灣鎭の攻撃に方りては第一線小隊に屬し午前六時三十分攻撃を開始したが氏は率先勇敢に奮鬪し午前七時十分遂に數線に陣地を占領せる頑敵を速かに撃破して江灣鎭市街を占領し之を確保した。

斯くて十二月二十八日より所屬中隊は無錫鐵道の警備隊となり戚墅堰鎭より周涇巷に亘る間の警戒を擔任した。氏は第一小隊第二分隊に屬し周涇巷停車場の警備に當り常に熱心周到且積極的に服務し克く重任を遂行した。同停車場警備分隊長松田伍長は毎日午前午後各一回宛望亭停車場との連絡を取りありしが一月十六日午後一時には氏と熊林一等兵の兩名を望亭驛に差遣した。氏等は連絡の任務を完了し歸途に就いたが途中毛家上附近に至るや突如敵敗殘兵約三十名と遭遇した。氏等兩名は勇敢にも此の敵と交戰し大に奮鬪したが不幸にして敵彈の爲め右側顎顴部に盲貫銃創複雜骨折と腦損傷を又左乳嘴部に銃劍刺創を受けて悲壯なる戰死を遂げた。

噫氏や斥候要員に選ばれては慧眼機敏克く貴重なる情報を提供し第一線に立つや勇猛果敢衆に擢んでゝ戰勝の端を開き又寡兵大敵に遭遇するも慴れず敢然として攻勢に轉じ最後迄奮戰力鬪竟に玉碎するに至つた。正に皇軍歩兵の精華にして又一般軍人の龜鑑たる者であつた。其の功績は江南戰史に輝き其の名は大和櫻と謳はれて千古に芳ばしく其の英靈は永世に生き尙も皇國を守り又一家の守護神として其の將來を護り殊には愛子の胸に深くも氏が忠誠の魂を刻み込まずには置かぬであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　小高一郎

挺身頑敵を狙撃して難局を打開し竟に外長城線の華と散る

氏は東京市葛飾區堀切町の人にして亡父を慶三郎母をかつと云ひ大正四年七月九日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚にして眞摯而かも氣慨に富み事に臨み熱心且つ勇敢剛膽であつた。又親に仕へて特に孝心厚かつた。昭和五年三月南綾瀬小學校高等科一年修了後家に在りて一家の柱石となり母を扶けて熱心家業に從事してゐた。昭和十一年一月徴兵として麻布歩兵聯隊に入營し爾來軍務に精勵中翌十二年渡滿し齊々哈爾附近に在りて警備勤務に服し又北滿各地の匪賊討伐に活躍し滿洲の治安工作に貢獻してゐた。

支那事變起るや小林部隊第五中隊に屬し第一小隊第一分隊輕機關銃彈藥手として昭和十二年七月末勇躍北支戰線に出動し天津到着後直ちに同地方の掃蕩戰に參加し續いて內蒙古張北附近に移動し同地方の警備勤務に任ぜしが氏は此の間不眠

不休緊張裡に熱心精勵以て克く其の任を完うした。

八月二十日所屬部隊が外長城線附近に進出せる敵を撃攘するに決するや所屬中隊は張北南方長城線に據れる敵に對し同日午前八時より行動を起し午後二時展開其の主陣地線上（へ）のトーチカ陣地に對し第一第二小隊を第一線とし攻撃を開始した。氏は左第一線小隊の最左翼火線分隊内にありて攻撃前進を起した。午後五時頃敵前五、六百米の線に達するや今

迄待機せる（ニ）火點の敵は主陣地上の敵と相呼應して小銃機關銃迫撃砲の十字火を浴びせ來り我が小隊の前進は頗る困難となつたが此の時小隊が（ニ）陣地の火點奪取を命ぜらるゝや氏は敵の熾烈なる彈雨の下危險を顧みず最も勇敢に彈藥補充に活躍し常に銃側の彈藥を充實して射手をして彈藥に顧慮なく敵を猛射せしめ小隊は其の制壓下に逐次躍進又躍進遂に敵前百米に達することを得た。然るに敵に近づくに從ひ敵火は益々熾烈を極はめ之に對し我が輕機亦猛射を加へ彈藥の射耗多きに拘はらず氏は勇敢に彈藥補充に活躍して銃側に彈藥を搬送充實し且其の間を利用して小銃を執り沈着克く正確なる射撃を行ひ逐次敵を壓しつゝありしが此の頃（ニ）陣地前面壕内に在りし敵の輕機關銃は俄然猛威を逞しうし來り此の敵を撲滅するにあらざれば我が小隊の突撃は困難なる狀況となつた。かくと見たる氏は現位置より更に十米躍進して此の敵輕機關銃を射撃するに好適の位置を占め此の敵を斃すべく沈着狙撃を開始し制壓しつゝありしが敵兵漸く動搖するに至り小隊長の突撃命令下るや勇躍分隊長と共に突入に移らんとせし其の時恰も午後七時十分頃敵彈左胸部を貫き其の場に倒るゝに至つた。然し剛氣の氏は之に屈せず尙も突撃を敢行せんとせしも重傷の爲め起つ能はず殘念と叫びかすかに　陛下の萬歳を唱へ竟に繃帶所に收容せられ衞生部員の手厚き醫療を受けたるも其の甲斐なく翌二十一日午前二時十分終に外長城戰の華と散つたが臨終に方り小隊長殿中隊長殿及母へ宜敷と戰友に賴み從容として瞑目した。而して所屬中隊は氏等の奮戰と尊き犧牲により同日午後七時三十分頃敵陣地を奪取することを得た。

氏の家鄕に在るや溫厚篤實の孝子たり出でゝ軍務に從ふや忠實勇敢の模範兵であつた。果然戰線に立つや幾多の辛酸に堪へ難局に遭遇して愈々志氣旺盛決死身を挺して所屬小隊の爲め頑敵を狙撃し戰勝の基礎を確實ならしめた。あゝ其の至誠純忠神人共に感激する所眞に是れ皇軍歩兵の本領を發揚し且又一般軍人の模範たるものであつた。今や內蒙古戰線の華と散り其の壯容に接する能はざるは轉た痛惜に堪へざるも一戰玉碎して以て皇軍の威武を宣揚し開戰劈頭暴慢不遜の敵を膺懲せる拔群の武功は千載の下皇軍戰史に輝き又英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國を守護すると共に一家の守護神ともなり老母の多幸を加護して已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　後藤　正

勇敢機敏克く本務を完うしたる中隊指揮班員

氏は神戸市林田區蓮宮通りの人にして父を鯉三郎亡母をちよと云ひ大正元年八月十三日生れで未だ獨身であつた。資性溫厚篤實而かも勝氣にして人に負くるを嫌ひ何事にも率先實行するの美風を有してゐた。大正十四年三月神戸市長田尋常

小學校を又昭和五年同市第一神港商業學校を經て同五年四月慶應大學豫科に入學同八年三月同校豫科卒業引續き立命館大學に入學し同十一年三月同大學を卒業した。其の後直ちに大日本職業野球名古屋軍に入社し其の猛將であつた。昭和十一年十二月徴兵として平壌歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵し學術の成績優秀上等兵候補者として中隊第一位を占め將來を期待されてゐた。

支那事變起るや鯉登部隊得丸隊に屬し中隊指揮班員として昭和十二年七月十二日勇躍征途に就いた。其の出發前軍事の書籍一切を家郷に還送して「若し歸らない樣なことがあつたら全部平(弟)に遺つて下さい」と依頼した。北支戰線到着後七月十八日より二十五日に亘る天津附近の警戒には大に緊張しつゝ不眠不休の活躍を續け七月二十六日郎坊附近の戰鬪に際しては克く奮勵して中隊と大隊本部間の連絡を確保し中隊長の指揮を容易ならしめた。續いて七月二十七日團河村の戰鬪開始せらるゝや中隊は午後二時過ぎ黄村より行動を開始し午後三時三十分頃第一大隊の左に增加を命ぜられ午後四時頃行宮の敵に向ひ攻撃を開始した。敵は機關銃迫撃砲其の他の火器に依り我を猛射し又銃眼掩蓋等に據り頑強に抵抗し我は死傷者續出するに至れるも士氣益々昂り猛烈に攻撃を續行し激戰實に三時間半午後七時三十分頃遂にさしもに頑強なる敵を撃退した。氏は此の間高粱丈餘に伸び歩行極めて困難なるに加へ炎熱灼くが如き炎天下に敵彈猛射の中を勇敢に中隊長と第一線小隊長間を駈け廻りて都度中隊長の命令意圖を第一線小隊長に傳達し第一線小隊をして常に中隊長の掌握下にあらしめ其の戰鬪指導を容易ならしめた。斯くて逐次敵に近接し指揮班員も射撃を命ぜらるゝや第一線に在りて沈着正確なる射撃を敵に加へ順次敵兵數名を斃し愈々第一線敵に近迫して中隊突撃に移るや氏は中隊長と共に勇敢に敵陣地に突入し直ちに若干の敵を刺殺し逃げ惑ふ敵に對しては射撃を加へて數名を斃し常に中隊長の身邊に在りて勇戰大に努めた。而して愈々中隊の突撃奏功し敵の背後に進出するや氏は直ちに大隊長との連絡を確保し中隊爾後の行動を容易ならしめた。

翌二十九日南苑の攻撃に當りては中隊は午前五時尖兵中隊として聯隊の展開線たる三合莊に向ひ前進を開始し午前七時三十分豫定の線に到着した。此の間氏は敗殘兵の射撃する中を意に介せず中隊長と大隊長との間の連絡に任じて其の任務を完うし聯隊展開後は中隊は聯隊の豫備となりしが敵は高さ四米の土壁上を堅固に占領して熾んに亂射せるを以て戰場到る處彈丸雨飛の狀態なりしも此の間氏は絶えず指揮班員として活躍し午後零時三十分頃正面の敵に逐次退却の色あるを認め中隊は軍旗と共に第一線に先だち敵兵營西北側土壁に向ひ突入せしが其の際氏は中隊長と共に率先敵陣に突入し土壁に上りたる刹那不幸敵の一彈氏の腹部を貫通し竟に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。然し氏等の勇戰に依り聯隊は午後一時過ぎ南苑の兵營を占領するに至つた。

因に氏は平素守備兵節を愛唱してゐた。其の一節に「命捧げて皇國の護り、どうせ生きては歸らぬ覺悟、男生命の捨て所。花は散り際男は度胸、大和男子の心意氣」の如き歌詞は氏の一死奉公の精神を如何に燃え立たせたことであらう。而かも之を好んで愛唱せる氏は如何に日本精神の所有者なりしかを窺ひ知らるゝのである。

氏戰陣に立つや既に生還を期せざる覺悟あり。選ばれて中隊指揮班員となるや天候地形の困難彈雨の中も素より意に介する所ではなかつた。只管重き使命を負ふて戰線を馳驅し皇軍歩兵中隊の戰力發揮に遺憾なからしめ殊に沈着敵を射殺し勇敢敵を刺殺す氏の面目躍如たるものがあつた。是れ一に身命を君國に捧げ斃れて後已む忠誠の發露顯現に外ならなかつ

た。聖戰間もなく氏の如き忠勇にして前途ある士を喪ふ痛恨盡きずと雖も開戰劈頭傲慢不遜の敵を膺懲し死所を得散り際鮮かなりし氏の芳名は萬古に流れて盡きざるべく其の赫々たる武勳は千載の下青史に輝き又不滅の英魂は護國の神となり後世永遠に萬民に仰がるゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　小杉俊雄

攻撃精神旺盛而かも武技優秀にして偉勲を奉す

氏は鳥取縣西伯郡縣村の人にして父を利太郎母をたみと云ひ大正三年六月二十日生れで未だ獨身であつた。資性温順寡默にして思想穩健殊に兩親に仕へて從順弟妹に對して慈愛深く又家業の農耕に頗る精勵であつた。昭和四年三月縣高等小學校を同六年三月大山高等公民學校を同九年三月京都市東山中學校を卒業した。元來運動家にして特に柔道及投擲は特有の技能であつた。而かも其の反面文才に長じてゐた。昭和十年一月徴兵として松江歩兵聯隊に入營特に劍術に長じ賞狀を附與せられ同年十二月歩兵一等兵に進級し翌十一年七月歸休除隊した。其の後青年團長として農村青年の指導に盡瘁し貢献せし所尠くなかつた。

支那事變起るや福榮部隊に應召第十一中隊に編入第一小隊第二分隊小銃兵として昭和十二年七月二十七日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後八月二十四日より九月六日に亘る津浦沿線の戰鬪間氏の所屬隊は子牙河々畔の敵を攻撃しつゝ前進し九月三日は困難なる地形に於ける大邀堡の攻撃に四日は頑強なりし東子牙鎮の突撃占領に、六日は劉莊に對する殲滅戰に何れも參加して勇戰奮鬪克く其の任務を完うした。更に九月十日中隊が小河の敵を攻撃する爲め午前四時行動を起す敵は我に數倍する兵力を擁し重輕機關銃迫撃砲等を配備し頑強に抵抗した。氏の小隊は中隊の左第一線となり堤防上の敵に對し攻撃中なりしが十一日午前四時三十分氏の所屬分隊を以て先づ前方一軒家の敵を撃滅せしめ主力を以て堤防上の敵に向ひ突撃を敢行せんとした。之が爲め氏の分隊は一軒家の敵陣地に肉薄し終に突撃するや氏は率先勇奮先頭に立ちて突入し此の敵を撃滅し分隊をして小隊の進出を容易ならしめた。又此の日小隊が彈藥殆んど盡くるに至るや氏は猛火の下之が補充に任じ小隊の戰鬪遂行を支障なからしめた。續いて九月十五日中隊が南趙扶に據れる敵の左側背に迫り敵の退路遮斷に任ずるや一野平坦敵火猛烈加之數回敵の反撃を受くるに至つた。此の間氏は猛火に屈せず克く分隊長指揮の下に勇戰奮鬪中隊をして退路遮斷の目的を達成せしめた。

十月十三日第三大隊が平原西方正莊の敵を攻撃するや中隊は午前八時行動を起し午後二時三十分大隊の左第一線となり攻撃を開始し敵は部落の土壁に據り我を猛射し死傷續出せるも之に屈せず小隊は一意勇猛果敢に前進を繼續して遂に敵前百五十米に達した。而して午後六時三十分日沒の頃猛烈なる敵火を冒して部落右陣地に向ひ突撃を敢行した。火線に在りし氏は率先々頭に立ち敵に肉薄し手榴彈を投擲し敵を震駭せしめ以て敵陣に突入せしが敵は我小隊の突撃に怯え小隊が陣地前方二、三十米に近迫せし時多數の死傷者を遺棄し狼狽して退却を開始した。氏

は尚も之を追撃せんとせし此の時左側部落内より猛烈なる小銃射撃を受け倒るゝに至つた。軈て繃帯所に收容手當を受けたるも出血多量の爲め其の甲斐なく十四日午前零時三十分分隊長に對しかすかに「よろしく」と一言を遺して竟に名譽の戰死を遂ぐるに至つた。

氏の戰陣に立つや劍道に於て又手榴彈の投擲に於て武技自ら恃む所あり每戰沈着にして勇敢以て兵の本分を完うして遺憾なかつた。殊に正莊の敵に肉薄するや得意の手榴彈戰を以て敵の心膽を寒からしめ次で亦銃劍を揮つて敵を追はんとす。何ぞ夫れ壯なる。氏の書信に曰く「砲戰が功を奏せねば肉彈戰で行くより他に行き方がない。今自分が出れば殺されることが明かであつても日本軍人は躊躇しない。ひたすら血のしぶきの中に突入又突入です」と皇軍たる衿持の下に一死を鴻毛の輕きに致し奮戰したのである。其の死期迫るや遺せる「よろしく」の一語は言簡單なるも氏の性格より察すれば爾後の戰勝獲得のため將た敬愛せる上官戰友に對する最後の挨拶の爲めであつたと信ぜられる。噫氏今や亡しと雖も其の光輝ある武勳は千載に輝き不滅の英魂は護國の神と仰がれ神靈尚も皇國の前途並に家郷の興隆に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　小根山孝助

瀕死の重傷に屈せず重圍を脱出し傳令勤務を全うす

氏は長野縣長野市大字古野の人にして亡父を林之助亡母をヨシと云ひ大正四年四月二十六日生れで未だ獨身であつた。資性温厚責任觀念頗る旺盛の人であつたが六歳にして父に又十七歳にして母に死別し風樹の悲しみ中に年を重ねて後昭和二年三月長野市三輪尋常小學校を卒業し昭和十一年一月徴兵として松本歩兵聯隊に入營した。

支那事變起るや遠山部隊第二中隊に屬し中隊指揮班の一員として昭和十二年九月三日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月十六日南泊附近の戰鬪に參加し次で九月十七日より大石橋涿縣附近の敵を攻撃するに當りては所屬中隊は尖兵中隊となりて前進し愈々敵に近接し當面の敵に對し攻撃を開始するや氏は彈丸雨飛の中を物ともせず勇敢機敏に戰場を馳驅して中隊長と第一線小隊長との間の連絡に任じ又夜間數回敵の逆襲を受くるや或は傳令として活躍し或は小銃兵として陣地確保に勇戰奮鬪し其の都度中隊は敵を撃退することを得た。次で九月二十一日より二十二日に亘る大冊河々畔黄村附近の戰鬪に際して氏の所屬加島大隊は二十一日正子を期し一擧に大冊河の强行渡河を敢行し夜襲を以て敵の堅壘を奪取すべく敵陣地に肉薄した。愈々第一線は敵陣地前四、五十米に達し一氣に突入せんとせしが敵の集中火激しく加ふるに鐵條網の

爲めに妨げられ一時攻撃頓挫の已むなき狀況に至つた。氏の所屬中隊は當初大隊豫備隊として第一線中隊に跟隨せしが第一線中隊の突撃頓挫するや右第一線に增加を命ぜられ續いて敵の主陣地奪取を命ぜられた。豪勇なる中隊長佐藤中尉は中隊を提げて敵に近迫し前への大喝一聲と共に軍刀を振翳して陣頭に立ち戰友の屍を乗り越え脱兎の如く敵主陣地に突入した。氏は中隊指揮班員なりしを以て中隊長と共に一歩も遲れじと敵陣に突入忽ち壯烈なる白兵戰を演じ遂に敵の主陣地を

占領した。時に午前二時三十分であつた。然るに敵は一度陣地を我が中隊に奪取せられたるも衆を恃みて再三再四逆襲し來り中隊は遂に敵の重圍に陷るに至つた。氏は中隊長の傍らにありて奮戰中なりしが此の時中隊長より此の狀況を大隊長に報告すべく傳令を命ぜられた。氏は此の際素より決死の覺悟欣然任に就き剛膽勇敢敵の間を縫ふて幸運にも圍を切り拔け大隊本部に向ひしが其の途中竟に敵彈の爲め無念右胸部に穿透性盲貫銃創を蒙り倒れた。然し責任觀念旺盛なる氏は傷の痛手を忍へ這ふて漸く大隊本部に辿り着き報告を終りて其の重任を完うするや終に氣力盡き意識を失ふに至つた。瀕死の狀態にある氏は即刻第四野戰病院に收容萬端の手當を加へられたるも其の甲斐なく十月六日名譽の戰死を遂ぐるに至つた。

氏選ばれて中隊指揮班の一員となるや毎戰彈雨の下戰場を馳驅して其の任務に邁進し殊に中隊重圍に陷り此の狀況傳達の成否は中隊の勝敗全員の生死に關はる所なりとして剛膽勇敢其の圍を破り重傷を負ふも屈せず一身に負ひたる此の重き使命を完うす。任務の存する所一身を君國に捧げ斃るゝも已まず眞に其の責任觀念の旺盛なる正に軍人の龜鑑と爲すべきである。噫聖戰中途にして氏の如き忠勇の士を喪ふ洵に痛恨盡きず。然れども其の赫々の武勳と芳名は千載に輝き不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の將來に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　小平福次

負傷するも難局に自已の重責を完うし元氏渚龍河の華と散る

氏は栃木縣下都賀郡南犬飼村の人にして亡父を小平弘母をステ亡養父を喜左衛門亡養母をカツと云ひ大正三年七月四日に生れ未だ獨身であつた。資性溫順にして而かも氣慨に富み責任觀念頗る强く進んで難局に當るの美風があつた。大正十五年三月南犬飼尋常小學校を卒業し爾後家に在りて家業に從事してゐた。昭和十年一月徵兵として宇都宮歩兵聯隊に入營し同年十二月一日一等兵に進級し翌十一年五月精勤章を附與せられ同年歸休除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊第一機關銃中隊に編入せられ第三小隊第五分隊彈藥手として勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月二十二日所屬中隊は第一線歩兵の前進に伴ひ猛火を冒して大冊河を强行渡河し同河右岸に進出するや氏は小隊長に續いて速かに前進し機を失せず彈藥を銃側に搬送して分隊の急襲的射擊に遺憾なからしめしが我射擊開始後機關銃小隊は敵の集中火を受くるに至り後方より追及中なりし我が彈藥手多數忽ち死傷し又附近地物なく立つ者必ず斃るゝが如き狀況となつた。從つて彈藥の搬送補充は頗る至難であつたが氏は之に屈せず敢然而かも屢々其の猛火の下を往復して微傷だも負はず銃側に彈藥を補充し分隊の射擊威力を遺憾なく發揮せしめ殊に我が第一線大隊右翼方面の前進を阻害しつゝありし敵の掩蓋重機關銃を制壓せしめ以て大隊の攻擊進捗を容易ならしめた。次で追擊に移り滹沱河の渡河に際しては氏は眞裸となり勇敢にも率先して河中に跳り込み馬と共に泳ぎて中隊の猛烈果敢なる追擊戰鬪を遺憾なからしめた。

十一月十一日元氏附近渚龍河の戰鬪開始せらるゝや氏の所屬小隊は第一線大隊の重點方面たる第三中隊に協力せしが氏は敵銃砲火の熾烈なる中を意とせず勇敢に往復して彈藥補充に任じ小隊の猛擊に伴ひ彈藥の射耗多きに拘はらず常に銃側の彈藥を充實して其射擊に支障なからしめ以て克く機關銃の威力を發揮せしめ以て第三中隊の攻擊前進を容易にし斯くて同中隊が逐次前進して敵に肉薄するや小隊亦之と共に敵に肉薄し敵の迫擊砲陣地前約三百米に迫り猛火を浴びせて之を潰走せしむるに至つた。之が爲さしも頑強なりし第三中隊正面の敵も亦竟に敗走するに至つた。小隊は此機を逸せず猛烈なる追擊を加へ第三中隊と共に大隊の全線より突進し敵の陣内深く堡家庄西北台地に進出し同村の敵に對し猛射を開始した。然るに左後方保定庄方面の敵は我左側に對し一齊に射擊を浴びせて來た。之が爲小隊は兩方面より敵火を受くるに至り而かも機關銃の陣地附近は台上なるも何等據るべき地物なく敵彈益々激しくして小隊は竟に苦戰に陷るに至つた。而かも苦鬪中頼みとする彈藥は既に射耗し此頃僅かに一箱を殘すのみとなつた。而して彈藥小隊は遙か二千米の後方に位置し之との連絡は敵彈烈しく難事中の難事であつた。此の時責任觀念旺盛なる氏は昨夜來の戰鬪に於て右足に負傷し輕傷なりとは言へ活潑なる行動は意の如くならざりしにも拘はらず自ら進んで彈藥補充に當らんことを申出で分隊長も已むなく之を容れ他の一名と共に之に任ずべき事を命じた。氏は戰友と共に勇躍任に就き途中屢々死生の間を突破し一時間も經ざるに填實せる彈藥箱を背負ひ來り陣地の後方五十米附近にまで來りし時無念敵彈頭部を貫通し綿畑の中に斃れ竟に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。然し氏の熱烈決死の行動により小隊は爾後射擊を繼續することを得途に一層深く敵陣地に進出し以て大隊戰勝の端緒を開くに至つた。

氏の戰陣に立つや彈雨の下毎戰積極果敢而かも傷つくも進んで死生の地に勇躍し銃側の彈藥を絶たざらんことに全魂全力を傾倒して已まなかつた。かくの如きは是れ皆氏が盡忠至誠の發露にして眞に軍人の鑑とすべきである。征戰中途氏の如き忠勇の士を喪ひしは痛恨盡きざるも其拔群の武功と旺盛なる責任觀念の示範とは千載の下皇軍戰史に輝きて鑑となり其英魂は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尚も皇國を守護し又遺族の將來に佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵上等兵勳八等功七級　小關新平

優秀なる高射砲手、守地を離れず勇戰爆死す

氏は靜岡縣志太郡青島町の人にして父を新吉母をかねと云ひ大正三年三月十五日の生れで未だ獨身であつた。資性溫順眞面目にして反面氣慨に富み且つ積極進取の氣象あり前途有望の青年であつた。昭和三年三月鄕里の高等小學校を卒業後家に在りて父母を扶け家業に從事して居た。昭和十年一月徴兵として濱松高射砲聯隊に入營同年七月選ばれて千葉野戰砲兵學校教導聯隊高射砲隊に分遣せられ翌十一年九月原隊に歸還し十一月除隊となつたが在隊間勤務教練の成績良好にして除隊の際は善行證書を授與された。

支那事變起るや昭和十二年七月濱松高射砲聯隊へ應召して五弓部隊に編入せられ勇躍北支に向ひ征途に就いた。北支上陸後所屬隊は各重要地域の上空庇掩の重任を完うし以て軍の爲貢献する所大なりしが此の間氏は熱心而かも其の優秀正確なる操作技能を以て常に分隊の中堅となり分隊長の指揮を容易ならしめつゝあつたが九月二十五日には高射砲隊の先頭として保定に入城し同地農學校内に陣地を占領し以て停車場附近の上空掩護に服務して居た。九月三十日は朝來密雲天を覆ひ展望の自由を缺いて居た。高射砲隊員は異常の緊張を以て視界の許す限り監視の目を見張つて居た。午前六時三十分稍

前上空に爆音の近接し來るを知り高射砲隊は直に射撃準備を整へ砲員さへも對空監視者に協力して機影の捜索に努めたが皆目機影を確認する事が出來なかつた。あゝ高射砲隊の苦慮や如何許りなりしか蓋し想像に難くない。午前六時三十分敵の偵察機一機突如密雲を衝いて低空に現はれ忽ち停車場附近の兵站諸施設を爆撃し更に高射砲隊の上空に襲來した。隊員は此咽嗟の間に射撃諸元を決定し應戦せねばならなかつた。神速機敏と云つても之れ程火急を要する事はあるまい。氏は第四分隊三番砲手として沈着機敏に正確なる操作に依り最も迅速なる發射速度を發揚した。此時敵機の投下したる一爆弾は氏の身邊に落下し來るを認めしも氏は敢然として守地を離れず勇敢に射撃操作を續けた。其瞬間に敵の爆弾は氏の身邊約五米に落下炸裂し氏は悼ましくも胸部大腿部及臀部に爆創を受け悲壯なる戦死を遂げた。併し敵機は氏等の勇戦に抗しかね西方遠く密雲中に逸走した。

氏や郷に在りては温良眞摯の青年として信頼を受け隊に在りては技量優秀にして自づから分隊の中堅を以て目せられ一たび聖戦に參加するや泥濘の難路給養の不十分等幾辛酸を克服して其砲隊の躍進に絶大なる努力を拂ひ。要地上空の庇掩に任ずるや晝夜兼行緊張裡に火砲を愛護し唯々己が職分に全能力を傾倒し戦備に遺憾なからしめた。偶々氏が最後の一戦に於ては極めて不利なる態勢下に敵機と戦闘を交へつゝ火砲と生死榮辱を共にせんとして死力を竭し竟に其職に殉した。寔に是れ皇軍砲兵の眞髓を發揚せるものにして又一般軍人の龜鑑とすべきである。聖戦の初期斯かる忠誠勇武の士を喪へるは眞に痛恨に堪へないが氏の功績たるや天晴れ皇軍對空戦史上に牢記せらるべく其芳名は千載に謳はれ其不滅の英魂は護國の神と仰がれ其靈徳や尚も皇國の前途に又一家の將來に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戦死の日砲兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　新井政男

勇敢機敏なる擲弾筒手陽高城城壁上に奮戦して玉碎す

氏は埼玉縣川口市十二月田町の人にして父を八郎母を德と云ひ大正五年九月二十日に生れ未だ獨身であつた。資性温厚而かも氣慨に富み諸事積極的にして責任觀念の強い人であつた。昭和四年三月郷里の尋常小學校卒業後は家庭に在りて父母を扶け家業に從事してゐた。昭和十二年一月徴兵として麻布歩兵聯隊に入營同月滿洲に派遣齊々哈爾に駐屯し初年兵として其の教育を受けつゝ同地附近の警備に任じてゐた。入營以來は軍務に精勵學術科の成績良好にして七月には一等兵に進級した。

支那事變起るや間もなく小林部隊第五中隊に屬し第一小隊第一分隊擲弾筒手として北支戦線へ出動した。斯くて八月上旬は天津武清開平附近の掃蕩に從事し次で獨流鎮附近の戦闘に際しては第一線となり戦闘に參加し八月中旬内蒙古張北に轉進同地附近の警備に就いた。而して八月二十日所屬中隊が外長城線敵主陣地及び其南方制高地點の各トーチカに對し攻撃するや的確なる射撃により擲弾筒の威力を遺憾なく發揮して逐次此等堅壘の奪取に協力し翌二十二日には長城線に沿ふて追撃に移つた。而して翌二十三日中隊は土井子東方高地上に於て優勢なる敵の包圍攻撃を受けたるも奮戦之を撃退し二

十四日は「ナマコ」山の敵陣地を攻撃占領し其後大隊の右側衛となつて前進し南天門北方高地を占領するや又々優勢なる敵の包圍攻撃を受けた。然かし中隊の將兵一同勇戰力闘敵の左翼を突破し次で二十五日は夜間機動を行ひ二十六日は西店子附近の敵を攻撃して之を占領し二十七日遂に目指す張家口を占領した。此間氏は毎戰彈雨の下勇敢に奮戰し克く其任務を完うし中隊數次の戰勝に大なる貢献を爲した。

九月五日中隊は鐵道輸送に依りて永嘉堡に進出し六日天鎭附近の戰闘には部隊豫備隊となりしが翌七日は尖兵中隊となつて陽高に向つて前進した。而して九月八日愈々陽高城の攻撃開始せらるゝや中隊は大隊の左第一線として午前十時より攻撃前進を開始し敵彈雨飛の下逐次躍進又躍進を續けて城壁近く肉薄した。此間氏は彈雨の下物ともせず沈着剛膽適時的確に有利の目標を捕捉し正確なる操作により常に有効なる射彈を送りて敵を制壓し小隊逐次の前進を容易ならしめ、かくして城壁下に達するや城壁頗る高く、しかも堅固なりし爲野砲の主力を以てする城壁破壞の射撃實施間待機して今や遅しと突撃路の開設を待つた。恰も午後六時遂に砲彈により城壁に一條の突撃路開設せらるゝや中隊長を先頭に猛烈突撃を開始し梯子を利用して城壁上に突入せしが氏は分隊長と共に勇敢に城壁に攀登して頂上に進出し頑強に抵抗せる敵中に突入し遂に城壁上の一角を占領した。爾後掃蕩班に尾して南方に前進せしが午後八時頃及同十時頃の二回に亘る敵の逆襲を受けた。然かし中隊長以下共の都度勇敢に奮戰して敵を撃退し其後工事の增强に努め同地を確保し居りしが午後十二時頃又

々迫撃砲機關銃の猛射と共に正面及城壁内側の兩方面より優勢なる敵は喊聲を揚げつゝ逆襲し來り右第一線方面危急を告ぐる情況となつた。之を知つた氏の所屬小隊は直に救援に赴きしが敵彈の爲死傷續出し凄慘なる狀況となつた。然かし氏は毅然として衆を勵まし沈着、而かも迅速に擲彈筒の猛射を浴びせて敵に多大の損害を與へ當面の敵の逆襲を挫折せしめしが次で亦左第一線方面死傷續出するに至り氏の分隊は急遽此方面に進出せしも友軍に危險を與ふる關係上擲彈筒射撃の不可能なるを知つた氏は直ちに小銃を以て敵に猛射を加へ率先奮戰中無念敵の手榴彈破片の爲右大腿部に重傷を受けた。されど氣丈の氏は一歩も退かず尙ほ奮戰を續けて居たが如何せん出血甚しく力盡き竟に壯烈の戰死を遂ぐるに至つた。併し所屬中隊は氏等の奮戰と尊き犧牲とに依り前後三回に亘る敵の逆襲を撃退し東部城壁を占領確保することを得た。

氏の戰陣に立つや選ばれて擲彈筒投手となり彈雨の下毎戰勇敢に的確なる射撃を爲し該兵器の威力を發揮し或は堅陣を屠り或は大敵を粉碎し小隊戰勝の素因を作つて遺憾なかつた。殊に陽高城壁上の戰闘に際しては積極果敢沈着剛膽而かも傷つくも屈せず尙ほ戰はんとせる如き眞に鬼神をも哭かしむるものがあつた。實にかくの如きは一死を鴻毛の輕きに致し全力を傾倒して君國に報ぜんとする至誠盡忠の發露と謂ふべきである。然るに征戰中途にして竟に陽高城の華と散りしは惜みても尙餘りある次第であるが氏が勇戰奮闘玉碎して以て暴慢不遜の敵を完膚なきまでに懲したる拔群の武功は万世不朽皇軍戰史に輝き芳名は千古に傳へられ其英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も興亞の聖業並に一家の將來に加護を垂れて已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　穐原悦二

一旦占領せる地は尺土も退かず小隊攻撃の支撐となる

氏は兵庫縣加古郡二見町の人にして亡父を勇吉母をはると云ひ明治四十二年十月二十日生れで妻末子との間に政義靜夫悅子の三子がある。資性溫厚篤實にして義務心厚く志操堅確進んで難局に當るの氣慨があつた。大正十一年三月二見尋常高等小學校を卒業し同十五年青年訓練所に入り昭和四年十二月其の課程を修了した昭和五年一月徴兵として姫路歩兵聯隊に入營同年十二月一等兵に進級し翌六年十一月滿期除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月四日應召し沼田部隊淺野隊に編入第一小隊第五分隊輕機關銃彈藥手として勇躍征途に就いた。北支戰線到着後八月二十五日より九月十四日に亘りては馬廠附近の戰鬪に九月十五日より二十六日に亘りては滄州附近馬落坡及張新庄の戰鬪に九月二十七日より十月五日に亘りては德州に向ふ追擊間周八里庄趙官屯及王院の戰鬪に參加し此の間惡路を冒し飢渴を凌ぎ或は彈雨の下豫備隊として警戒搜索勤務に服して活躍し或は前後數回第一線となり勇戰奮鬪敵を擊破擊退し或は敗敵に殲滅的大打擊を與ふる等分隊長を中心とし一致協力克く其の任務を完うした。

十一月八日中隊は邱莊の敵陣地攻擊の爲め大隊の右迂回隊として午前四時五十分邱莊西方約一里鳳凰店を出發し漸次南方を迂回して午前八時邱莊南方盧莊北端に達し直ちに北面して展開し敵の虚に乘じ不意に攻擊を開始した。氏の所屬小隊は中隊の右第一線となり殊に大きく敵を包圍する如く右翼を張りて攻擊前進した。氏の分隊は此の小隊の最右翼分隊であつた。敵は村端に池沼を控へ樹木を倒して障碍となし土壁に銃眼を作り樹枝や草を以て僞裝し爲めに我が目視甚だ困難なるに敵彈のみは猛烈を極はめ之に反し我が攻擊地區は平坦開豁冬季一草の利用すべき地物もなく全く暴露して攻擊するの態にして正面よりする攻擊は蓋し容易ではなかつた。氏の分隊はかゝる地形に我が最右翼にありて躍進又躍進一意前進に努め午前九時には一擧に邱莊の敵陣地前百米の地點に在る墓地に進出し小隊攻擊の支撐となりて孤軍奮鬪を續けた。然るに不幸氏の輕機關銃は故障を生じ分隊長亦敵彈に斃るゝに至り苦戰に陷らんとせしが殘員協力其の地に踏止まり機關銃の故障を排除して戰鬪を繼續し以て小隊の攻擊を容易ならしめつゝあつた。聽て大隊主力到着して此の方面より攻擊前進するに至るや中隊主力は更に大隊の右翼側より敵を攻擊することゝなり氏の所屬小隊も先づ邱莊東方の王美合部落の敵を攻擊すべく午前十時過ぎ敵前近く東方に轉進することゝなつた。分隊亦此の命令に基き移動を開始するや射手たりし山本上等兵敵彈に斃れ大浦一等兵之に代るや數歩前進して亦戰死するに至つた。氏は分隊のかくの如き悲慘の狀況にも拘はらず聊かも屈することなく直ちに代りて輕機關銃を執り一意王美合村落に向ひ前進中無念敵の一彈は氏の頭部を貫通し竟に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。此の激戰に於て氏の分隊は殘員僅かに四名となつたが午前十時三十分頃遂に王美合部落を

占領し敵の側背を脅威し多大の損害を與ふることを得た。

氏の戰場に臨むや射手と一體不可分の關係にある彈藥手として毎戰奮鬪分隊長を中心として皇軍輕機關銃の精鋭を發揮し敵を震駭せしめて遺憾なかつた。殊に邱莊を攻むるや孤軍挺身小隊の支撐となり而かも苦戰に陷るも一旦占領せる地は尺土と雖も退かず又轉進に際し分隊長以下相次ぎ斃れ悲慘の狀態を呈するも剛氣勇敢毫も屈せず身を忘れ家を忘れ一意敵

の退路に向ひ勇進す。かくの如きは是れ一死奉公の發露皇軍の精華と謂ふべきである。其の赫々の武勳と共の芳名は萬古に輝き不滅の英魂は護國の神となり尙出でゝは聖戰の目的貫徹を守護し入りては愛兒の遺志繼承を加護照覽して已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級　雨貝米三郎

沈着豪膽、河川偵察の重任を完うして斃る

氏は茨城縣新治郡土浦町の人にして父を留造母をとくと云ひ明治四十五年二月五日に生れ妻雪枝との間には未だ子がなかつた。性活潑にして品行方正近隣の風評も良好であつた。父は故ありて當家を離別せる後は獨身の母を扶けて忠實に家業の農事に精勵し克く孝養を盡して居た。大正十五年三月鄕里の高等小學校を卒業し昭和七年一月水戸歩兵聯隊へ入營同年六月滿洲派遣部隊に屬して渡滿し爾來一年七ヶ月の間滿洲事變に活躍し功を以て勳八等に叙し白色桐葉章を賜はり除隊後は再び母と共に農業に從事して居たが昭和十二年一月以來は東京市足立區南千住町三野輪新鐵會社の職工として入社し勤務精勵工場長の信賴厚く模範職工として表彰さるゝに至つた。

支那事變勃發するや昭和十二年八月石黑部隊に召集せられ同年十月六日征途に就き十一月上旬北支戰場の所屬部隊に到着し伊藤大尉の指揮する第九中隊第二小隊に編入された。所屬部隊は十二月十二日大名附近の激戰に勝利を得敗走せる敵を速かに障河の線に捕捉殲滅せんとして翌十三日より猛追擊に移つた。然るに敵は障河右岸に堅固なる既設陣地を構へ我が軍の追擊を拒止せる爲め十四日午前九時四十分より當面の敵を攻擊する事となつた。氏の所屬中隊は此の日第一線中隊を命ぜられ所屬第二小隊は范家堤對岸の敵を攻擊した。氏は輕機關銃分隊彈藥手として之に參加し猛烈なる敵彈下に勇敢機敏に活躍し以て輕機關銃の威力を遺憾なく發揚せしめ午前十一時所屬小隊の第一次任務を完遂するを得た。此の時所屬小隊は衞河々畔龍王廟附近の敵情を捜索すべき新任務を受領し此の戰場より離脫して衞河方向へ轉進した。氏の分隊は尖兵となり前進し午後一時衞河々畔に近づきし頃氏は斥候要員として河川細部の偵察を命ぜられしが勇敢にも率先堤防上に進出し周到機敏に先づ有力なる報告を提出し續いて諸偵察を行ひ詳細第二次の報告をなさんとて該地より後退せんとする一刹那突如龍王廟西端の屋上に現出せる敵兵より急襲射擊を浴びせられ頸部に貫通銃創を受け打ち倒れた。然れども氏の貴重なる諸報告は所屬小隊長の爾後の決心處置に貢献せる所頗る大であつた。氏は其の後所屬分隊長の手厚き介抱を受け更に野戰病院に收容され加療を受けたが十二月十七日從容眠るが如く北支戰線の華と散つた。

氏は曩に滿洲事變に參加して赫々たる武勳を奏し幾多の貴重なる體驗を以て今次事變に臨み所屬分隊の重鎭として常に難局に當り克く分隊長を扶け垂範示敎分隊員の志氣を鼓舞し上下の信賴厚かつたが參戰幾何もなくして早くも此の勇士を喪ひしは眞に愛惜に堪へない。然れども氏の臨終たるや一言私事に及ばず從容何等の苦痛を訴へず尊き使命を果たして聖戰の人柱となつた。蓋し人世を靜觀し透徹せる士にして能くし得たるものと思料される又累次の遺勳は皇軍戰史に不朽の

芳名を飾り不滅の英靈は護國の神と仰がれ尚も皇國の前途に將た遺族の將來に尊き佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　朝倉利定

大冊河黄村の血戰に敵の大逆襲を撃退して要點を確保す

氏は長野縣東筑摩郡入山邊村の人にして大正五年八月七日生れである。父を茂夫母をしさ江と云ひ氏は未だ獨身であつた。性快活にして進取の氣性に富み中學時代はランニングの選手として各地の競技に驍名を馳せた。昭和四年三月入山邊小學校尋常科卒業昭和十一年三月松本第二中學校を卒業後東京市本所區柳原町三鱗石炭株式會社々員となり入營時に及んだ。昭和十二年一月現役兵として松本歩兵聯隊へ入營し同年七月一等兵に進級した。

支那事變勃發するや遠山部隊坂田中隊へ編入せられ勇躍北支戰線へ出動した。昭和十二年九月十六日南泊附近の戰闘に於て中隊の左第一線たる第三小隊第二分隊長の指揮下に勇戰奮闘し同月十七、十八日大石橋附近の戰闘に於ては十七日日沒より左側警戒部隊に屬し數次執拗なる敵の逆襲に對し率先勇猛果敢に善戰し敵に多大なる打撃を與へて之を撃退し陣地を確保した。

九月二十一日來の大冊河々畔黄村附近の戰闘に於て所屬中隊は所屬部隊の攻撃に先ち南莊方面より南上坎附近の敵情を捜索すべき特別任務を受け午前六時勇躍行動を起し敵陣地に近迫した。勿論戰闘を豫期し威力偵察を行はねばならなかつた。敵は事變當初より大軍を集中し陣地構築の爲め數ヶ月の日子を費し加ふるに河幅百米に及ぶ大冊河の大障碍を陣地前に控へ陣地を高さ三米の崖壁上に構築し天險に加ふるに人工を以てする堅陣に對する威力偵察を行はんとするのである。何人が生還を期し得たであらうか。されば中隊長以下決死悲壯の覺悟を以て死地に赴いた。氏は第一線小隊第三分隊長田中上等兵の指揮下に午後十一時四十分中隊主力の先頭に在つて大冊河の渡河を敢行した。折柄中秋の月冴へ渡り所詮隱密行動を許さねど氏は莞爾として全身一死報國の念に燃えつゝ勇躍對岸に取りついた。果然敵は熾烈なる猛火を射注ぎ來り眞に急驟驟雨の殺到するにも似て面を向けん方もなき有樣であつた。見渡せば敵前の地形は平坦開闊にして利用すべき地物の何物もなく忽ち右に左に死傷續出した。此の時氏は敢然崖壁を攀登し敵陣地に突入し逐次の抵抗を撃破し敵の逆襲部隊を撃退して主力部隊の爲め攻撃據點を推進中であつたが二十二日午前五時頃敵は大擧逆襲に轉じ來り側方に肉薄中の敵數名を刺殺せんとして隣兵と共に猛然出撃し之を刺突の際腹部に銃創を受け續いて反對側より飛來せる敵彈の爲め背部に貫通銃創を受け其の場に壯烈なる戰死を遂げた。

所屬中隊長よりの來信の一節に依れば氏は平素より粉骨碎身常に己を空うして軍務に精勵するの氣慨を有し成績亦極めて優秀であつた。渡支以來幾何もなく此の精悍熱血の勇士を喪へるは中隊長として斷腸の思ひあるのみならず中隊の將兵一同齊しく悲嘆の涙に暮れありと蓋し何等の修飾を加へざる述懐であつたに違いない。實に氏の勇敢無比の行動に依り所屬中隊は午前零時三十分敵陣地の一角を占領して陣地を確保し爾後南上坎方向に進出するを得たのであつた。

噫氏や難局に處し終始一貫決死的の活動を續け以て中隊の推進又其の陣地確保に絶大なる貢献を捧げた。眞に是れ皇軍歩兵の本領を發揮し又一般軍人の龜鑑であつた。其の偉大なる功績は皇軍戰史に燦然と輝き其の芳名や千古大和櫻と謳はれ其の英靈は萬世に生き皇國並に一家の守護神として其の繁榮に絶間なき加護を與へるであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　秋山藤吉

模範孝子、津浦線清涼店の戰鬪に膽勇克く衆敵を殪し戰捷の途を拓く

氏は兵庫縣養父郡西谷村の人にして父を富重郎母をきよと稱し明治四十年三月三十一日生れで妻その江との間に富夫多津子の二愛兒を擧げた。性溫良の裡に嚴正の風格を有し孝心極めて深かつた。曾て老母の手を取りて伊勢神宮に參詣し道中も至れり盡せりの孝養を致したが村人皆良き子を持たれたと激賞した。氏は幼時より勤儉產を治むるに意を用ゐ冗費を省ぶき山林田畑等不動產の增殖に貢献せる所多かつた。尙村內消防組の小頭をも勤め熱誠村內の爲盡力し其筋より表彰された程であつた。大正二年三月鄕里の尋常小學校を卒業し昭和三年一月現役兵として歩兵第四十聯隊へ入營し喇叭手を命ぜられ次で一等兵に進級し昭和四年七月歸休除隊となり歸鄕後は再び農業に從事し傍ら製炭業を營んで居た。

支那事變勃發するや昭和十二年八月應召長野部隊に屬し勇躍征途に就いた。其後戰地より妻宛の手紙には「自分は鄕里の事を心配せずに皇國の爲に奮鬪する覺悟であるから喜びの日を待つて居てくれ。兩親を大切に又子供の養育はしつかり賴むぞ」と通信して居る。親や子供を持つ出征者としては當然の考へ方ではあるが併し氏の日頃からの信念と行動から見て其心境の奥行には自づから確乎不拔の決意が窺はれると思ふ。

氏は補充兵として十月中旬北支戰線へ到着爾來幾多の困苦缺乏に堪へ十一月八日より清涼店附近の戰鬪に參加するに至つた。卽ち氏は第三中隊長代理足立少尉の指揮下に第三小隊擲彈筒分隊の小銃手として清涼店附近まで進出した。十三日拂曉來濛霧甚しく前方十米の通視も不能の狀態であつたが敵は我を車輛部隊とのみ輕視し濃霧を利用し其優勢なる兵數を恃みて襲擊して來た。我が軍は將に累卵の危機目睫の間にさし迫つた。午前六時五十分所屬中隊は斷乎應戰に決し氏は分隊長の命に依り附近の土壁を利用し沈着勇敢にも十分に敵を引つけ俄然猛烈正確なる射擊を開始し多數の敵を射斃した。此有樣に敵は混亂敗退して清涼店の部落に遁入した。所屬隊は敵に尾し一擧清涼店の敵を掃蕩せんと欲し將に出擊せんとする折柄敵彈飛來惜しくも頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。

氏は參戰幾何日を經ずして竟に尊き人柱となつた。されど本戰鬪に於て氏が豪膽沈着なる奮戰は附近の戰友に無言の垂範となり諸戰に於て徹底的に敵に大打擊を與へ友軍の志氣を鼓舞し爾後中隊は當日午前九時三十分清涼店の敵を擊破して同部落東端の陣地を完全に占領するを得たが氏の奮鬪は正に中隊戰勝に大なる素因を與へたものである。勇士一度戰場に立つや素より生死を超越す。豫期すべからざる戰況に一切の邪念を去り唯一筋に本分に邁進せる氏の最期は亦軍人の龜鑑たりと謂ふべきである。氏が生前念願せる孝道は父祖の名を顯はし祖先以來蒙れる皇恩に報ゐ奉りて大孝を申べ氏が翹望せる子女の教育は氏の不朽の功績に依り最も淸く尊き活訓を授け一家の守護神としても其多幸繁榮を加護するであらう。

[illegible]死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　綾部彌七

精勵恪勤の士、奮戰竟に大冊河畔に散る

氏は栃木縣安蘇郡佐野町の人にして父を重三郎母をカクと云ひ大正五年一月二十八日に生れ未だ獨身であつた。資性溫良頗る眞面目にして向學心に富み模範青年として鄕黨の敬愛を受けてゐた。昭和五年三月佐野第一小學校高等科を卒業し其後自宅に於て織物整理業に從事し傍ら佐野町青年學校に通ひ同十一年三月卒業在校四ケ年間精勵努力の故を以て精勤章を附與せられ卒業後も引續き該校に出席し青年學校特務班長を命ぜられた。尙此間昭和八年には佐野商業補習學校に入り同十一年十二月卒業し同校に於ても精勤章を附與せられた。此の如くなりしを以て縣、郡等の聯合演習には常に代表に選ばれ教練査閲には年々賞詞を受けてゐた。昭和十二年一月徴兵として宇都宮歩兵聯隊に入營爾來軍務に精勵學術の成績優秀にして六月選ばれて歩兵學校教導聯隊に分遣せられ七月には一等兵に進級し精勤章を附與せられた。

支那事變起るや原隊に復歸し坂西部隊第二中隊に編入せられ第三小隊第一分隊小銃兵として昭和十二年八月十四日勇躍北支方面への征途に就いた。北支戰線到着後九月十八日北義安の攻擊に際しては克く奮戰功を樹て敵擊退後續いて追擊に移り二十一日小隊は尖兵となり前進し下柴口南側高地に達するや突如敵の猛射を受け直に攻擊を開始した。此の時氏は終始勇猛果敢に攻擊前進し逐次敵に近迫して愈々突擊命令下るや小隊長分隊長と共に急峻なる高地を駈け登りて敵陣に突入し遂に敵を擊退し之を急追せるに大冊河左岸舫上部落に於て再び敵の抵抗を受けた。氏は追擊の餘勢を以て僅々百米にまで進出し正確なる射擊を以て敵を制壓し敵兵動搖の色あるや小隊は敢然突入午後六時同部落を占領確保した。此頃連日の

急迫と惡路と食糧缺乏の爲疲勞困憊極度に達せるも一同目指す保定攻略の爲衆心一致志氣天を衝くばかりであつた。而して對岸の敵は永年に亘り强固なる數線陣地を構築し鐵條網戰車壕を繞らし掩蓋機關銃座を設備し加ふるに大冊河は腰を沒する濁流にして敵は此天險を利用して我進擊を阻止せんとしてゐた。此夜十時氏は大冊河の水深偵察斥候を決死の覺悟を以て志願し剛膽勇敢對岸に渡り幸に微傷だも負はず重き使命を果して歸還し中隊長より激賞せられた。愈々二十二日午前二時恰も十七日の月明を背に浴びつゝ中隊は大隊の右第一線となり王谷莊堡北側陣地に向ひ行動を起し大冊河の渡渉を開始するや果然敵陣より猛烈なる正面射斜射を受け忽ちにして多數の死傷者を生ずるに至つた。然かし氏は之に屈せず勇敢に濁流を渡り次で對岸の帽十米深さ八十糎の通過容易ならざる水田を跋渉し丘に上れば敵陣地まで僅かに二十五米此間に鐵條網と幅三米深二米五十の戰車壕あり正面には掩蓋機關銃其兩側方にはチェッコ機關銃を配備し一層猛烈に射擊を浴びせ來つた。然し氏は之にも屈せず小隊長分隊長を助けつゝ彈雨を冒して鐵條網の破壞口を通過し戰車壕を越え一擧に敵陣地に躍り込み抵抗する敵を刺殺し遂に掩蓋機關銃座を奪取せしが敵は尙も重火器支援の下に再三再四逆襲し來り彼我の戰鬪は頗る激烈を極むるに至つた。此際小隊は僅かに敵と數十米を隔てゝ相對峙しつゝ拂曉に及び幹部以下多數の死傷者を續出したるも氏は此悲慘の狀況にも更に屈せず既に占領せる陣地の一角は尺寸の地をも敵に委ねず頑强に死守し居りしが午前七時敵彈其大腿部を貫通し出血多量苦しき息の下に「家の者によろしく」の一語を遺しかすかに「天皇陛下萬歲」

を口にしつゝ竟に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。而して中隊は戰死二十九名戰傷中隊長以下六十五名の多數を出し惡戰苦鬪を續けたるも氏等の勇戰奮鬪により遂に午前十一時頃完全に此要點を占領することを得た。氏が戰死後其遺品を調べたるに財布中に爪と髮とを封入してゐた。

氏や鄕にあるも軍に從ふも終始一貫稀に見る精勤の人であつた。而して一朝戰陣に臨むや死後の遺品を密かに用意し勇敢剛膽或は決死斥候となり或は率先突入となり或は死守尺寸の地をも敵に委せず奮戰以て兵の本分を完うし遺憾なかつたかくの如きは是れ身命を君國に捧げ一死を鴻毛の輕きに致し斃れて後已む盡忠至誠の發露にして實に良兵良民の範と謂ふべきである。征戰中途氏の如き忠勇の士を喪ひしは洵に痛恨盡きざるも其拔群の武功は千載の下皇軍戰史に輝き其赫々の芳名は千古に謳はれ英靈は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙も皇猷を扶翼し奉り又一家の守護神として遺族殊に兩親の前途を加護するであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　新井友吉

喇叭手兼中隊指揮班員として活躍傷つくも奮戰格鬪す「大册河」

氏は栃木縣安蘇郡葛生町の人にして父を理一郎母をモンと云ひ大正三年二月二十五日に生れ未だ獨身であつた。資性極めて眞面目にして不屈不撓積極進取の人であつた。昭和三年三月葛生尋常高等小學校を卒業し其の後葛生石灰工業會社の職工となり兄と共に一家の生計を幫助し又職務に精勵模範職工として表彰せられた。此間勞務の傍ら靑年訓練充當葛生農業補習學校に入り入營前同校の課程を修了し昭和十年一月徵兵として宇都宮步兵聯隊に入營爾來軍務に精勵喇叭手となり同年十二月一等兵に進級し同十一年七月歸休除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊第三中隊に編入喇叭手として又中隊指揮班員として同月二十六日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月十三、十四日は楡垈鎭南方永定河々畔の戰鬪に十五、十六日は拒馬河々畔の戰鬪に參加し次で九月十八日南北蘆安の攻擊及渡河戰鬪に當りては猛烈なる敵彈を冒して中小隊長間の連絡に努め克く中隊長の命令意圖を各小隊に傳達し以て中隊の戰鬪を容易且有利ならしめた。

續いて京漢線西側地區に於て敵を追擊し九月二十一日夕刻大册河の前面に達した。敵は大册河の天然大障碍を利用し河中に水雷を敷設し對岸には鐵條網は勿論地雷を埋沒し其の後方に水濠を廻らし數線に設けたる散兵壕には交通壕を以て巧みに連絡する等頗る堅固なる陣地を構築し我が前進を拒止せんと待ち構へてゐた。坂西部隊は此の堅固なる陣地に對し晝間の攻擊は徒らに損害大なるに省み夜襲を決行するに決した。氏の所屬大隊は夜襲部隊を命ぜらるゝや將兵一同直ちに其の準備を整へ二十二日午前零時舫上部落を出發し水深胸にも及ぶ大册河を渡涉して敵に近迫した。中隊は大隊の左第一線として戰鬪を開始し小銃機關銃は固より迫擊砲彈頻りに飛來する中を物ともせず前進し敵前至近の距離に近迫するや突如腰を浚する水田に逢着し中隊は一時此處に停止するの止むなきに至つた。氏は此の間勇敢にも彈雨を冒し萬難を排して中小隊長間の連絡に任じ中隊長の命令意圖を傳達し或は第一線小隊の狀態を中隊長に報告する等絕えず活躍しつゝありしが軈て戰機漸く熟し中隊長は突擊を命ずるや氏は直ちに

小隊長の許に至りて之を傳達し玆に中隊一擧突擊前進に移るや氏は突擊喇叭を吹奏して志氣を振作鼓舞しつゝ小隊長と共に鐵條網を越えて敵陣に躍り込み敵を刺殺しつゝ猛進した。此の時氏は敵彈の爲め右腕に負傷したるも更に屈せず尙も前進敵と格闘を續けたが又もや一彈頭部を貫通し竟に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。本戰闘に於て氏の中隊は中隊長以下多數の死傷者を生じた。然かし中隊長以下氏等の勇戰奮闘と水沼少尉以下氏等幾多の尊き犧牲により二十二日正午さしも頑强なりし敵陣地を奪取することを得た。因に氏の兄も亦今次事變に出征中である。

氏の戰陣に臨むや彈雨の下死生を顧みず積極活躍不屈不撓絶えず重要使命を帶びて戰線を馳驅し或は喇叭手として中隊の志氣を鼓舞し中隊長の戰闘指揮を容易ならしめ其の戰力を發揮せしめて遺憾なかつた。殊に傷つくも尙奮戰格闘す。之れ實に氏が幼より培はれたる勤勞と責任觀念の然からしめし所とは言へ然しながら職分の存する所身命を捧げ斃れて後已まんとする盡忠至誠の發露にして氏の如きは眞に良兵良民の範と謂ふべきである。氏惜しくも北支の華と散りしも其の拔群の武功は千載の下皇軍戰史に輝き其の芳名は千古に謳はれ其の英靈は護國の神として不滅に生き神靈尙も皇國を護り其の一族に加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍工兵上等兵勳八等功七級　淺尾實雄

忻口鎭攻擊に敵の側防機關を爆破し戰勝の端を拓く

氏は岡山縣小田郡金浦町の人にして父を嘉平治母を庄と云ひ大正五年三月三十一日生れで未だ獨身であつた。資性溫順

責任觀念旺盛にして而かも剛毅果斷の風があつた。昭和三年三月金浦小學校を卒業し續いて笠岡商業學校に入り同八年三月卒業爾後家庭に在つて父母を助け專心家業に從事し昭和十二年徴兵として支那駐屯軍工兵隊に入營した。

支那事變勃發するや氏の所屬隊は天津特別第三區に飛行場の構築を命ぜられた。當時連日の豪雨は至る所出水泥海と化し其の間に飛行場を構築せんとする工兵隊の勞苦は容易ならざるものであつたが氏は何物をも顧みずあらゆる辛酸を克服して日夜精勵飛行場建設に大なる貢獻を爲した。而して九月に入り飛行場作業を終るや架橋材料等の輸送に任じ次いで所屬隊は九月二十八日人和鎭に至り葉家莊に約百米の縱隊橋を架設し我軍の南趨扶鎭方面への進出を容易にした。然るに其の後河水著しく增水し渡橋困難となりし爲め人和鎭—姚馬間漕ぎ渡しを以て人馬車輛を輸送し氏は日夜殆んど不眠不休激流上に作業し輸送の任を完うした。其の後十月中旬所屬大賀工兵部隊は萱島部隊に配屬せられ山西省忻口鎭に向つて前進し十月二十三日敵の第一線を距る約二千米の南懷化に達した。斯くて萱島部隊は二十四日正午頃より軍鑑山の敵陣地に向ひ攻擊を開始した。敵は精鋭を以て誇る中央軍及共產軍にして其の陣地は天險を利用し數線に重疊して頗る堅固に構築せられ頑强に抵抗し爲めに我が攻擊は意の如く進捗せず特に墓地の高地西端突角部にある側防機關銃の爲め第一線は死傷續出して爾後の前進は殆んど不可能の狀況になり終に夜となつた。萱崎支隊長は日沒後歩工兵破壞班を以て敵の側防機關を撲滅して突擊を決行するに決し氏も亦選ばれて破壞班に加はり出發した。然るに敵は我が猛攻に增援隊を得たるものゝ如

く午後八時頃より數次に亘り逆襲し來り爲めに彼我混戰亂鬪一大修羅場と化したが悉く敵を擊攘した。支隊長は直ちに部隊を整理し更に午後十一時三十分突擊を敢行するに決した。此の時氏は再び小隊長以下七名より成る第二破壞班の爆藥手として決死小隊長に從ひ敵の側防機關銃に肉薄し火を吐く敵機關銃に戰友森下、柳川一等兵等と共に爆藥手榴彈を投じ其の炸裂爆音は暗を通して天地に轟き同時に我が步兵部隊は勇猛果敢敵陣に突入奮戰格鬪遂に二十五日未明軍艦山の一角を占領したが此の突擊の際氏は惜しくも胸部及左大腿部に砲彈破片創を受け壯烈なる戰死を遂げた。此の突擊戰には氏と同じ破壞班の戰友柳川、森下一等兵も相次いで斃れた。而して萱島支隊長等の奮戰と尊き犧牲に戰勝の端を拓き更に猛攻激戰を續くる事十日間遂に十一月三日明治節の佳辰に堅壘を陷れ忻口鎭の城頭高く旭旗を翻すに至つたのであつた。

氏戰死の一週間前十月十八日兩親に宛てた手紙の一節に「今日迄度々の戰鬪に參加致しましたが幸に無事で元氣旺盛であります。然れども元より此の身は君に捧げしものでありますれば生きて歸らんなどの思ひは更にありません。如何なる事があつても決して驚いたり嘆いたりして下さらぬ樣此の實雄は笑つて護國の花と散るの覺悟であります。息つく暇もなく近く某方面に進擊致します。或は之が最後となるやも知れません云々」と以て氏の誠忠牢固たる覺悟が偲ばるゝと共に此の書信を認めて一週間目竟に氏が豫期せし如く護國の花と散つた事を思ふ時洵に感慨無量轉た痛惜哀悼の情忍び難きものがある。然し氏が出動以來幾多の功績殊に身を以て忻口鎭攻略の端を拓いた其の赫々の武勳は工兵の龜鑑として皇軍戰史を飾り其の芳名は千古に謳はるべく又其の英靈は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙も皇國を護り遺族の將來に尊き加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日工兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　安藤仁

決死戰機に投じて要點を占領し靜海縣劉莊に散華す

氏は島根縣知夫郡知夫村の人にして父を才太郎母をヨシと云ひ大正五年五月二十二日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚着實にして義務心厚く事に臨んで沈着剛膽であつた。鄕里の小學校を卒業後昭和七年四月島根縣立隱岐商船水產學校に入學同十年三月同校を卒業下關市林兼商店に店員として就職し翌十一年滿洲國牡丹江林兼商店冷凍部に轉勤し業務に精勵中であつたが昭和十二年一月現役兵として松江步兵聯隊へ入營し防毒班員に選拔され修業した。

支那事變勃發するや福榮部隊に編入せられ七月下旬勇躍北支戰線への征途に就いた。斯くて八月二十五日以來子牙河々畔の警備に就くや斥候巡察步哨等として至嚴なる警戒勤務に服し終始志氣旺盛熱心精勵群を拔き上下の信賴を一身に集めて居た。八月三十一日所屬中隊が王口鎭を攻擊するや氏の所屬分隊は中隊配屬の機關銃小隊の掩護を命ぜられたが氏は克く分隊長を輔佐し積極的に其の任務を完うせしめ中隊が大邀舖南端の敵陣地を攻擊するに方りては浸水膝を沒する跋涉困難なる地形に於て能く分隊長を輔佐し終始旺盛なる志氣を以て勇敢に行動し其の任務を全うした。

九月三日乃至六日の東西子牙鎭の戰鬪に於て所屬中隊は六日午後一時行動を起し大隊の右第一線となり靜海縣劉莊南方に進出し敵の退路に迫つた。氏の所屬分隊は小隊の右翼に在りて前面堤防の線を死守せる敵を午後一時五十分より攻撃した。敵は此の線を突破されんか彼等の退路は直ちに一大脅威を受くる事になるのであるから死物狂ひで頑强に抵抗したのは無理からぬ事で爲めに所屬中隊の攻撃前進に伴ひ敵は猛射を浴びせ來り斜射又縱射の雨霰流石に勇敢なる我が分隊も暫し彈雨の間隙を窺つて躍進の好機を待つの外はなかつた。此の時氏は戰機を逸すれば所屬中隊本來の任務が達し得ざるを察し熾烈なる敵火を冒し敢然として獨斷敵の左翼を包圍するが如く位置を變更し敵陣地の左側方より猛射を加へた。果然敵は一大牽制を受け所屬分隊の攻撃前進は活潑となつた。氏は此の成功にほゝ笑みつゝ尙も勇敢に敵に肉薄し今や敵前五十米附近に達せし時敵彈飛來不幸にして左側胸部に貫通銃創を受け玆に壯烈なる戰死を遂げた。だが所屬分隊は間もなく堤防の線に壯烈なる突撃を敢行し所屬中隊は午後二時三十分全く劉莊の敵陣地を奪取し以て敵の退路遮斷の重任を全うするを得た。

あゝ戰機は須臾にして變轉す。慧眼克く之を看破し剛膽機敏不惜身命の働きこそ戰勝獲得の重要素因であるが氏は克く此の際典型的の光輝ある武勳を奏した。唯夫れ再び還らぬ尊き犧牲こそ悲しくも亦神の姿であつた。眞に是れ生死を超越せる献身報國の氣魄のみが全軍の勝利を齎らしてくれたのである。氏の此の行動は生乍らの神であり天晴れ皇軍の眞意氣を吐いてくれた。其の功績は皇軍戰史に牢記さるべく其の名は末永く神州男兒の譽と謳はるべく其の英靈は萬世に生き皇國並に一家の守護神として限りなき加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　齋藤金太郎

毎發必中の射撃を爲し死期迫るも自已の掩護射撃下に速に渡河せよと戰友を促す

氏は栃木縣足利郡毛野村の人にして父を長十郎亡母をツネと云ひ大正四年五月二十八日に生れ未だ獨身であつた。資性溫順にして實直責任觀念頗る旺盛鄕黨の風評良好であつた。昭和三年三月毛野村小學校尋常科を卒業し同六年四月より入營時まで足利市に出で織物加工業南雲貞治方に見習奉公として住込み熱心業務に從事し傍ら同市相生青年訓練所に通ひ同十年三月同所の課程を修了した。昭和十一年一月徵兵として宇都宮步兵聯隊に入營し熱心軍務に精勵し精勤章を受け同十二年七月善行證書を附與せられて歸休除隊した。

支那事變起るや昭和十二年八月應召坂西部隊第五中隊に編入せられ第三小隊第一分隊小銃兵として勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月十四日永定河畔胡林南方地區の戰鬪に際しては常に分隊の中堅となりて勇敢に活躍し特に東莊に於て中隊の左第一線となるや篠つく雨の如き敵彈下に沈着正確なる射撃を以て逐次敵を制壓しつゝ躍進又躍進して敵に近迫し其の間克く分隊長を補佐して激烈なる戰鬪を敢行し遂に敵を撃退して引續き之を急追し十五日拒馬河畔に達した。然るに拒馬河は水深胸部に達し流速急にして渡河容易ならざるのみならず對岸の敵陣地は頗る堅固に構築せられ剩さへ各種の火器を配備して我を邀撃せんと待ち構へてゐた。之に對し坂西部隊は十五日午後此堅陣を突破すべく敵前强行渡河を敢行するに決し氏の所屬中隊は最右翼たる第一渡場より午後三時を期し渡河することゝなり第一第二小隊を第一線渡河部隊として第三小隊は之が渡河掩護に任ずることゝなつた。愈々豫定の時刻となり氏の所屬第三小隊は高粱畑を通過して河岸に進

出し渡河掩護の任務に就くや對岸よりする敵の射撃は俄かに猛烈となり第一線渡河部隊たる第一小隊には忽ち數名の死傷者を生ずるに至つた。氏はかくの如く猛烈なる敵彈を物ともせず克く分隊長を輔佐し其指揮に從ひ戰況騷然悲慘の中に沈着以て每發必中の射撃を爲し敵を制壓して第一線部隊の渡河を容易ならしめつゝありしが無念忽ち敵彈氏の下顎部を貫き竟に其場に倒るに至つた。然し剛氣の氏は尙も射撃を繼續せんと努め居たりしも身體意の如くならず辛くも腕を動かし戰友の手當を拒否して速かに渡河前進する樣促しつゝ竟に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。然し中隊は氏等の勇戰奮鬪により見事渡河を完了し午後七時には北相の堅陣を奪取することを得た。

氏や鄕にあるも軍に從ふも終始一貫忠實にして責任觀念旺盛其敵彈下死生の巷に立つも沈着常に每發必中の射撃を爲して敵を制壓し小銃兵たるの本分を完うして遺憾なかつた。而かも渡河掩護に當るや其任務に關する責任觀念は全魂に透徹し死期迫るも我が掩護射撃の下に速かに渡河せよとの擧措を爲せるが如きは正に此觀念の發露にして氏の性格躍如眞に感嘆の外なしと謂ふべきである。征戰幾何もなく氏の如き忠烈勇敢の士を喪ひしは洵に痛恨に堪へざるも其職責遂行の示範は後世の鑑となり其武功は其芳名と共に万世不朽に語り傳へられ英靈は不滅に生きて護國の神と祀られ神靈尙も皇國並に一家の前途に加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　才原勝治

勇躍決死隊員となり堅壘に突入して玉碎す

氏は島根縣能義郡母里村の人にして父を治平母をとみと云ひ大正四年十二月二十日に生れ未だ獨身であつた。資性溫良着實にして孝心深く交際亦圓滿にして世人の愛敬を受けて居た。運動に趣味を有し郡青年團大會等に等ては短距離競爭の選手として優勝し數回に亘り賞品を與へられ村內青年團の體育に貢獻せる所甚だ多かつた。昭和五年三月母里小學校高等科を卒業後直ちに母里青年學校へ入校し熱心勉勵克く所定の課程を修め昭和十一年三月同校を修了し爾來家業たる林木商に精勵し以て父の業を扶けた。其後現役兵として步兵聯隊へ入營し軍務に精勵中支那事變に際會し福榮部隊に屬し聖戰に參加するに至つた。

昭和十二年七月下旬勇躍征途に就き北支に到着したが遺憾にも黃疸に罹り約一ヶ月天津病院に療養した。氏は勃々たる雄心を抱きつゝ只管全快を祈願して居たが退院して原隊に追及するや選ばれて第一大隊本部傳令となりあらゆる辛酸も如何なる危險も更に意に介せず日夜奮勵努力特に燒窰盆の戰鬪に於ては猛火を冒して活躍し大隊長の戰鬪指揮を容易ならしめた。

十月初旬に入り氏は中隊に復歸したが當時所屬隊は爾後の前進準備の爲黃河涯附近に於て警備に任じて居た。附近には多數の敗殘兵橫行し不安なる情況であつたが氏は頻繁なる警備勤務に或は敵彈下に李家橋の警備に當り或は工兵隊の架橋作業を掩護し以て敵をして襲撃の機を得せしめず完全に任務を遂行した。

超えて十月十三日所屬第三大隊が平原の西方正莊附近の敵陣地を攻撃するに方りては所屬中隊は大隊の左第一線となり

氏の所屬第二小隊は當初豫備隊となり中隊の右翼後に位置し午後二時三十分より攻擊前進に移つた。斯くて小隊が敵前約二百米に達せし頃には部落の土壁銃眼より熾烈なる猛火を浴びせ來り死傷者續出するに至つた。中隊長は一意攻擊前進を續行し將に突擊に移らんとしたが敵前四十米に於て水濠及鐵條網の障碍物に遭遇し已むなく更に攻擊を準備する事になつた。夜に入り氏の所屬小隊は前面の部落に向ひ突擊すべき事を命ぜられたが此夜月明かにして邊り隈なく照り渡つて居た。敵は月明を利用して絶え間なき猛射を浴びせるので尺寸の移動も危險千萬であつた。併し小隊長は決死隊を以て障碍物を破壞せしめ其破壞口より突入すべく決意した。之れが爲決死の勇士を募つたが氏は聲に應じて直に參加を願出で先づ小隊正面を避けんが爲匍匐轉回等の移動法に依り左方に移動し率先水濠を越え鐵條網を見事に破壞し突擊の動機を誘發した。やがて好機を發見するや猛然として起ち上がり先頭第一に敵陣地に突入し奮戰力闘中無念なるかな銃眼より狙擊し來る敵の一彈に兩大腿部及會陰部に貫通銃創を受け竟に打倒れた。氏は部落占領後正莊野戰病院に後送手厚き治療を受けたが出血多量の爲め十五日午前八時終に戰場の華と散つた。所屬中隊は氏等の尊き犧牲に依り十三日午後十時正莊の敵陣地を完全に占領するを得た。

氏の鄉に在るや誠實家業に勉勵し餘力を以て鄉黨青年の體力增進に力を用ゐ堅忍持久と潑剌たる進取の氣風を奬勵して息まなかつた。出でゝ軍務に從ふや克く上官の意圖を奉じて最善の努力を拂ひ明朗快活上下の信賴を受けて居た。正莊の攻擊頓挫し難局に直面するや進んで決死隊に加はり一死報國必勝を期する何ぞ夫れ壯烈なる。不幸奮戰中此忠誠勇武の士を喪ふ哀悼痛惜に堪へざるも氏の赫々たる武勳は皇軍戰史を飾りて其の芳名を留むべく不滅の英靈は護國の神と祀られ其神靈は尙も皇國並に一家の將來に尊き加護佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　佐間田三重

精鋭なる擲彈筒手、敵機關銃を撲滅して職に殉る

氏は栃木縣芳賀郡南高根澤村の人にして父を信一母をトメと云ひ大正六年一月二十八日に生れ未だ獨身であつた。資性快活明朗にして又剛毅果斷の士であつた。運動選手として屢々各種競技會に出場して優勝し屢々賞品を受領し又縣體育協會よりも優勝「メタル」を授與され常に鄉黨青年の體育向上に盡力して居た。昭和六年三月南高根澤小學校高等科を卒業し其後自宅に於て家業に精勵して居つたが後昭和十二年一月現役志願兵として宇都宮步兵聯隊へ入營し日夜軍務に精勵した。

支那事變起るや坂西部隊に屬し選ばれて第四中隊擲彈筒手となり勇躍北支戰線への征途に就いた。斯くて九月上旬北支へ到着克く隆暑に堪え飢渴を忍び泥濘の難路を踏破して敵を驅逐し永定河畔の戰闘に於ては氏の所屬第一小隊は部隊本部の警戒部隊として服務したが氏は能く晝夜に亘り積極的に任務を遂行し他兵の模範となつた。

所屬大隊は拒馬河の敵前渡河を敢行せんが爲九月十五日同河畔に進出した。此時所屬中隊は大隊の第一次渡河部隊を命ぜられ渡河の諸準備に着手したが氏の所屬小隊は中隊の爲渡河埡護部隊となりて河畔近く進出した。然るに敵は既設陣地に據りあらゆる防禦手段を講じ我が軍を半渡に擊滅すべく手ぐすね引いて待ち構へて居た。我が軍の河畔に接近し渡河を開始するや果然同河右岸の敵陣地から猛烈なる射擊を浴びた。所屬小隊も一齊に火蓋を切つて敵を猛射し彼我の銃砲戰は刻一刻と激烈を極めて來た。氏は敵前二百米に進出し同河右岸に於て最も活動中の敵の側防機關銃を求めて之に正確迅速なる射擊を行ひ或は其射彈觀測に任じ或は代つて射手となり遂に見事に命中彈を得て之を撲滅し渡河部隊の行動を著しく容易ならしめた。然れども之と相前後して敵よりも猛射を受け氏は惜しくも脚部に貫通銃創を受け「中隊長殿！　やられました」の一言を名殘とし壯烈なる戰死を遂げた。併し所屬中隊は氏等の尊き犧牲に依り其後の戰況有利に進展し延いて所屬大隊戰勝の基礎を確立するを得た。

氏や幼少より運動競技に依り心身を鍛練し更に軍隊教育に依り益々忠君愛國の信念を鞏固にし其精到なる武技又崇高なる責任觀念の迸る所如何なる悲慘なる戰況も眼中になく唯々自己の職分に邁進し所屬中隊の爲頑敵を粉碎して玉碎した。寔に是れ皇軍歩兵の精鋭にして一般軍人の模範であつた。今や聖戰の初期作戰に於て此忠誠勇武の士を喪ふ眞に痛惜の極みであるが氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史に牢記せられ其名は千載の下語り傳へて芳ばしく其英靈は不滅に生きて護國の神と仰がれ其神靈は尙も皇國を護り又一家の守護神としてその多幸繁榮に限りなき佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　佐々木順逸

勇敢なる自衛隊員、大敵と奮鬪し職に殉す

氏は秋田縣仙北郡高梨村の人にして父を順學母をクネと云ひ大正四年三月二十七日生れで未だ獨身であつた。資性溫厚篤實にして家業に勤勉親に克く孝養を盡した。昭和四年三月高梨高等小學校を卒業し昭和九年四月自動車運轉手の免許狀を受けた。

支那事變起るや昭和十二年七月二十七日大畠部隊に應召兵站監部自動車隊矢島中隊に編入第二小隊第十分隊貨車の運轉助手として勇躍征途に就いた。北支戰線到着後八月十一日より三十一日に亘る間は豐台北平南口榆林堡附近の次で九月一日より二十日に亘る間は懷來宣化附近の補給業務に從事し此の間惡路と過度の使用に依る自動車の衰損に留意し手入保全に全力を傾倒し運轉亦宜敷を得不眠不休の活躍を續け以て中隊の任務遂成に支障なからしめた。

九月二十一日宣化を出發同日蔚縣に着し彈藥糧秣を積載して二十四日靈邱に向ひ出發し同日夕長城線附近靈邱の南方八里小寨村に到着して三浦部隊に之を交付し其の夜は小寨村附近に露營した。此の頃第一線は戰況刻々急を告げしを以て中隊は至急歸還靈邱より新鋭の歩兵を前線へ增加すべく兵力輸送の任務を受け二十五日兵站自動車新庄部隊本部矢島隊本部第一第二第三小隊修理班の行軍序列を以て午前九時靈邱に向ひ同地を出發した。此の日夜來の豪雨は全く霽れて朝陽輝き

寒氣身に泌むの朝であつた。露營地を出發して進むこと二粁時は午前九時十五分往路敵影を見ざりし此の附近既に昨夜の雨を衝いて遠く後方に迂回せる敵の正規軍一ヶ旅と俄然遭遇直ちに之と應戰し氏は第二小隊自衛隊として敵を攻擊した。敵は迫擊砲重輕機關銃を有する大部隊にして之に對し我は新庄中佐以下僅かに百七十六名而かも大部分は輜重兵なり而して敵は山岳丘阜等地の利を占め前方及び兩側の三方面より攻擊し來り我は全く敵の重圍に陷るに至つた。氏は第一線火線に在りて常に其の先頭に立ち奮戰力闘大に努め敵を射殺すること數十なりしが午前十一時頃惜しくも頭部に盲貫銃創を受け壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。然し中隊は氏等の奮戰に依り約三時間半に亘り寡兵克く衆敵を支へ此の間第一線直後に在りし砲兵同段列大小行李をして離脱の餘裕を與へ午後〇時四十分此の包圍線を突破し三浦部隊に合することを得た。

夫れ後方兵站の業務たる假令良道ありとも容易ならざるに北支殊に山西戰場に至りては惡路嶮難加ふるに皇軍破竹の進擊に伴ひ晝夜兼行の急追隨と後方敗殘兵の出沒等其の辛苦や想察に餘りありと謂ふべきである。然るに氏は終始一貫粉骨碎身以て凡有辛酸を克服し近代輜重の全能を發揮せしめて遺憾なかつた。實に第一線快勝の裏に隱れたる此の功績は沒すべからざるものである。偶々寡兵衆敵と遭遇するや孤軍奮闘以て輜重車を守護し敵をして之に一指だも觸れしめざりしは是れ職責の存する所身命を君國に捧げ斃れて後已む忠誠の發露にして皇軍輜重の誇りと謂ふべきである。噫小寨村の散華壯烈鬼神を哭かしむるものあり其の赫々の武勳と隱れたる功績とは忠孝一途の示範と共に千載の下青史を飾り不滅の英魂は護國の神となり神靈尙も皇國並に一家の將來に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　坂野濱治

孤軍奮闘全員何姜村の華と散る

氏は愛知縣海部郡南陽村の人にして父を兼治郎母をなると云ひ明治三十七年十一月二十日生れで妻きぬとの間に一子金治がある。資性正直にして職務に熱心親には孝心深く爲めに衆人の信用厚かつた。大正六年三月南陽尋常小學校を卒業し大正十三年十二月徴兵として名古屋歩兵聯隊に入營した。

支那事變起るや昭和十二年十月八日中尾部隊に應召し後備歩兵隊牧野部隊村瀬隊に編入せられ勇躍征途に就いた。中支戰線到着後十一月十二日より十二月三日に亘る間は軍の急進擊に伴ひ尙ほ附近に殘敵を控へつゝ金山衞、松江、享林鎭、金山等次々と兵站守備地を變更し最後に轉じて西進する軍の左側背を掩護すべく四日石灣鎭守備の重任に就いた。此の間氏は不眠不休緊張の裡に各種の勤務に服して不屈不撓剛膽勇敢克く其の職分を完うして部隊の任務達成に貢獻した。

石灣鎭は寒村なるのみならず住民逃走し物資なく糧を敵地に求むることは不可能であり又後送を受くる途もなかつた。依つて三里東方の一小都桐鄕の物資を調査すべく十二月十日午前七時徴發隊一行十四名は曉の霧を衝いて塚本少尉の指揮に依り同地方の小船に乘船石灣鎭を出發して江南大運河を下航し桐鄕附近に至り物資の調査を爲した。而して一同は午後

四時該地を出發した。塚本少尉大野主計外兵三名は船中に他の九名は陸上を曳船して歸途に就いた。該クリークの右岸は桑畑にして通視困難であり左岸は芒各所に生へ茂り其の高さ身長の一倍半にも達してゐた。午後四時四十五分嘉興南方約五里卽ち桐鄉北方約一里の何姜村武聖廟南方二百米の地點に差懸るや突如機關銃手榴彈を有する約二百の敵正規兵現はれ前後左右より猛射を浴びせて來た。塚本少尉以下全員は直ちに右岸に上陸して之に應戰し敵の猛射の下決死孤軍奮鬪力戰大に努めたるも衆寡敵せず次々に一人斃れ二人斃れ時餘の激戰に彈藥も盡き果て流石勇將猛兵も最早之れまでなりと榊原を傳令として本部に此の狀況を報告せしめ殘員一同　陛下の萬歳を三唱して群がる敵中に突入し十三勇士悉く斃れ氏も亦右胸部貫通銃創並に後部刺創を蒙り壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた時に午後六時頃であつた。

因に氏の一家は二弟共に高須部隊、島田部隊に屬して戰線に活躍中の譽れの一家である。

夫れ忠孝は一道なり氏の鄉に在るや至孝、出でゝ軍に從ふや忠誠の迸る所後備役の終期なるにも不拘活躍壯者を凌ぎ中支各地の守備に危險を冒して奮鬪し以て其の重任を完うした。其の何姜村の散華に至りては孤軍奮鬪壯烈鬼神をも哭かしむるものがあり克く皇軍の威武を宣揚して遺憾なかつた。其赫々の武勳は千秋に盡きざるべく不滅の英魂は護國の神となり神靈出でゝは大陸に雄翔し聖業を守護して已まざるべく入りては愛兒の身邊に留まり其の遺志繼承を加護照覽して措かぬであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　坂田岩治郎

決死鐵條網を破壞し小隊突擊路を開設して斃る

氏は兵庫縣城崎郡餘部村の人にして父を茂吉母をかねと云ひ大正五年六月二十一日生れで未だ獨身であつた。資性溫厚篤實家業に頗る精勵一村の模範であつた。昭和五年三月餘部尋常小學校五年を修業引續き青年訓練所に入所し同年青年學校となるや本科五年に入校し同年十月まで修業した。家計不如意の爲め義務教育も完からず日常の通信にも不自由なりしが徵兵檢査に合格するや日夜奮勵勉學其の結果入營前には普通の讀書は勿論勅諭の暗記等長足の進步を爲し村民を驚嘆せしめし程であつた。昭和十二年一月徵兵として鳥取步兵聯隊に入營し同年七月支那事變起るや長野部隊に屬し八月勇躍征途に就いた。而して北支戰線到着後九月十三日より滄縣附近の戰鬪開始せらるゝや所屬中隊は二十一日人合庄の敵を夜襲することゝなり午後六時行軍を起した。氏は第二小隊第二分隊小銃兵として分隊長の指揮に從ひ敵彈雨下する中を勇敢に敵に近接し突擊準備位置に達するや友軍砲兵の猛烈なる支援集中射擊に引續き中隊は午後七時敵陣に突擊した。氏は分隊長と共に水濠を越へ鐵條網を突破し率先敵陣に突入して之を奪取し尙も引續き部落の土壁に據りて抵抗する頑敵を屠り大に戰果を擴張し更に剛膽勇敢部落內に進入し危險を顧みず逐次殘敵を掃蕩して徹宵活躍し翌二十三日午前九時完全に敵を

撃退して人合庄の陣地を奪取した。

續いて中隊は其の日敵の本陣地たる姚官屯に對し書間攻撃準備を爲し午後六時より攻撃を開始した。敵は水濠鐵條網を構築し堅固に陣地を設備して小銃重輕機關銃迫撃砲等を配備して猛火を逞しうし頑强に抵抗した。氏は第二小隊の鐵條網破壊班の一員となり小隊長と共に猛火を冒しつゝ逐次敵に近迫し敵陣地前水濠の線に達し破壊の機會を窺つた。愈々友軍の各種火器に依り敵を制壓し其の機熟するや破壊班前進の命令と共に敢然水濠より躍り出て强行破壊に着手した。月明の爲め敵火益々熾烈を極はめたるも素より決死、一意鐵線を切斷して居たが其の間無念顏面に敵の手榴彈を受け竟に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。然し破壊班の決死作業に依り遂に突撃路は開設せられ中隊は午前四時敵陣地に突入亂戰格鬪の後遂に姚官屯の陣地を占領した。

氏の入營に決するや學力低く軍務に事缺くを憂ひ勅諭の奉唱大に努め未だ入營せざるに聖訓心肝に銘じて居た。果せる哉戰陣に臨むや入營日尙淺き初年兵なるにも拘はらず夜襲に、掃蕩に、勇敢剛膽死生の地に奮戰し就中鐵條網の强行破壊の如き所謂肉彈にして萬死に一生をも希ふ所ではなかつた。氏の切斷せる鐵線には一筋々々氏の全靈が注がれ敵の心膽を寒からしめたであらう。かくの如きは是れ唯々聖諭を奉體し身命を君國に捧げ斃れて後已む忠誠の發露にして眞に軍人の鑑と謂ふべきである。聖戰中途にして氏の如き忠勇の士を喪ふ痛恨禁ぜずと雖も決死以て中隊戰勝の途を拓きたる赫々の武勳は千載に輝き其の芳名は萬古に傳はり不滅の英魂は護國の神として後世永遠に萬民に仰がるゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　佐藤正之

一文山に苦戰中の騎兵隊に決死彈藥を補給して玉碎す（壯烈）

氏は廣島縣沼隈郡田尻村の人にして父を信吉母をチョと云ひ大正五年八月二十七日に生れ未だ獨身であつた。性眞摯剛毅にして孝心深く又敬神の念厚くして責任を重んじ友情に富み諸人の愛敬を受けて居た。昭和六年三月高島小學校高等科を卒業し其後は家事を手傳ひつゝ同校補習學校へ通學し同十一年三月同校を卒業した。氏は機械技術に趣味を有し熱烈なる航空兵志願者であつた。併し體格檢査の折運惡くも病氣に罹りて志を得ず其の後徴兵檢査の時には甲種合格となり滿洲勤務を志願して採用せられ喜色滿面半身脫帽の寫眞を撮らせて其寫眞を母親に呈し「僕が在營中必ず戰爭が起きます。それで若し萬一の事がありましたら此寫眞を祀つて下さい。お母さん僕が歸へらないからとて心配しなさんな。生れなかつたと思つて諦めて下さい。出て行つた者は必ずしも歸るとは思つて下さるな」と言ひ渡し昭和十二年二月意氣揚々として入營の途に就き天津駐屯歩兵聯隊へ入隊した。爾來克く軍務に精勵して良成績を擧げ且心身の鍛練に努め急迫せる北支の情勢に備へて居た。

支那事變愈々其端を發するや氏は品部部隊に屬し高杉中隊に編入せられ七月十三日特に選ばれて久保准尉の指揮下に入り豐台に出動し兵團司令部の護衛勤務に服した。然るに氏は自動車の運轉巧なる爲更に選ばれて同司令部と第一線部隊間を往復し彈藥補給をなすべき重要任務を課せられた。氏は欣然として或は蘆溝橋方面に或は南苑方面に迅速確實に兵器彈藥を補給し以て兵器部々員の業務の遂行に貢献せる所頗る大であつた。

七月二十八日に至り駐屯軍司令官は最後通牒を發し京津地方全面に亘り愈々交戰狀態に入つた。氏の所屬兵團は南苑の

敵を攻撃する目的を以て豐台を出發した。然るに蘆溝橋附近に在りし敵は兵團の留守を覘つて先づ一文字山附近に在りて警備中なる我が野口騎兵中隊に襲ひかゝつて來た。中隊は目に餘る大敵を引受けて孤軍奮鬪敵の重圍に陷り彈藥は缺乏し頗る苦戰を續け漸く無線電信に依り彈藥補給を要求した。玆に於て兵團兵器部々員は即刻補給の準備を整へ決死隊を編成して此重任を命課せんとした。其際氏は決然其重任を遂行せん事を願ひ出た。係將校は大に喜び「友軍の危急を救ふ重任だ。氣をつけて確つかりやり遂げて呉れよ」と勵まし氏は「はい御安心下さい必ずやり遂げます」と彈藥山積のトラックに助手と唯二人一文字山目指して驀進した。豫期の如くトラックは敵の彈雨を浴びたが決死の勇士は之を物ともせず唯一筋のひた走り遂に午後三時頃一文字山に到着し騎兵隊へ無事彈藥を交付した。騎兵中隊長以下は大旱に夕立を浴びし心地にて二人の勇士の手を取りて嬉し涙を湛へつゝ其勞を謝し其豪膽を絶讃した。氏は午後三時半頃一文字山を出發したが往路が不良なりし爲北平街道に歸路を選び豐台指して前進中午前四時頃大井村にさしかゝるや突如前方並に側方は現はれた約一箇大隊の敵兵より一齊射擊の猛射を浴びたが氏は更に動ぜず運轉を繼續しつゝ約百米も突進し片手にハンドルを握り片手に拳銃を執り近寄る敵を射擊して居たが無念敵彈の爲頭部及胸部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。此瞬間にトラックは路外に乘り上げて停止した。歸路には軍曹一名と兵四名も搭乘し氏と共に合計六名であつたが四名は戰死し他の二名も重輕傷を負ひ衆寡敵せず生存者は高粱畑に身を潜めつゝ徒步豐台に到り情況を急報した。所屬部隊は急報に接

し救援隊を派遣し死體を搜索させたが氏の死體は見當らず翌二十九日更に三時間も搜索を續けし結果遂に附近の高粱畑にシヤツ一枚で埋沒されある氏を發見した。不思議にも氏の戰友たりし石山一等兵が眞先に之を發見し氏を抱き上げしがみついて泣き伏したと云ふ事である。然かし騎兵隊は氏の決死行動に依り其後優勢なる敵軍を見事に擊退するを得た。

氏や夙に盡忠報國の至誠横溢し豪邁進取遂げずんば息まざるの人であつた。待望の入營期迫るや時局を顧念して形見の寫眞を母に呈し諄々大義を說きて壯途に就いた。果然聖戰の開始せらるゝや其堅固なる信念と優秀なる運轉技術とに依り東奔西走克く補給の重任を果たしたが惜しくも豐台郊外一夕の嵐に散つた。あゝ壯烈鬼神も爲に哭し誠忠百世の下懦夫を後世に驅はれ不滅の雄魂は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　佐藤信一

砲煙彈雨下に傷者の搜索收容に任じ壯烈江北戰線に散華す

氏は愛知縣名古屋市港區寛政町の人にして父を京松亡母をぎんと云ひ明治四十二年四月二十三日に生れ亡母と同名の妻ぎんとの間に長女光子を擧げた。性溫順にして義務心厚く熱誠事に當り交際亦圓滿にして世人の愛敬を受けて居た。大正十年三月名古屋市小碓小學校高等科第一學年を修了し其後は家庭に在りて父母を扶け農業に精勵する傍ら青年訓練所へ入所し熱心勉勵所定の課程を修め昭和五年一月現役兵として名古屋步兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵して良成績を擧げ就中

銃劍術は優秀にして聯隊大隊長及中隊長より賞狀を授與せられた。斯くて翌六年八月歸休除隊後は再び農業に從事し又公設消防組小頭に推擧されて同事業の爲大に盡力し公設消防聯合會長より表彰された。

支那事變起るや昭和十二年八月應召大島衞生擔架隊に屬し勇躍中支方面への征途に就いた。斯くて上海戰場に到着後は降雨泥濘の中敵の銃砲彈雨に曝されつゝ繃帶所を開設し第一線部隊に到りて傷者を收容し到る所クリークの障碍に阻まれつゝも積極勇敢なる行動を以て傷者を搬送し部隊の任務遂行に貢獻する所頗る多かつた。

次いで所屬中隊は十二月十一日鎭江附近に於て楊子江の强行渡河を企圖する天谷支隊に配屬せられ金壇城より鎭江に急行し同月十三日敵前渡河を敢行し夜半朱家旗桿に露營した。其間氏は戰友を激勵し且率先分隊の先頭に立ち敵の彈雨を冒して傷者を收容し克く分隊長を輔佐し任務を完うした。

翌十四日午前四時氏の所屬分隊は朱家旗桿に於て分遣衞生隊長より次の要旨の命令を受けた。「其分隊は直ちに露營地を出當し永津部隊に到り傷者を收容し尙同隊に跟隨すべし」と右命令を受けたる矢井分隊長は卽時露營地を出發し永津部隊に連絡をとり直ちに施家橋鎭附近の傷者收容に着手した。前夜來抗戰を續けたる敵軍は我猛攻に堪へかねて遂次退却の模樣も見えありしが我が兵力を小敵と見て取り容易に抵抗をやめず小銃機關銃並に迫擊砲を以て我軍に猛射を浴びせかけ友軍の追擊を頑强に阻止せる爲我が第一線部隊には意外にも傷者續出するに至つた。此時氏は砲煙彈雨を冒し分隊の先頭を切つて驀進し傷者の搜索に努め且戰友を激勵し之れが收容に當つた。あゝ壯烈勇敢何等第一線部隊の勇戰に比し遜色なきのみか敵前至近の位置に身を挺して移動するは最も危險なる動作なるに拘はらず氏は任務の前に敢へて決死的行動をとり聊かも躊躇逡巡の色もなかつた。然るに不幸午前九時三十分頃一彈飛來氏は腹部に貫通銃創を受け「殘念！　やられた」の一語を遺し壯烈なる戰死を遂げた。

氏や鄕に在りては忠實業に服し溫顏人に接し公益を圖り克く良民たるの本分を盡し出でゝ軍に從ふや誠實以て軍務に精勵し上下の信賴を受けて居た。今次聖戰に參加するや要塞戰に勝るとも劣らざる上海の激戰場に馳驅して傷者收容の重任を全うし更に江北戰線の急先鋒たりし天谷支隊に轉屬して揚州への進出に方り勇猛果敢任務に邁進して竟に江北戰線の華と散つた氏や參戰の日短かゝりしとは言へ其誠忠勇敢の行動は正に皇軍衞生隊の本領を發揮して遺憾なく天晴れ軍人の龜鑑たるものであつた。斯かる忠勇義烈の士を喪へるは痛惜禁ずる能はずと雖も士の戰場に臨むや素より生還を期せず而かも其死所を得るや寔に難しとする所である。氏今や其壯容に接すべくもないが其赫々たる武勳は皇軍戰史に牢記せられ不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家殊に愛子の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　先田巳之助

責任觀念旺盛なる砲手、敵彈に殪るゝも尙彈藥箱を放さず

氏は兵庫縣三原郡福良町の人にして父を伊三郎母をとめと云ひ明治四十二年五月十日に生れた。資性溫厚篤實家業に熱

心にして諸交際亦圓滿諸人より愛敬を受けて居た。大正十一年三月釜山府第二小學校を卒業後釜山に於て雜貨商に從事したが後昭和五年一月平壤歩兵聯隊に入營し歩兵一等兵を以て歸休除隊となつた。昭和八年上海事變の業務に從事し功勞に依り從軍記章及び一時賜金を賜はり昭和十年四月以來は釜山府南富民町の組長に推擧され信望日に厚きを加へて居た。

支那事變起るや氏は間もなく應召し鈴木部隊の聯隊砲隊第二小隊第三分隊九番砲手として勇躍征途に就いた。斯くて昭和十二年七月下旬北支戰場に到着天津より四日間に亘り夜行軍を實施し其第一夜の如きは雨中惡路の爲泥濘車軸を沒する程の難行軍であつた。氏は其間默々として車輛の後押となり或は輓索をとつて輓曳する等克く砲手の任務を盡し爾後百二十度の酷暑の中殊に睡眠不足の爲疲勞其極に達したる拘にはらず志氣益々旺盛にして馬匹の手入に宿營の諸準備に警戒勤務に奮勵努力し將兵一般に多大なる感激を與へて志氣を振作し遂に目的地たる張家灣に到達する事を得た。

七月二十七日傲慢不遜の敵軍は團河村及行宮附近の既設陣地に據り我が軍に挑戰するに至れるを以て所屬部隊は先づ團河村の敵陣地を斷乎攻擊することに決し午後三時半展開氏の小隊は第一大隊の左翼に陣地占領を命ぜられた。敵は圍壁及墓地等を利用し掩蓋或は銃眼を設け陣地前の水流及外壕を巧に火制し得る如く銃砲火器を配置し附近一帯は高粱繁茂し陣地前近距離のみ射界を清掃して居た。所屬小隊の陣地進入に方りては敵は猛射を浴びせて來たが氏は沈着勇敢に行動し其の陣地進入を援助し迅速に砲側に彈藥を整備する等小隊の陣地進入に寄與する所甚大であつた。次で小隊は左第一線たりし第二大隊に配屬せられ午後四時より團河村の敵迫擊砲に對し制壓射擊を行つたが敵亦其迫擊砲及山砲を以て應戰し其射彈は頻りに砲側及び其附近に落下炸裂した。氏は從容として其彈雨を冒し約三百米後方の彈藥小隊位置と放列間を往復して彈藥を補充し以て所屬分隊の戰鬪力を最高度に發揮せしめ竟に敵の迫擊砲を制壓し第一線歩兵の攻擊を著しく容易ならしめた。午後四時三十分敵の一部が團河村北方に退却するを認むるや所屬小隊は之に對し猛射を加へたが氏は機を失せず砲側に彈藥を補充せんと彈藥小隊の位置より彈藥箱を提げ砲側に向ひ躍進中惜しや敵彈飛來頭部に貫通銃創を受け彈藥箱を確かと持ちたるまゝ其場に壯烈なる戰死を遂げた。併し氏の小隊は氏等の奮鬪に依り團河村の敵陣地を奪取し午後七時三十分には行宮の敵陣地をも奪取し之を確保するを得た。

氏は責任觀念極めて旺盛にして鄕黨の模範となり軍に從ひても亦克く分隊の中堅となりて分隊長を輔佐し戰友一般の模範となつて居た。果然今次聖戰に從ふや死生を超越し一意任務に邁進し竟に敵彈に斃るると雖も尙彈藥箱を握り締めたるまゝ瞑目せる其崇高なる責任觀念に至りては盛夏に爽颯たる高峯を仰ぐの感がある。あゝ斯る忠烈の勇士今や空しく眞に痛恨に堪へざるが氏の功績は天晴れ皇軍戰史を飾り其芳名は不朽に傳へらるべく又其英靈は永世に生きて護國の神と仰がれ神靈尙も皇國の前途を守護し一家の將來に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　坂田立年

決死、彈藥補充の重任を全うし陞官屯の華と散る

氏は岡山縣上房郡水田村の人にして父を金太郎母をはまと云ひ大正五年十一月六日に生れ未だ獨身であつた。性溫厚篤實にして孝心特に深く又義務心に富み不屈不撓の氣慨を有し模範青年として其の將來を囑目されて居た。昭和六年三月上水田小學校高等科を卒業し其の後は家庭に在りて父母を扶けて農業に從事し餘暇を以て父の副業たる疊職を見習ひ其の間同村青年訓練所に入所して所定の課程を修め同十二年一月現役兵として岡山歩兵聯隊へ入營し一意軍務に精勵して良成績を擧げ特に輕機關銃手として成績優秀にして所屬中隊長より表彰せられた。

支那事變起るや間もなく赤柴部隊に屬し板倉中隊の輕機關銃分隊彈藥手として勇躍征途に就いた。北支到着後八月二十日所屬中隊は堀田大隊長の指揮を以て先づ揚柳青の西方約一里に在る當城附近の敵を擊破した。其の際氏は第一小隊第六分隊員として勇敢に行動し克く輕機關銃の威力を發揚して中隊戰鬪に寄與し次で同月二十三日靜海縣附近の戰鬪に於ては大隊は午前六時より西邊庄西方一軒家附近の敵陣地を攻擊したが所屬中隊は大隊の右第一線となり交戰約三時間にして此の陣地を占領した。氏は其の間銃側彈藥補充を圓滑にし又隣接分隊と連絡を確保して分隊長の戰鬪指揮を容易ならしめた。

越えて八月二十九日所屬大隊は敵を急追して陳官屯方向に進出したが氏は其の際石井少尉の指揮下に大隊長直轄の搜索隊員となり勇敢なる行動に依り機敏に敵情地形を搜索して搜索隊長を輔佐し以て大隊主力の小趙家窪への進出を容易ならしめ續いて唐官屯附近の戰鬪に於ては所屬中隊は大隊の左第一線となり九月三日夜張家園北方約四百米の線に攻擊を準備し翌四日午前八時より運河左岸の張家園馬辛庄馬集の敵陣地を席捲し翌五日曲庄陳庄を經て後屯に進出し同夜二回に亘る敵の夜襲を見事に擊退した。氏は其の間果敢なる行動に依り輕機關銃の卓越せる威力を發揚し小銃分隊の攻擊を容易ならしめた。

斯くて九月十日所屬大隊は馬廠陣地の一鎖鑰たる陞官屯の敵陣地を攻擊すべき目的を以て午後三時行動を起し所屬中隊は大隊の左第一線となり午後四時二十分より愈々攻擊前進を開始した。敵は馬廠河の水門を鎖し堤防を決壞して我が行動地域を汎濫地帶と化せしめ馬廠河南岸地區には堅固なる陣地を縱橫に設け其の間隙は互に側防機關に依り火制し得る如く到れり盡せりの防備を完了し河岸堤防上には鋭く警戒の目を光らして居た。果然所屬大隊の行動を起すや急霰の如き猛火を浴びせかけ氏は濁水の汎濫地帶を一進一止漸く北岸の堤防に取りつくや對岸の敵小銃機關銃は銃口火を吐いての猛射、其の物凄さは筆舌に盡すべくもなかつた。氏の分隊は嵐の如き敵の彈雨を物ともせず敵岸に取りつき先づ敵の第二線陣地に在りて活動中の敵輕機關銃を求めて之を猛射したる後東方約百米に陣地變換を行ひ續いて同目標を射擊中分隊長渡邊伍長が敵彈に斃れ同時に銃側の彈藥を擊ち盡した。氏は敢然敵火を冒し機を失せず彈匣を銃側に運んで射擊を繼續させたが暫くして再び彈藥の缺乏を告げんとするや氏は獨斷第二彈匣を運び來るべく堤防上に躍り出で之を銃側に投じて其の目的を達したが無念此の時氏は敵兵に狙擊せられ頭部貫通の銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。然れども分隊は氏の尊き犧牲に

依り戰機に投ずる射擊を繼續するを得所屬部隊は其の夜午前零時三十分陞官屯を占領するに至つた。

氏や鄕に在りては溫厚篤實の模範青年であり出で、軍務に服するや熱誠眞摯武技亦優秀にして上下の信賴を受け今次聖戰に參加するや克く重責を自覺して到る處に勇戰奮鬪して赫々たる武勳を奏し而かも難局に遭遇して志氣益々旺盛竟に重要戰機に身を犧牲に供して彈藥補給の重任を全うし以て戰勝獲得の端を拓いた。誠に是れ　聖旨を奉戴し軍人の本分を完遂せるものと謂ふべく天晴れ軍人の龜鑑と稱すべきである。斯かる忠誠勇武の士を喪へるは痛惜極りなしと雖も氏の功績たるや北支戰史に輝きて其の芳名は後世に謳はるべく又不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍砲兵上等兵勳八等功七級　佐藤龍夫

娘子關の激戰に敵の包圍を受け勇戰奮鬪職に殉す

氏は宮城縣宮城郡高砂村の人にして父を健吉母をいなと云ひ大正五年十一月二十七日に生れ未だ獨身であつた。性眞摯快活にして孝心深く世人との交際も極めて圓滿であつた。氏は常時修養に努め青年振興會修養會の中堅として活躍し又少年團副會長に推擧せらるゝ等一村の信望を擔ひ克く躬行實踐の範を垂れ業務に精勵して着々其成果を擧げて居た。昭和三年三月高砂村中野小學校高等科を卒業し其後は家庭に在りて家業を手傳ひつゝ孝養を盡し傍ら同村青年學校へ通學し昭和九年四月以來は仙臺市夜間商業專修學校に通學し熱心勉勵良成績を擧げた。昭和十二年一月現役兵として高田山砲兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵し砲手班として教育せられたが教練勤務內務の諸成績最も優秀にして中隊屈指の上等兵候補者として囑目されて居た。

支那事變起るや星野隊に屬し二番砲手たる光榮を擔ひ勇躍征途に就いた。斯くて北支到着後豐台保定新樂を經て十月八日漸く戰線に出で滹沱河の渡河戰に參加するに至つた。其間氏は連日泥濘の惡路に强行軍を續け時には泥濘馬腹に達し日は暮れかゝり征馬前まず人語らず疲勞困憊其極に達せし時にも氏は全身泥人形となり戰友を勵まし駄馬を勞はり分隊の中堅となり分隊長を輔けて分隊の前進に貢獻し克く堅忍持久衆の模範となつた。十月九日より翌十日に亘る石家莊附近及正太線の戰鬪に於ては所屬中隊は城子坮井陘舊關附近の敵陣地の攻擊に參加したが氏は敵彈雨飛の中に第三分隊の照準手として正確迅速なる操作に依り適切有效なる射彈を浴びせて敵を壓倒震駭し以て中隊長の射擊指揮を容易ならしめた。

同月十四日正太線上の天險娘子關の堅壘を攻擊するや氏の所屬第三分隊は相田少尉の指揮下に獨立小隊となり同方面に派遣せられたる支隊に配屬され午前三時三十分舊關より行動を起したが氏は連日の疲勞をも意とせず率先難局に當り未明の間に娘子關南方約三粁の高地中腹に放列布置を完了した。やがて午前六時天明と共に娘子關西南方高地の敵に對し攻擊を開始したが敵亦我れに應戰し彈雨切りに身邊に飛來すれど氏は泰然自若常に正確迅速なる照準を以て猛射を浴びせ僅かに二十分間にして此敵に徹底的の打擊を與へ之を潰走せしめ以て隊

の攻撃に至大なる援助を與へた。次で小隊は更に前方山上に陣地を推進せんと其準備に取りかゝつた折しもあれ突如四周より敵襲を受け友軍歩兵部隊を初めとし所屬小隊の人馬亦死傷續出するに至つた。時正に日沒頃にして而かも峨々たる山地内の行動は意の如くならず絶體絶命の窮地に陥つたが氏は從容騒がず速かに照準を完了し群がり襲ふ敵に猛射を加へて打のめし獅子奮迅と勇戰中憎くや敵彈飛來氏は上腹部に盲貫銃創兼右鼠蹊部貫通銃創を受け玆に戰友數名と共に壯烈なる戰死を遂げた。氏の勇戰奮闘は敵の集中火を自己身邊に引受け支隊全般の戰闘動作を著しく容易ならしめ午後七時頃敵を撃退するに至つた。

氏や夙に忠君愛國の誠精溢し不斷に涵養し得たる信念は既に生死を超越し而かも百練々磨の武技精到を極はめ將兵の信頼特に厚かつた。果然食ふに食なく泥濘の難路に惱み不安の高粱畑を通過する等幾多の辛酸に遭遇するも毅然として之を克服し敵彈雨飛而かも重圍の中に從容として支隊の骨幹となり其全威を振うて玉碎した。正に是れ皇軍砲兵の本領を發揮して遺憾なく又一般軍人の龜鑑たる者と謂ふべきである。今や其壯容に接し得ざるは痛惜禁じ得ずと雖も氏の功績たるや皇軍戰史に輝きて不朽の芳名を留むべく又不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尚も皇國を護り又一家の守護神となり其將來に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戰死の日砲兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍衛生兵上等兵勳八等功七級　佐藤好

責任觀念旺盛悲慘なる戰況下に活躍せる衛生兵

氏は長野縣下高井郡瑞穗村の人にして父を浦治母をむめじと云ひ大正五年一月三日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚謙讓にして孝心深く又妹等にもやさしく責任觀念旺盛にして村内の信望を受け模範青年として囑目されて居た。昭和五年三月瑞穗小學校高等科を卒業し更に昭和十一年三月瑞穗青年訓練所研究科を卒業した。昭和十二年一月徵兵として松本歩兵聯隊へ入營し同年七月衛生兵一等兵を命ぜられた。

支那事變起るや遠山部隊に屬し關中隊の衛生兵として勇躍北支戰線への征途に就いた。斯くて九月上旬北支へ到着し京津地方に蟠居せる敵を驅逐しつゝ永定河々畔に進出した。其間隆暑に堪へ飢渴を忍び又泥濘の難行軍を續け疲勞甚しかりしにも拘はらず氏は志氣益々旺盛にして常に中隊内の各小隊を見まわり適時適切に軍醫に連絡して衛生業務に盡瘁し以て兵員の保健上大なる貢献をなした。次で九月十六日所屬中隊が琉璃河々畔塡頭鎭附近の陣地を攻撃するや氏は彈丸雨飛の中を馳驅して死傷者を搜索し迅速に傷者の手當をなし又死傷者の搬送に任ずる等涙ぐましき奮闘努力を拂ひ一隊將兵の感謝感激を受けた。

九月二十一日所屬中隊は大冊河々畔黄村附近の陣地攻撃に於て所屬大隊の左第一線となり正午より攻撃を開始したが敵は大冊河の大障碍及び其南岸の地形を巧に利用し頗る堅固なる防禦陣地を占領して居た。即ち南岸には水際障碍物を始めとし陸岸には鐵條網水濠を張りまわし又所々に地雷を埋沒し村落は其圍壁家屋を利用して銃眼を設け附近の丘にはトーチ

カ式の掩蓋陣地を設けて居た。而して之等の陣地を死守する敵は支那中央軍數師團にして各種銃砲火器を配備し相關聯して到る處に十字火を浴びせ得る如く周到綿密なる陣構へであつた。斯かる堅陣に飛込む皇軍は素より相當の損害を覺悟せねばならなかつた。あゝ歩一歩虎口に近づきつゝあるのだ、氏は死傷者の續出を豫想しつゝ敢然として所屬中隊の第一線部隊に跟隨した。果然轟々たる迫擊砲彈。嵐の如き小銃機關銃彈の雨は十字を切つて射注いで來た。忽ち我が中隊にも戰死傷者を續出するに至つた。氏は彈雨を冒して戰場を駈けめぐり死傷者を救護介抱した。其崇高なる責任觀念たるや既に生死を超越して居た。所屬部隊は晝間の攻擊は徒らに損害を大ならしむるに過ぎざるを考慮し竟に攻擊を中止し午後一時三十分には部隊を集結し薄暮を期して攻擊するに決した。斯くて同日午後五時三十分攻擊再興必勝を期して猛攻に次々猛攻を以て肉薄した敵亦必死の防戰に努め再び鼓に悲壯凄慘の戰況を現出するに至つた。氏は其間從容自若傷者の救護に目覺ましき活躍を續けて居た。あゝ悼しきかな此時敵機關銃の猛射を浴び腹部に盲貫銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。

あゝ氏や天性溫良にして慈愛心横溢し而かも事に臨むや責任の命ずる處水火をも辭せざるの概があつた。果然聖戰に臨むや如何なる艱難辛苦も如何なる劍電彈雨の中にも唯々君國の爲に淸く身命を捧げ切つて我が身あるを知らなかつた。一隊將兵の信賴と敬愛が一身に蒐まりしも蓋し偶然ではなかつた。斯かる至誠天地を貫く勇士を表ひしは眞に哀悼痛惜に堪へない。されど氏の功績は天晴れ衞生兵の龜鑑として皇軍戰史に輝くべく其芳名は後世に傳へて軍民の鑑たるべく其不滅の英靈は護國の神と仰がれ其神靈は尙も皇國を守護し又一家の多幸繁榮の爲に限りなき佑助を垂るゝであらう。

氏は戰死の日衞生兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　菊池淸七

重傷を負ひつゝ奮鬪を續け遂に頑匪を擊破して北滿の華と散る

氏は靜岡縣加茂郡岩科村の人にして父を伊助母をしかと云ひ大正四年九月十五日に生れ未だ獨身であつた。性溫良實直にして情義に敦く忠實業に服し常に責任を重んじ事に臨みては沈勇果斷であつた。昭和六年三月岩科高等小學校を卒業し其の後は家庭に在りて家業に從事しよく孝養を盡して居た。同十一年三月現役志願兵として滿洲獨立守備隊に入營し關部隊に編入せられ克く軍務に精勵し成績亦良好にして上下の愛敬を受けて居た。氏の所屬中隊は同年五月以來綏化に駐營し同地方の警備に任じ翌十二年四月よりは錢驛に移駐して同地方の警備に服して居た。

同年十一月一日以來氏は干泥隊長の指揮せる偵察隊の一員として小興安嶺内の匪賊根據地の搜索に從事し同月十一日其の目的を達し歸營の途に就いた。當時綏南線測量隊及其の掩護部隊たりし友軍眞鍋小隊も小興安嶺内に任務遂行中であつた。所屬偵察隊は歸營の途上午前九時頃山本掩護隊の位置に到着せる時眞鍋小隊は同日朝五時半頃より匪賊約二百名の來襲を受けて死傷者を出し剩さへ無線電信機をも破壞せられたるの情報に接し直ちに之れが救援の爲め急進するに決し波狀の山地に强行軍を行ひ午後五時半頃漸く眞鍋小隊の宿營地に到着した。幸にも眞鍋小隊は敵匪を擊退したる後にて同夜は其の地に一泊した。然るに翌十二日に至り關部隊長より「干泥守備隊長は現在の隷下部隊及眞鍋小隊並に鐵驪より急進中なる笠柄小隊を併せ指揮し匪團を求めて之を擊滅すべし」との命令を受領した。玆に於て干泥討伐隊は十三日迄に諸種の準備を完了し且附近の匪情搜索に努めた。氏は笠柄小隊第二分隊の輕機關銃手を任命された。翌十四日討伐隊は午前八時宿營地出發匪團の存在豫想地域たる石道河子に向ひ前進し午後二時半頃石道河子入口の岩山に差かゝりし處匪團の狼狽しあ

ゝを認め直ちに戰鬪を開始し撃滅に努めた。敵はあわて乍らも防禦配備に就き我が軍に對し亂射亂撃を浴びせて來た。氏は分隊長の命に從ひ沈着豪膽にも敵の右側方面に肉薄し岩上の要點に據り我が右翼小隊方面に對し猛射中の匪賊に對し熾烈なる火力を以て之を制壓し匪賊の射撃萎微するや氏は敢然分隊の先頭に立ち岩山を攀ぢ登り中腹に達した。此の時匪賊は氏の輕機分隊を目がけて集中火を差し向けて來た。所屬分隊は其の場に射撃陣地を占め敵の第二線陣地に對し側射中午後三時半頃戰友藤井射手は不幸にして西側突角の敵匪より狙撃を受け打ち斃れた。氏は直ちに之に交代し射撃を繼續せんとする其の瞬間又もや匪彈飛來して氏は右肩部に重傷を受けた。併し豪氣の氏は分隊長及小隊長の後退命令に對しても「大丈夫です」と尙も奮鬪を續け敵に大なる損害を與へたが出血甚だしく午後四時頃萬歳の一語を名殘りとし壯烈なる戰死を遂げた。然かし所屬隊は氏等の勇戰奮鬪に依り其の後間もなく敵匪に殲滅的打撃を與へ之を潰亂敗走せしむるに至つた。

氏は鄕に在りては質實剛健の良民であり出でゝ軍務に服するや忠實熱誠の良兵であつた。而かも常時不安の情勢下に日夜警備の重任を完うして居たが支那事變勃發の前後より不逞の共匪は抗日反滿の兵匪と合流して滿洲の治安並に支那大陸に作戰する皇軍の背後を脅威すべく蠢動した。而して氏等の警備地域は其不逞匪の巢窟であつた卽ち氏等の警備たるや支那事變と密接不可分の重任であり又對蘇關係の尖鋭化しありし當時としては愈々其の重責を加へられたのであつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　北澤五十一

大冊河畔黃村の敵陣に突入忽ち敵數人を刺殺して散華す

氏は長野縣植科郡坂城町の人にして父を鶴之助母をひでと云ひ大正七年二月五日に生れ未だ獨身であつた。五歳にして早くも兩親に死別し爾來從兄石井忠幸氏夫妻に扶養せられて成人した。資性實直豪膽にして氣慨に富み事に當りて果斷であつた。昭和七年三月泉田小學校高等科を卒業し爾後石井家に在つて家業を手傳ひ同十二年一月十日十九歳にて現役志願兵として松本歩兵聯隊に入隊し熱心勉勵成績良好にして下士官志願を爲し採用せられ第一期檢閲後は同隊下士候補者教育隊に於て其の教育を受けて居た。

昭和十二年七月支那事變起るや間もなく遠山部隊に編入せられ坂田中隊小銃手として九月勇躍北支に向つて征途に就いた。北支上陸後所屬隊は早くも九月十六日南泊附近の敵を撃攘し之を追撃して翌十七日には大石橋涿縣附近の敵を攻撃した。此の時氏の小隊は終始第一線に立ちて炎熱尙灼くが如く而かも大雨出水後の泥濘膝を沒する浸水地帶に於て彈雨を浴びつゝ困苦を排して勇戰奮鬪し中隊の戰勝に大なる貢獻を爲した。

あゝ兎角人目を牽き難き廣漠たる北滿警備寔に緣の下の力持の役をなせるものであつたが氏は克く默々として其の重責を果たし惜しくも小興安嶺の山麓に尊き人柱となつた。今や其の壯容に接すべくもないが氏の功績芳名は不朽に皇軍戰史に牢記せられ不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

續いて所屬隊は保定大會戰の要衝たる大冊河々畔黄村附近の敵堅陣を攻撃する事となつた。大冊河は幅七八十米水深一米以上に及び敵は此の大障碍を前にして其の對岸高さ五米以上に及ぶ崖壁上に三線に亘り數ヶ月以上を費して構築し敵が難攻不落と誇れる堅壘であつた。所屬部隊は二十一日午後六時より行動を起し大冊河を渡河して正面より敵の陣地に向ひ氏の屬する坂田中隊は敵陣奪取後南上坎方向に進出すべき特別任務を以て大隊と離れ獨立して攻撃することゝなり午後六時より行動を起した。然るに對岸崖壁上の敵は我が前進を知ると共に迫撃砲機關銃等を盲打ちに亂射し來たが中隊長以下一意猛進河岸に達し我が援護射撃の下に河中に飛び込んだ。水深胸に達し動々もすれば流されんとして戰友互に相扶け篠つく雨の如き敵火の中を渡渉し我が死傷相次いで生ぜしも全員死力を竭し遂に對岸にとりついたが敵の正面射斜射愈々熾烈を極はめし爲め中隊は躊躇せず敵陣に突撃を敢行した。此の時氏の所屬清水小隊は小隊長を先頭に敵の據點凸角部に突入し奮戰格闘縱横に敵を突きまくり氏は星野曹長と共に突入忽ち敵數名を刺殺射殺し逃ぐる敵を追つて掃蕩しつゝ陣地後端に進出せしに無念敵の一彈は氏の右眼上額部に命中して打ち倒れた。氏は手當の上暫くして來着せる衛生隊に收容せられ所屬部隊は息つく暇もなく續いて敵の第二第三線陣地を猛攻撃して敵が堅壘として誇りたる要衝黄村陣地も同日遠山部隊の攻略する所となつたのである。而して同隊は此の戰に於て武功拔群として所屬兵團長より表彰狀を授けられた。

氏は衛生隊に收容後逐次後送せられ大阪陸軍病院に於て厚き治療を受け右眼は竟に失明せるも經過良好にして死の五日前十一月一日には石井忠幸氏に細々と手紙を認め得た程であつたが容態革まり十一月五日遂に聖戰の華と散つたのであつた。

氏幼にして兩親に死別し幼少の頃は强情にして石井氏夫妻も持て餘す事度々あつたとの事である然かし長ずるに及び性質も漸次温厚となり石井氏夫妻に父母の如く仕へ氏の絶筆たる十一月一日の手紙にも「母さん(石井氏の母の事ならん)にも餘り心配せぬ樣に謂ふて下さい御國の爲め負傷したのですから眼の一つや二つなくなつても何も悔ゆる要はありません戰死した人も多いですからね。自分もモット大きな働きをして戰死したかつたのですが不幸にも負傷してしまひ全く戰友に申譯がないと思つて居ます。村長樣始め皆樣に色々心配して頂きましたとのこと不具な體で手紙も書けませんから兄上樣から宜敷御禮申上て下さい。姉さんにも宜敷本家や親類の皆樣にも宜敷。」と書いて居る以て氏の優しき心根が察せらるゝ次第である。而して十九歳にして現役志願を爲し軍隊に入るや熱心精勵良成績を擧げ下士官候補者となり大に將來を囑望せられて居たが享年僅かに二十歳にして保定會戰黄村の一戰に華と散りしは洵に痛惜の極はみである。然かし士の戰場に臨むや素より生還を期せず。氏や其の肉體は亡びしも其の赫々の武勳は燦として皇軍戰史に輝き其の英靈は不滅に生き護國の神と祀られ神靈尙も皇國を護り一族の前途に加護佑助を垂るゝ軍であらう。

因に氏は四兄一姉あり其の一兄は海軍志願兵として現に軍艦八雲乘員として活躍中である。

氏は戰傷死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　北林弘

勇猛なる小銃手、敵の逆襲を阻止し舊關奪取の端を拓く

氏は三重縣一志郡高岡村の人にして父を廣吉母をぬいと云ひ大正五年一月一日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚篤實にして義務心厚く諸事着實熱心且不屈不撓の氣慨を有し村内の模範青年として信望極めて厚かつた。昭和五年三月高岡小學校高等科を卒業し其の後は家庭に在りて家業に從事する傍ら同村青年學校へ通學し同十一年三月同校卒業同年十二月現役兵として大邱歩兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵し上下の愛敬を受けて居た。

支那事變起るや同十二年七月鈴木部隊に屬し佐伯中隊の小銃分隊員として勇躍征途に就いた。北支到着後は長辛店に於て軍の集中掩護に任じ晝夜兼行警備の重任を果たし九月十五日琉璃河々畔の陣地攻撃には右第一線小隊火線分隊の散兵として戰の猛火を物ともせず最も勇敢に奮闘して小隊戰闘に寄附せる所多く爾後敗敵を急追し石板山、方須橋、高蒋村及望都附近の戰闘を經て十月上旬沙河の線に進出した。氏は其の間尖兵として路上斥候となり或は小隊長の傳令勤務に或は夜間の歩哨勤務に連日連夜に亘り不眠不休の活躍を續け續いて滹沱河の敵前渡河に際しては小隊長の命を受け猛火の中を物ともせず各分隊の連絡に任じ集結に關する小隊長の命令を迅速確實に傳達する等小隊長の戰闘指揮を容易ならしめ又追撃に方りては克く分隊長を補佐し分隊の中堅となり勇敢積極的に行動し十月十三日より正太線方面へ轉進した。

十月二十二日娘子關の堅陣を撃破するや同夜至嚴なる警戒勤務に服し翌二十三日所屬部隊は舊關附近の敵陣地を攻撃するに至つた。所屬中隊は省境陣地の一鎖鑰たりし一〇六〇高地の堅壘を奪取すべき命令を受け二十三日午前三時より攻撃を開始した。此の地は岩石重疊の山岳地帶にして敵は此の天險を利用して永久陣地を構築し難攻不落の堅陣を誇つて居

た。我が軍は敵の銃砲火を浴びつゝ此の天險に攀ぢ登らねばならぬ故彈藥の補給も思ふに委かせず其の惡戰苦闘たりしや蓋し想察に餘りありと謂はねばならぬ。されば此の天險に據る者は古來未だ曾つて敗北せる例がなかつたのである。氏は此の時第二小隊第一分隊に屬し中隊の左第一線として參加したが敵は文字通り十字の銃砲火を雨霰の如く射注ぎ來り我が軍の損害は刻一刻と増大した。併し氏は泰然自若克く分隊長の命令指示の如く活躍して歩一歩と敵陣地に肉薄した。更に夜襲の爲め斥候の一員として選拔せられ午後六時より行動を起し敵陣地の至近距離に挺進して剛膽機敏に敵情地形を捜索し貴重なる資料を提出し爾後に於ける中隊戰闘に多大なる便益を與へた。午後七時二十分中隊は愈々夜襲決行の爲め前進を起した。氏は所屬小隊を誘導し敵陣地の一角たる高地北端に於て壯烈なる手榴彈戰を交へ遂に敢然突入して之を占領確保した。所屬分隊は最右翼分隊であつたが氏は右前方の警戒を命ぜらるゝや熾烈なる敵火を物ともせず警戒中敵は屢々逆襲を反復して來た。蓋し此の高地は敵の爲めには死命を制せらるべき重要地點であつたからである。氏は毎回逸早く敵の逆襲を發見し最迅速に記號を以て之を小隊長に報告し機を失せず應戰せしめた。午後八時二十分頃約數百名の敵が勢鋭く逆襲して來た。氏は之を報告すると共に勇敢にも其の先頭を目かけて突入し敵兵二名を刺殺し續いて格闘中敵の手榴彈の爲め右頭部右前膊右上下腿部等數ヶ所に爆創破片創を受け壯烈なる戰死を遂げた。所屬小隊は氏の勇戰奮闘に依り機を失せず此の敵を撃退し中隊は翌二十四日午後五時三十分主陣地に突入し同四十分完全に之を占領確保するに至つた。

氏や鄉に在りては一村の模範青年たり出でゝ軍に從ふや至誠一貫軍務に精勵し克く軍人精神に透徹し武技自ら恃む所あり自づから上下の信望を受けて居た。果然聖戰に臨むやあらゆる困苦缺乏に堪へ剛勇機敏克く天險を攀登して敵陣地に肉薄し決死敵情地形を搜索し慧眼克く敵襲を發見して友軍に戰備を完了せしめ遂に難攻不落を誇りし堅壘奪取の端緒を拓いた。洵に是れ皇軍歩兵の精鋭にして一般軍人の模範たる者であつた。斯かる勇士を喪へるは眞に痛歎愛惜の情を禁じ難きも氏の赫々たる武勳は天晴れ皇軍戰史に輝き不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　岸本貞治

障碍物破壞班員、胸部に一彈を受け尙奮鬪す

氏は兵庫縣加東郡下東條村池田の人にして父を伊太郎母をたつと云ひ大正五年二月二十一日に生れ未だ獨身であつた。性快活敏捷にして孝心深く克く上長を尊敬し公衆に親切に特に慈愛心に富んで居た。昭和五年三月下東條小學校高等科を卒業し同縣三木町岩田正一方店員として住み込み業務の傍ら同町青年學校へ通學し部落委員長に推擧せられ公共事業にも盡力し尙其間同町商工實修學校の課程二ヶ年を卒業して居る。昭和十二年一月現役兵として姫路歩兵聯隊へ入營し成績優良にして上等兵候補者を命ぜられ同年七月一等兵に進級した。

支那事變起るや沼田部隊に屬し昭和十二年八月中旬勇躍征途に就いた。八月三十日三間房附近の戰鬪には第三中隊小銃手として彈丸雨飛而かも泥濘の中にも拘はらず第一線の警備に任じ次で砲兵觀測班に任じ完全に任務を遂行した。

爾後唐官屯附近の戰鬪を經て九月九日馬廠附近丁莊の敵陣地攻擊に方りては當初警備勤務に服したが後ち突擊時に際しては第二小隊第三分隊長の指揮下に勇躍第一線に跟隨し第一線部隊の突入後は適時所命の地點に進出して戰果を擴張し續いて猛烈に之を追擊し之に大なる損害を與へて以て友軍の志氣を鼓舞し引續き九月十七日沙官屯の黎明攻擊及び同月十九日雪官屯の攻擊に參加し其間或は警戒勤務に或は傳令勤務に服し終始勇敢機敏に行動し所屬隊の戰鬪に寄與せる所多大であつた。

所屬中隊は以上各地の激戰に多數の將兵を失つたが九月二十一日午後九時行動を起し馬落坡附近の敵陣を攻擊する事になつた。氏は第二小隊長代理西本少尉の指揮下に小銃手として參加した。馬落坡は敵の重要據點であり陣地前は水濠地帶を成し其陣地には數多の掩蓋機關銃を初め各種火器を配置し頗る堅固に防禦設備を完了して居た。されば午後十時頃には我が將兵は軍旗に訣別し悲壯の決意を以て夜襲の時刻を待つて居た。あゝ午後十一時終に夜襲決行の時刻が到來した。折柄中秋の月照り渡り夜襲に適せぬ夜であつた。だが一般の戰況上躊躇を許さなかつた。敵は我が軍の近接するを認め全線火蓋を切つて驟雨の如く猛火を射注いで來た。氏は障碍物破壞班の一員として泥濘膝を沒する水濠地帶を率先勇敢に前進中敵彈飛來胸部に受傷し打倒れたが豪氣の氏は尙も屈せず射擊を以て敵を制壓し他兵の行動を掩護しつゝあつた。愴くや此時第二の敵彈飛來頭部に貫通銃創を受けかすかにも萬歲の一語を遺し午前二時五十分壯烈なる戰死を遂げ

た。本戰闘は氏の所屬中隊のみにても將校以下六十餘名の戰死傷を出したる苦闘であつたが氏等の勇猛果敢なる奮闘に依り遂に當面の頑敵を屠り翌二十三日午後十時には豆店に轉進爾後の作戰を有利ならしむるを得た。

氏や鄉に在りては孝悌仁義一鄉の模範となり又兵營生活に入るや誠實克く其手腕を發揮して上等兵候補者に擧げられ上司の信賴厚く而して今次聖戰に參加するや沈勇果敢殊に其最後戰場たりし馬落坡の攻擊に障碍物破壞班の一員に選ばれしが如き如何に上司の信賴の厚かりしかを窺ふ事が出來る。而して其最期の奮闘たるや氏の面目躍如たるものありて寔に皇軍歩兵の精鋭であつた。あゝ聖戰の半ばにして玉碎せるは轉た愛惜に堪へないが氏の功績は皇軍戰史に牢記せらるべく其芳名は後世に謳はれ其英靈は不滅に生きて護國の神となり尙も皇國並に遺族の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　岸　博

燒窰盆の激戰に獨斷敵の側防を制壓し戰勝の途を拓く

氏は鳥取縣日野郡石見村の人にして父を政藏母をサトと云ひ大正六年一月一日に生れ未だ獨身であつた。責性溫厚篤實にして孝心深く又責任觀念に富み村內の模範青年として囑目されて居た。昭和六年三月石見小學校高等科を卒業し其後は家庭に在りて父母を扶けて家業に精勵し傍ら同村青年學校へ通學し所定の課程を修了し同十二年一月現役志願兵として松江歩兵聯隊へ入營し同年六月には選ばれて千葉陸軍歩兵學校へ分遣され熱心軍務に勉勵し七月精勤章を附與せられた。

支那事變起るや原隊へ歸還の上八月上旬福榮部隊に屬し揚井中隊の小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて北支到着以來降雨泥濘の難行軍を續け津浦線に沿ひ南進し八月下旬夏庄に據る敵を一蹴し九月五日燒窰盆の堅壘を攻擊するに至つた。此陣地は馬廠陣地帶の緊要なる一角をなし敵は事變數ケ月前より防禦工事を施し陣地の前面を汎濫地帶として陣地直前にも馬廠河より水を引きて水濠となし守兵約一千を以て必死の防禦を企圖して居た。當時敵の第二十九軍第三十八師は馬廠河南北地區に於て戰線實に八里に亘りし蜿蜒たる陣地を占領し難攻不落と豪語し就中燒窰盆は其一骨幹をなせる堅固なる陣地であつた。

氏の所屬沖田大隊は正午唐官屯に集結の後氏の所屬たりし揚井中隊を右第一線に第二中隊を左第一線として展開し友軍砲兵の砲擊開始と共に午後三時を期し攻擊前進を起した。氏は第二小隊第二分隊に屬し中隊の右第一線となり一進一止敵の彈雨を冒しつゝ躍進し敵前三百米の線に達するや敵の小銃機關銃並に迫擊砲の猛射愈々盛となつたが氏は神色自若全身泥人形となり高粱の泥畑を匍匐しつゝ敵前二百米に近迫した。友軍砲兵の砲擊は着々敵陣地の要點を破壞し又頑敵を制壓しつゝありしも敵亦全線の銃口火を吐きつゝ我が第一線を猛射し來り死傷續出するに至つた。やがて日沒となつたが敵の猛火は暫しも息まず更に堤防を決壞して水深を增加し遂に頸部に達する所さへ生じたが氏は之に屈せず沈着正確なる射擊を以て敵に少からざる打擊を與へた。午後七時頃突如左側方に敵の自動小銃現はれ猛威を揮ふや獨斷側方に進出して之を猛射したるに氏も亦狙擊せられて負傷した。豪氣の氏は之を意に介せず奮戰し遂に敵自動小銃を制壓して中隊の前進を容易ならしめた。併し此間氏は更に身に數彈を受け再び

起つ能はずして後方に收容され手厚き治療看護を受けたが出血多量の爲翌六日午前竟に戰場の華と散つた。然かし所屬中隊は氏等の勇戰奮鬪に依り其後の戰況有利に進展し頑敵を粉碎して日章旗を翻へすに至つた。

氏や至誠一貫鄕に在りては一村の模範青年たり軍に從ひては又衆兵の模範として上下の信頼厚かつた。果然聖戰に參加するや幾多の困苦缺乏に堪へ常に分隊の中堅となり克く分隊長を輔佐し愈々難局に遭遇するや不屈不撓只々君國の爲淨く身を捧げて我身あるを知らず其精練なる射擊技能を發揚して要點の頑敵を制壓し又獨斷戰機に投じて敵の側防機關を猛射し所屬中隊全般の攻擊動作を容易ならしめた。寔に是れ良兵良民の龜鑑とすべき所聖戰の半ばにして此精悍なる勇士を喪ふ眞に痛惜を禁じ得ずと雖も氏の赫々たる武勳は天晴れ馬廠戰史に輝きて其芳名を傳へらるべく其英靈は不滅に生きて護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り又一家の前途に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　岸本信一

精悍なる小銃手勇戰奮鬪して安仁衞の華と散る（壯烈）

氏は島根縣周吉郡磯村の人にして父を三治郎母をセキと云ひ明治四十一年三月二十三日に生れ妻サト子との間にタケ子シゲ子、清一の三愛子を擧げた。資性温厚志操堅確にして孝心殊に深く又義俠心に富み曾て海軍機が海上に墜落するや自家用モーターボートを以て怒濤を乘り切り之を救援して表彰された事もあつた。大正十二年三月磯村下西小學校高等科を卒業し又昭和三年三月には同村實業補習學校を卒業したが小學校高等科時代より父を輔けて半農半漁業に從事して居た。

昭和四年一月現役兵として松江歩兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵し特に射擊及銃劍術に熟達し直屬上官より前後八回に亘り賞狀を授與せられ翌五年七月歸休除隊の時には善行證書を附與せられた。

支那事變起るや間もなく應召福榮部隊に編入せられ揚井中隊の小銃手として勇躍征途に就いた。斯くて八月北支に到着以來降雨泥濘飢渴の難行軍を續け津浦線に沿ひ敵を壓迫し九月三日夏庄の敵陣地攻擊に當りては率先小隊長と共に敵陣地に突入し得意の銃劍術を以て多くの敵を斃し翌々五日燒窰盆の戰鬪には中隊豫備隊として又馬廠附近の戰鬪には馬廠河附近の掃蕩戰に參加し滄縣附近の戰鬪には九月十七日小劉金庄の敵陣地を攻擊し其突擊に方りては小隊長と共に突入して勇名を馳せ更に同月二十日李家瑪頭の攻擊に際しては所屬中隊の右第一線小隊に屬し敵彈雨飛の中を物ともせず躍進又躍進常に正確迅速なる射擊を以て敵を壓倒し突擊に際しては影の形に副ふが如く小隊長と共に率先敵陣地に突入し又敵の逆襲を受くるや此支那兵めがと沈着にして正確迅速なる射擊を以て數多の敵兵を射殺し難なく之を擊退した。

其後所屬隊は德縣方向に向ひ敵を追擊したる後興濟鎭の守備に任じ十月十三日より平原城の攻擊に參加するに至つた。當時德縣附近に敗戰せる敵は平原北方の黃河涯口の既設陣地に據り列車砲迫擊砲を以て挑戰し十月四日未明には兵二千を以て二十里舖徐莊等我占領部落に向ひ逆襲を行ふ如き活潑なる行動を見せたが我赤柴部隊の勇戰に依り殲滅的打擊を與へられて平原城一帶の既設陣地に遁入し其主力部隊と共に更に頑强なる抵抗を企圖して居たのである。所屬中隊は此の敵に

對し先づ其の警戒陣地の一角を奪取すべき命令を受け午前八時四十分行動を起し午後より攻撃を開始した。氏は中隊の右第一小隊に屬し勇躍射撃を以て敵を壓倒し次で果敢なる突撃に依て之を占領し其夜更に何堂の敵陣地を夜襲するに方りては中隊長と共に之に突入して所命の警戒陣地を奪取した。引續き平原城の主陣地に對する攻撃を準備するや氏は選ばれて斥候要員となり障碍物特に地雷位置等を偵察して中隊長の戰鬪計畫を容易ならしめ愈々平原城を攻撃するや敵陣深く進入し果敢なる手榴彈戰に依り北門を占領之を確保した。此剛膽勇敢なる氏の行動は本戰鬪戰勝獲得に重大なる素因を與へたものであつた。

平原附近の戰鬪に勝利を得たる所屬隊は其後鳴雞店附近の敵を一蹴し黄河北岸地區の掃蕩作戰に移つた。而して所屬隊は十一月十三日安仁衞附近の敵陣地を攻撃する爲午後三時五十分行動を起し午後四時四十分より攻撃を開始した。所屬小隊は第一線となり逐次敵陣地に肉薄した。此時氏は嵐の如く烈しき彈雨を意とせず最も勇敢に行動し而かも正確機敏なる射撃に依り敵を壓倒しつゝ小隊の前進を捉進し遂に所屬小隊長が率先敵陣地に斬り込むや氏は小隊長を撃たすなと叫びつゝ飛鳥の如く續行し折柄手榴彈を投げつける敵を發見して手榴彈を以て渡り合ひ忽ち格鬪の上之を刺殺し更に小隊長に續いて敵陣地に突入して其一角を占領した。小隊長戰死と見るや分隊長を輔佐して群がり來る敵の逆襲を喰ひ止めたる其の一瞬時無念氏は正面より飛來せる敵彈の爲重傷を負ひ「岸本一等兵此地に戰死す　天皇陛下萬歳」の一語を名殘とし小隊長分隊長と枕を並べ壯烈なる戰死を遂げた。然かし所屬大隊は氏等の勇戰奮鬪に依り其後此敵を包圍して殲滅的の大打撃を與へ翌十四日午前七時輝く日章旗を城頭高く翻へすを得た。

氏や參戰以來突破戰線實に百數十里其間剛勇慧敏克く敵情を搜索し堅壘に突入するや必ず小隊長に隨ふ蓋し忠誠勇武にして武技亦卓越せる者ならでは能くし得ざる得である。而かも平素は温厚慈眼の模範兵であり眞に是れ軍人精神に徹底せる勇士であつた。あゝ斯かる有爲にして精鋭の士を喪ふ洵に痛惜哀悼の情を禁じ得ざるも氏が赫々たる累次の功績たるや北支戰史に異彩を放ちて芳名千載に傳へらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尚も皇國を護り又一家の守護神として遺族特に愛子等の前途に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　北岡忠文

挺身猛火を冒して手榴彈を投擲し小隊の苦戰を打開す

氏は京都市下京區東九條三王町の人にして父を光藏亡母をリュと云ひ大正五年二月一日生れで未だ獨身であつた。資性温厚宗教の念深く不屈不撓苦學力行の人にして衆人の賞讃せる所であつた。昭和六年三月大福尋常高等小學校を卒業し其の後苦學しつゝ同十年大阪市甲種此花商業學校を卒業し引續き大阪市佛教學院に入學同十一年三月同院を卒業其の後兵庫縣川邊郡小濱村光圓寺に僧侶として入門し同年十二月徴兵として大邱歩兵聯隊に入營した。

支那事變起るや鈴木部隊片岡隊に屬し第三小隊第一分隊小銃兵として昭和十二年七月十二日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後七月二十七日團河村附近の戰鬪に際しては所屬中隊は豫備隊として戰鬪に參加し翌二十八日南苑の戰鬪に際しては第一線部隊が敵陣奪取後第一線となりて敵を追撃し二十九日より三十一日に亘りては北平周邊の掃蕩及警戒に八月十九日より二十一日に亘る揚子崗の戰鬪に於ては熾烈なる敵火の下濁流を徒渉して勇戰奮鬪し更に九月十二日關古庄の戰鬪に際しては猛火の下分隊長の指揮下に連絡兵として活躍し十五十六日琉璃河々畔陣地の攻撃に於ては第一線となり勇敢に奮

戰し又敵の逆襲を擊退し九月二十三、二十四日高荊村及望都附近の戰鬪に際しては其の追擊戰に參加し又十月五日より十二日に亘る滹沱河の渡河攻擊及追擊戰に於ては再び第一線に在つて勇戰奮鬪し其の後娘子關及舊關鎭の戰鬪間は山岳重疊嶮峻の地に於て各種勤務に從事し十月二十九日より三十一日に亘る平定攻略戰に於ては尖兵の一員として活躍した。

十一月四日所屬大隊は太原東方二十里松塔嶺に宿營せしが翌五日午前五時突如後方部隊救援の爲め廣陽村に向ひ逆行を命ぜられた。此の時片岡隊は大隊の尖兵中隊となり東進すること約二里半恰も午後二時狗兒堰南方高地に達せし時斥候の報告に依り敵兵四、五百西進中なるを知り直ちに展開して不意に猛射を加へた。敵は一時狼狽したるも其の後逐次地際等を傳はりて續々小隊の左翼を包圍する如く前進し來つた。小隊の位置せる高地は中隊の左翼にある戰術上の要點なりしを以て一同一歩たりとも敵を近接せしむるなと勵まし合ひつゝ我も亦攻擊前進した。此の間氏は猛火の中を終始分隊の先頭に立ち匍匐前進を强行して敵に近迫した。而して小隊が敵前五十米に近迫せる頃敵の射擊殊に後方稜線よりする重輕機關銃の射擊は頗る猛烈を極め小隊は苦戰に陷り一時停止するの已むなき狀態となつた。氏は此の際我に最も危害を與へつゝある敵を求めて沈着剛膽正確なる射擊に依り逐次敵を斃しつゝありしも巧みに畑の階段を利用せる敵に對しては意の如く沈默せしむることが出來なかつた。そこで氏は手榴彈を以て敵を殲滅するに如かずとなし分隊長が「危ない」と注意せるも屈せず獨斷敢然として立ち猛火を冒して約十五、六米前進し手榴彈を投擲して敵兵若干を斃し直ちに其の位置に伏さんとせる刹那無念敵彈頭部を貫通し竟に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。時に午後三時三十分頃であつた。然し中隊は氏等の奮戰に依り遂に此の敵に多大の損害を與へて遂に潰亂せしむることを得た。

因に氏が戰地より發信せる書中「父上に言はれるまでもなく覺悟は十分です、不思議に朝な夕な苦しい時面白くない時何時も胸に念佛して居ります」とあり。

氏の戰場に臨むや不屈不撓長期に亘りあらゆる困難を克服し其の戰陣に立つや彈雨の下每戰勇敢に奮戰大に努め皇軍の威武を宣揚して遺憾なかつた。殊に狗兒堰の戰鬪に於ては獨斷挺身小隊の苦戰を救ふ。かくの如き行動は是れ素より氏が不屈の性格宗教の修養に基くとは云へ身命を君國に捧げ斃れて後已む忠誠の發露である。實に氏の遺せる赫々の武勳は千載の下靑史を飾り其の不滅の英魂は護國の神となり後世永遠に萬民に仰がれ其の神靈は遺族に尊き光と佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級　北中政晴

勇敢なる連絡兵、困難なる戰況下に任務を遂行し職に殉す

氏は島根縣東伯郡泊村の人にして父を龜治母をみつと云ひ大正二年四月十七日に生れ未だ獨身であつた。性溫良にして勤勉昭和二年三月小學校高等科を卒業し爾後家にあつて家業を手傳ひ昭和八年十二月現役兵として松江歩兵聯隊に入營したが直ちに滿洲警備部隊に屬して渡滿し嚴寒困苦の裡に屢々匪賊討伐に或は警備に從ひ滿洲國の治安維持に努め昭和九年

五月内地に歸還し一等兵に進み翌十年五月善行證書を附與せられ歸休除隊となり滿洲事變の功に依り勳八等に叙せられ瑞寶章を賜はつた。

昭和十二年八月支那事變のため應召福榮部隊に屬し揚井中隊の小銃手として北支方面の征途に就いた。上陸當時北支は近年稀なる豪雨により到る處出水泥濘に惱まされたが氏は志氣旺盛あらゆる艱苦を克服して強行軍を續け其の間津浦沿線の夏庄に於て敵は水深一米餘に達する汎濫地帶を前にして我兵軍の前進を阻止したが所屬隊は之を撃攘して馬廠に向つて前進した。此の攻撃に氏は第一小隊第一分隊小銃手として敵火と泥濘の中に勇戰克く其の任を完うした。

九月に入り我が軍は愈々馬廠攻撃に着手した。抑も馬廠は北支に於ける戰略上の要衝にして敵は馬廠河の障碍を前にし事變前より長日月を費し堅固に陣地を構築し今や敵第二十九軍第三十八師の精鋭を配置し必死の抵抗をなさんと待ち構へて居た。而して氏の所屬大隊は九月五日馬廠本陣地の一角を爲せる燒窰盆の陣地を攻撃すべき命令を受けた。茲に大隊長は揚井中隊を右第二中隊を左第一線として展開し先づ砲兵隊の射撃開始と共に攻撃前進に移つた。氏は第一小隊第一分隊に屬し所屬分隊は小隊の第二線分隊として第一線に跟隨し專ら比隣第一線たる第二小隊との連絡を命ぜられて居た。當面の敵兵力は少くも一千を下らず陣地前は高粱泥濘汎濫の大障碍を呈し敵彈は文字通りに十字火をなして飛び來り前進極めて困難であつた。然れども我が軍は一進一止彈雨の間斷を利用して躍進し泥土出水地帶を突破して敵前三百米に接近した。此の頃我が砲兵は敵の陣地要點に對し制壓射撃を實施中にして見る見る陣地の一角を破壞し土砂爆煙材料の飛散する光景物凄かつた。第一線歩兵は機を失せず躍進また躍進遂に敵前二百米に近迫した。氏は敵の猛射の中勇敢に出水地帶を跋渉し又高粱畑を匍匐して敵前二百米の堤防上に到着した。時に午後三時五十分であつた。此の時水深逐次增加し所々頸部に達する所もあり且敵の銃砲彈益々猛烈を極め一時第二小隊との連絡杜絶せんとするに至つた。此の時氏は小隊長の命に依り分隊の右に移動して第二小隊長と連絡を確保し且其の第六分隊と連繫して堤防線に進出した。敵の猛射は暫しも息まず爾後の前進困難となりし爲め所屬中隊長は同地に各個掩體を作らしめ更に前進の好機を待つ事にした。氏も亦高粱畑と堤防線の境界に掩體を構築し依然第二小隊長との連絡を確保し且右前方の敵狀監視に任じて居た。午後七時三十分頃右前方の自動小銃より俄然猛射を浴びせられ其の一彈の爲め氏は頭部に盲貫銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。

氏は義に滿洲事變に參加して功績を樹て散じて鄉に歸へるや謹嚴身を持し一家の中堅として兩親に孝養を盡し鄉黨の模範となつた。今次聖戰に臨むや勇躍率先克く分隊の中堅となり既往戰歴の體驗に基き適切に分隊長を輔佐し又馬廠附近の激戰に方りては選ばれて小隊の連絡兵となり歩行だに容易ならざる高粱の泥畑に又滔々たる氾濫地帶に終始敵彈の猛火に曝されつゝ任務を全うした。蓋し一死報國の至誠に燃ゆるの人にあらざれば能くし得ざる所である。斯かる忠勇の士を喪へるは痛惜禁ずる能はずと雖も氏の累次の勳績は天晴れ皇軍戰史に牢記せらるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　木村清次郎

孝子、克く勇戰して張家口攻略の華と散る

氏は東京市荒川區日暮里町の人にして亡父を常次郎母をひさと稱し大正四年十一月十一日生れで未だ獨身であつた。資性溫厚眞面目にして夙に孝行息子の名があつた。昭和三年三月日暮里第三小學校を卒業し直ちに東京市下谷區竹町寺久保好秀方に弟子入りして貴金屬及金屬一般の彫塑業を修め其の間一年間荒川區愛隣中學夜學校に通ひ勉學し昭和十一年一月現役兵として歩兵第三聯隊機關銃隊に入營した。所屬聯隊は同年五月守備の爲め滿洲に派遣せられ氏も亦同行し主として齊々哈爾附近に駐屯して警備に任じ翌十二年四月には多田討伐隊に屬し十日間に亘り龍鎭縣下に於ける匪賊討伐に參加した。

昭和十二年七月支那事變勃發するや間もなく氏は小林部隊に屬し機關銃手として出動し北支に到着するや直ちに天津附近の殘敵を掃蕩して警備に任じ轉じて武清開平附近を掃蕩して八月二十日所屬部隊が外長城線の敵陣地を攻擊するや氏の機關銃小隊は猪股准尉の指揮下に第一線歩兵第六中隊に配屬せられ午後一時より戰鬪は開始せられた。當時氏は第三分隊一番銃手として敵彈雨下する山岳地帶を勇敢に前進し克く分隊長の指示に從ひ沈着正確なる照準を以て遺憾なく機關銃の威力を發揚して我が歩兵の攻擊前近を容易し殊に突擊に際しては其の突擊點に穿貫的猛射を加へて突擊を援助し外長城線奪取に大なる貢献を爲した。

續いて所屬隊は息つく遑もなく張家口に向つて攻擊前進し氏の所屬大隊は二十四日土井子附近の敵を攻擊し薄暮之を擊攘し張家口に向ひ前進を續け夜十一時頃石柵の溪谷に差しかゝるや突如其の兩側高地より急襲的射擊を受けた。機關銃隊は直ちに射擊陣地を占領したる所忽ち右側方より敵は密集して夜襲して來た。機關銃隊は既に陣地に進入しありし爲め直ちに敵夜襲部隊に對し猛射を浴びせて之を薙ぎ斃し敵は竟に潰走した。然かし此の間機關銃隊は所屬大隊と連絡を失し銃隊は翌二十五日に亘り山を越へ谷を渡り多大の困難を冒して大隊に追及すべく前進した。當時將兵一同は連日困難なる山岳地帶に夜となく晝となく奮鬪の結果疲勞困憊其の極に達し給養は續かず水さへ得る事至難の狀況なりしが氏はあらゆる辛酸困苦を克服し危險を顧みず銃を搬送して前進し常に積極的に其の任務を完うした。斯くて二十五日午後六時頃に至るや再び敵と遭遇し其の二小隊ばかりの敵は銃隊の右翼を包圍前進して來た。氏は機敏にも獨斷直ちに其の場に銃を据へ迅速に射擊を開始した。之が爲め敵は前進を躊躇し多大の損害を受けた。此の時分隊は前方更に適當の位置に陣地を推進すべく前進し氏は將に銃を新陣地に据へんとする刹那惜しくも敵彈左胸部を貫通し氏は戰友に「皇國の爲めに死ぬのだ後を頼む」の一語を遺して名譽の戰死を遂げた。而して氏の死後間もなく銃隊は敵を擊攘し翌々二十七日張家口は遂に我が軍の有に歸したのであつた。

氏や郷に於ては夙に孝行息子と呼ばれて居たが入營後も僅かの手當を貯蓄し休日外出の際は必ず歸宅し其の都度母の好める食品時には味噌など迄買求めて母を慰めつゝ家計を助け近時稀に見る孝行青年であつた。古來忠臣は孝子の門に出づと謂ふが今次氏が戰場に於ける活躍は正に此の諺を裏書きするものである。噫聖戰の初期斯かる忠孝義烈の士を喪ひし事

は洵に痛惜の極みであり又其の母の心中を偲ぶ時惻隱の情忍び難きものがある。然かし其の孝行の士が臨終に際し「皇國の爲めに死ぬのだ後を賴む」の一語を遺し一言家事に及ばざりしは蓋し忠即ち孝たる信念の發露である。氏や早くも張家口攻略の花と散りしも其の武勳は赫々として戰史に輝き其の英靈は護國の神となり尙も皇猷を扶翼し奉り其の愛母の上に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　木村喜作

猛火を冒して傳令の重任を全うし砲隊の危急を脫す

氏は宮城縣牡鹿郡稻井村の人にして亡父を平作母をハジメと稱し大正五年十一月五日生で未だ獨身であつた。昭和六年三月眞野小學校卒業後專ら農業に從事し傍ら靑年學校に學んだ。資性溫厚にして眞面目な努力家であり又親に仕へ孝養怠りなかつた。

昭和十二年一月現役兵として仙臺步兵聯隊に入營し同年四月滿洲に派遣され濱縣に在つて酒井部隊に屬し治安肅正に從事中であつたが終始一貫軍務に勉勵し成績良好にして同年七月步兵一等兵に進級し且つ精勤章を附與せられた。

支那事變勃發するや酒井部隊渡邊部隊指揮機關の一員として勇躍征途に就き八月二十日より二十五日に亘る外長城線大平鈷及三間房附近の戰鬪には砲隊長傳令として參加し嶮峻錯雜せる地形剩さへ敵彈雨飛の狀況下に勇敢敏速に重要命令及通報の傳達に任じ以て砲隊長の戰鬪指揮を容易ならしめた。引續き二十六日より三日間に亘る靑運口附近の戰鬪に於ては砲隊長渡邊大尉の指揮する聯隊砲一門は右第一線中隊の攻擊に協力する爲第一線後方の山地に放列を布置したが該地は本道より約二千米離隔しあり途中地形嶮峻且錯綜しありて陣地進入の爲五時間を要せし難所にして砲隊長は彈藥補充の困難を顧慮し本道上にある彈藥小隊長櫻井曹長に速かに彈藥を補充すべき件並に之が誘導方を氏に命じた。氏は駈步を以て該小隊長の許に至り之を傳達し直に其彈藥補充隊を誘導し歸途に就いたが長城線の敵より發見せられ小銃機關銃並に迫擊砲より猛烈なる射擊を受けた。されど氏は先きに偵察し置きたる別路を利用し巧に敵の銃砲火を避けつゝ之を誘導し一人の負傷者をも出さず速かに補充するを得しめ何等の渋滯なく我が步兵砲の射擊を繼續せしめ爲に第一線中隊へ適切有效なる支援を與へ長城線占領の素因を作るに至つた。越えて九月上旬に於ける永嘉堡、天鎭、陽高聚樂堡附近の戰鬪同下旬に於ける大營鎭附近、引續き源平鎭附近の戰鬪に於て氏は常に砲隊長の許にあつて彈雨の下嶮峻を越へ沈着勇敢迅速に傳令勤務を遂行し以て其の指揮を容易ならしめ戰局をして有利に進展せしめた事は枚擧に遑なき程であつた。

次いで十月十三日より十五日に至る水油部落附近の戰鬪に於ては敵は健氣にも數次に亘りて逆襲して來た。就中十五日午前五時三十分敵步兵約四五百名は砲兵及機關銃支援射擊の下に谷地を利用して近迫し猛烈なる逆襲を試みて來た。此の時氏の所屬步兵砲隊長は砲隊援護分隊と共に逆襲し來る敵に猛射を浴びせて甚大なる損害を與へ之を阻止したが敵は地形を利用して我が右方に移動して來た。砲隊長は氏に命じて右前方高地に位置せる掩護分隊をして此の敵の迂回動作を阻止

すべき命令を傳達せしめた。分隊迄の距離は僅に二百米位なりしも地形嶮峻加ふるに敵砲彈は絶えず其の地區附近に落下炸裂し小銃機關銃彈亦霰の如く射注ぎ來り危險極りなかつたが沈着剛毅なる氏は毫も意に介せず勇敢にも其の猛火を冒し嶮峻なる山岳地隊を突破して確實に命令傳達を遂行し再び敵火を冒して砲隊長の許に無事歸還し「傳達終り」と復命した所復命終るや終らざる其の刹那不幸にして敵彈飛來氏の頭部を貫通した。流石豪膽なる氏も一語「無念」と叫び東方に手を差延べ何事かを口籠りつゝ竟に壯烈なる戰死を遂げた。時に午前七時であつた。併し氏の命令傳達の結果掩護分隊は直ちに敵の迂回隊に對處し遂に迂回企圖を挫折せしめ延いて敵主力も潰走するに至つた。思ふに死力を以て任務を遂行せる氏の功績は實に本戰勝に大なる素因を與へたものであつた。

噫家庭にありては孝郷に於ては衆の模範となり軍に從ひては死を以て忠を盡す氏の生涯こそ實に日本精神を遺憾なく發揮せるものにして殊に劍電彈雨の死線に立ちて尙旺盛なる責任觀念と犧牲的精神とを發揮せる氏の偉大なる信念と實行力とは正に軍人の鑑とし皇國戰史を飾るものである。今や其人空しと雖も其名は千載に芳ばしく其英靈亦永世に生き尙も皇國並に一家の將來に尊き加護を與ふる事であらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　菊地代三郎

彰德城西門一番乘りの決死隊員竟に地雷に殪る

氏は群馬縣新田郡强戸村の人にして亡父を國次郎母をとらと云ひ大正三年七月二十六日生で未だ獨身であつた。資性眞面目にして勤勉進んで難局に當るの美風があつた。昭和二年三月强戸尋常小學校を卒業し引續き山田郡廣澤補習學校に入校した。其在校間は無缺席の爲め皆勤賞を又運動競技の優等賞等を附與せられた。更に又入營在隊間は特に射擊に長じ競技に於ての成績優秀の爲屢々賞狀を與へられてゐる。

支那事變起るや昭和十二年八月應召森田部隊糸日谷中隊に編入せられ同月十四日勇躍征途に就いた。北支戰線到着後九月十四日永定河畔股家舖門村附近の戰鬪に於ては中隊長の指揮下にありて永定河の渡河攻擊並に門村附近の夜間戰鬪に參加し九月十五日拒馬河畔東茨村附近の戰鬪に際しては第一小隊長の指揮下にありて中隊の左第一線となり終始勇敢に戰鬪し十六日は望海莊附近の殘敵掃蕩に任じ十七日平漢線西側地區東管頭附近の戰鬪に際しては中隊の右第一線小隊となりて奮戰し殊に夜間には敵の追擊砲彈熾んに落下する中を東管頭に對し勇敢に夜襲した。又十八日より二十日に亘る平漢線西側地區高里店姥村附近の戰鬪及追擊に際しては克く困苦缺乏に耐へ果敢なる追擊を實施し二十一、二十二日大冊河畔黃村附近の戰鬪に於ては第一小隊長の指揮下にありて小曲城に位置し支隊の渡河を掩護し其後黃村附近の敵を攻擊し夜間は徹宵警戒に任じ數回に亘る敵の夜襲を擊退した。十月一日石家莊元氏順德附近の戰鬪に際しては渡河戰鬪に次で追擊並に殘敵掃蕩を實施し十六日より二十三日に亘りては磁縣及彰河々畔の追擊戰に强行軍を續行し困苦缺乏に耐へて敵を追擊し二十四日より三十一日に亘りては洹河橋梁の確保に任じ東西梁村の夜襲に參加し十一月三日の朝敵出擊し來るや中隊の右第

一線小隊として敵彈を冒し勇敢に戰鬪し三日より四日に亘る大坡及東八里店附近の戰鬪際しては部落内の殘敵掃蕩及拂曉に於ける敵の襲擊に對し勇敢に戰鬪した。

十一月四日彰德の攻擊に際しては中隊は大隊の右第一線となり第一小隊は其左第一線となり氏は第一分隊の一員として午前六時三十分東八里庄より彰德城西門に向ひ攻擊前進した。城門は堅く閉され歩兵獨力にては攻擊不可能なりし爲工兵の協力に依り西門を破り突入した。其際氏は彰德西門奪取の決死隊に欣然進んで參加し其の突擊を含せらるゝや小銃彈は勿論城壁上より投ずる敵の手榴彈前後左右に炸裂する中を物ともせず率先陣頭に立ちて突入遂に西門の一角を奪取し所屬中隊をして西門一番乘りの名譽を得しめた。かくして城内を奪取するや尙城壁上にありて頑强に抵抗する敵を殲滅し以て後續部隊の突入を容易ならしめた。

彰德城奪取後は其西側に於て第一線警備に當りつゝありしが二十七日斥候を選拔するや氏は進んで之に加はり午後三時出發彰德南方約四粁七里店附近の敵情偵察に向ひ平漢線に沿ひ前進すること約二粁右方屑家庄方向より急激なる射擊を受けたるに依り地形を利用し線路東側より偵察せんとし軌道に差掛りたる刹那恰も午後三時十五分敵の施設せる地雷炸裂し上半身に爆創を受け壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。然し氏が危險を冒して偵察せし結果は將來の戰鬪に貢献せし所多大であつた。

氏や戰場到着以來二ケ月此間攻擊に追擊に掃蕩戰に大小幾多の激戰を重ね常に積極果敢勇戰奮鬪皇軍歩兵の精鋭を發揮して遺憾なかつた。殊に彰德城攻略に向ふや進んで決死隊に加はり勇躍奮進遂に中隊をして一番乘りの榮冠を獲得せしむるに至つた。かくの如きは是れ任務の存する所身命を君國に捧げて一死を鴻毛の輕きに致し斃れて後已む旺盛なる軍人精神の發露にして實に兵の模範と謂ふべきである。征戰尙遼遠なるに氏の如き勇士を喪ふ痛恨盡きずと雖も氏や一身を捧げ拔群の功を奏し兵の本分を完うして散華す彰德城頭聖戰の跡燦たる一番乘りの武勳は萬古不滅皇軍戰史を飾り芳名千古に輝き不滅の英靈亦護國の神と仰がれ尙も皇國並に一家の前途に尊き佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　木名瀨長久

剛勇敵機關銃を撲滅して戰捷の基を作り元氏郊外の華と散る

氏は茨城縣久慈郡世矢村の人にして亡父を秀吉母をはると稱し大正五年五月九日に生れ未だ獨身であつた。資性闊達にして進取の氣性に富み又責任觀念旺盛であつた。昭和五年三月世矢小學校高等科一年を修學後直ちに太田中學校に入り第二學年修了の際父兄相次いで歿せる等の關係に依り退學し爾後獨學怠りなく又青年學校に入りて熱誠修學に從事し模範生として表彰せられた。氏は元來頭腦明晰にして各學校の學業成績優良に付每度受賞の榮譽を得て居つた。

昭和十二年一月現役志願兵として水戸歩兵聯隊へ入營し成績群を擢き一等兵に進められ支那事變勃發するや石黑部隊に屬し勇躍北支方面への征途に就いた。斯くて九月上旬北支に到着し炎熱に堪へ泥濘の惡路を踏破し九月中旬永定河々畔に進出し渡河戰鬪を準備した。

九月十三日より所屬部隊は永定河々畔北相各莊附近の戰鬪を準備するに方り氏の所屬小隊第三分隊長海老原伍長は永定河の渡河點及敵陣地の狀況を偵察すべき任務を受けた。此の時氏は自ら進んで其の斥候要員たる事を志願し午後七時三十分裸體となり急造槍と手榴彈のみを携行して永定河を徒涉し遂に最良の渡河點を發見して之を標示すると共に敵岸に取り

つき河岸の地形及敵狀を詳細に報告した。翌十四日所屬中隊が愈々渡河を實施するに方りては氏は所屬中隊の左第一線小隊に屬し分隊員に先んじて渡河し爾後の追擊前進に際しては最も勇敢に活躍し以て戰友の志氣を鼓舞し中隊主力の敵前渡河に貢献せる所甚だ多かつた。

永定河南岸の敵を擊破せる我が軍は爾後不眠不休の猛追擊を行ひ滹沱河を渡河し十月十一日元氏附近に到達した。氏は

其の經過に於て拒馬河の敵前渡河に際しては中隊の左第一線小隊に屬して第一次に敵前に上陸し沈着剛膽よく分隊長を輔佐して活躍し又大冊河左岸の敵陣地の據點たりし石頭村の敵陣地に夜襲するに方りては分隊長と共に壯烈なる突擊を敢行した。かくて滹沱河を渡渉し敵を急追して元氏附近に達するや所屬部隊は約三箇師の敵と夜間遭遇戰を交ゆるに至つた。此の時所屬中隊は豫備隊に屬し鐵道線路東側に位置して居たが所屬部隊は十一日午後九時頃敵中深く突入したるも優勢なる敵は尙四周に在りて退却の模樣なきのみか午後九時五十分頃に至るや却つて大部隊を以て逆襲に轉じて來た。玆に於て所屬中隊も逆襲部隊に對し突擊するに決した。やがて中隊長の下令と共に氏は最前線に飛出して敵を刺殺して最も勇敢に奮鬪した。此の時敵の左翼に當りチェツコ輕機關銃現はれ我に損害を與へしを以て中隊長は誰かあの輕機の後方から突込めと命じた。氏はハイと答へて數名の戰友と共に勇躍敵の背後に廻はりて之に突入して頑敵を刺殺し該機銃を分捕つた。然るに此の時該敵の後方約三十米に位置せる新なる敵輕機の猛射を受け氏は不幸にして左膝關節に貫通銃創を受けたが之に屈せず中隊と共に當面の敵に突入した。斯かる勇猛果敢なる行動の素因に依り所屬中隊は當面の敵を殲滅し赫々たる武勳を奏するを得た。氏は其の後野戰病院に收容されたが不幸にして十月二十五日午前零時二十三分容態革まり竟に聖戰の華と散つた。

氏や至誠報國の一念凝つて每戰進んで難局に當り常に赫々たる武勳を奏し就中元氏附近の奮鬪たるや所屬部隊全將兵を感動せしめ氏の訃報傳はるや聞く者皆暗然として木名瀨！　お前の仇はきつと取つてやるぞと哀悼の裡に悲憤の涙を濺いだと云ふ事である。あゝ人は一代名は末代、氏の功績は皇軍戰史に輝き其の名は千古に芳ばしく其の英靈は萬世に生き皇國並に一家の守護神として高く仰がるゝであらう。因に氏の實兄金男氏も出征中であるが定めし氏の英靈は實兄の武運長久を加護し以て一家の譽を揚げしむるであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　北脇光治

輕機彈藥手、彈雨の下勇敢活躍克く其任を完うして斃る

氏は兵庫縣城崎郡長井村の人にして父を庄造母をはると云ひ大正五年二月二日に生れ未だ獨身であつた。資性溫良にして責任觀念の強い人であつた。昭和五年三月鄕里の尋常高等小學校を卒業し其の後家業に從事し同十二年一月徵兵として鳥取歩兵聯隊に入營爾來軍務に勉勵學術の成績良好であつた。

支那事變起るや長野部隊第六中隊に屬し第二小隊第六分隊輕機關銃第一彈藥手として昭和十二年八月十日勇躍征途に就

いた。北支戰線到着後九月上旬より馬廠の攻擊開始せらるゝや所屬中隊は旅團の直轄部隊として丁莊附近に進出し敗殘兵或は便衣隊の蠢動に對して司令部の直接警戒に任じ爾後敵を急追して青縣に前進した。此の間氏は不眠不休終始奮勵屢々歩哨或は斥候として克く其の任務を完うした。九月二十日中隊は滄州の前進陣地たる人合庄の敵を夜襲する爲め午後六時より行動を起し攻擊前進した。氏は敵彈雨飛の下常に銃側に彈藥を充實し或は敵情に留意し或は彈着を觀測し克く射手を佐けて輕機關銃の威力を發揮せしめ、かくして勇敢に躍進逐次敵に近迫し中隊愈々突擊に移るや氏も亦分隊長に續いて勇敢に敵陣地前の水濠を越へ更に鐵條網を突破し敵陣に突入奮鬪の後遂に同陣地を占領し尚ほ部落の土壁に據りて頑強に抵抗する敵に對しては夜間なるも克く射手と協力し猛射を加へて之を擊滅し引續き尚も執拗に抵抗する敵に對し夜を徹して之が掃蕩に從事し翌二十二日午前九時完全に同陣地を奪取することを得た。

次で二十三日午後六時より敵の主陣地たる姚官屯西側陣地に對して攻擊を開始するや篠つく雨の如き敵彈の中を勇敢に躍進して敵に近迫せしが夜に入るも敵の各種火器の亂射は益々暴威を逞しうし死傷續出するに至つた。然かし氏は之に屈せず分隊長指揮下に尚も勇進を續け敵前約四十米の水濠に達し中隊は此の線に於て敵を目睫の間に視つゝ突擊の準備を整へた。此の際氏は猛火の下敵情監視の任務に服し剛膽沈着克く敵の動靜を注視して其の任を完うし愈々二十四日午前四時中隊突擊を起すや氏は命令一下分隊長と共に正面よりする猛烈なる敵彈を物ともせず鐵條網を突破し敵陣に突入し奮鬪の後陣地の一角を奪取し更に頑強に抵抗する殘敵に對し射手と協力して夜間にも拘はらず輕機關銃の威力を發揮して敵を制壓し中隊再び突擊するや氏も亦果敢敵に突入し、かくして全陣地を奪取し之を確保中無念敵彈頭部を貫き竟に壯烈なる戰死を遂ゞるに至つた。

氏の戰陣に立つや彈雨の下勇敢剛膽克く射手と協力して一點となり皇軍輕機の威力を發揮せしめ又其の監視に任じては警戒に遺漏なく突入に際しては率先奮鬪中隊の敵陣奪取を容易ならしめ克く兵の本分を完うして遺憾とする所なかつた。かくの如きは是れ一に氏が職責の存する所身命を君國に捧げ斃れて後已む盡忠至誠の發露と謂ふべきである。氏惜しくも滄州の華と散りしも其の拔群の武功は皇軍戰史に輝き其の英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尚も皇國を守護し又遺族の將來に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　美藤勳

勇敢なる小銃手、李家婁の激戰に速射砲隊を護衛し職に斃る

氏は兵庫縣出石郡神美村の人にして父を熊次郎と云ひ明治四十二年七月二十二日に生れ妻壽枝との間には未だ愛子を惠まれなかつた。責性豪膽孝心極めて深く人に交はるや情誼に厚く頭腦亦明晰にして諸人の愛敬を受けて居た。大正十三年三月三宅小學校高等科を卒業し其の後は家庭に在りて農業に精勵し傍ら三宅青年訓練所へ通學中であつたが中途より鑛山撰鑛所に就職し其の後他郷に出でゝ商業に從事し業績逐年良成果を擧ぐるに至つた。昭和五年一月現役兵として鳥取歩兵

聯隊へ入營し翌六年七月歸休除隊となつた。

支那事變起るや昭和十二年七月下旬應召長野部隊に屬し岡本中隊の小銃手として勇躍北支戰線へ出征した。斯くて八月下旬北支へ到着降雨泥濘の難行軍を續け九月五日所屬中隊は挺進隊となり敵彈下に惡路を突破し津浦線郝庄に到着し同地に於て大隊の攻擊正面たる康莊子の敵情地形の偵察を行ふに方り氏は井上將校斥候要員に選拔せられ勇躍敵前至近の所に

迄潛行し豪膽にも該陣地の側防機關並に障碍物の狀況を詳細に偵察し斥候長に貴重なる資料を提供した。

九月十日所屬中隊が小王莊並に流河鎭附近の殘敵掃蕩の任務を受領するや氏は分隊長と共に前記兩部落の中間に介在する高粱畑内に潛伏せる約十數名の敵を發見し勇敢機敏なる行動を以て忽ち之に殲滅的大打擊を與へ續いて附近の殘敵を擊破し中隊の任務達成を迅速ならしめた。

越えて九月下旬所屬中隊は滄縣陣地内の一堅壘李家婁附近を攻擊する爲め二十日午前四時三十分行動を開始し二十一日午後五時敵の猛射を浴びつゝ高官屯の線を出發し豫定の攻擊準備陣地の線に進出した。此の時氏の所屬分隊は速射砲隊掩護の特別任務を受け熾烈なる彈雨を冒しつゝ敵前四百米に進出すべく前進を起したが數線の水濠の爲め意の如くならず剩さへ三方向より敵の集中火を受け愈々行動の自由を失つた。氏は此の際敢然我に最も危害を與ふる方面の敵前百米に接近し正確なる射擊に依り之を制壓し更に踵を返して速射砲運搬援助の爲め進んで水中に入り泥まみれとなつて砲を搬送し徹宵努力して所望の位置に陣地進入を援助し爾後速射砲陣地の右前方に位置して其の警戒に當つて居たが二十二日未明不幸人合庄方面より飛來せる敵彈の爲め右眼に盲貫銃創を受けて倒れた。剛氣の氏は之にも屈せず尙も立たんとしたが上司の命令に依り後退し興齊鎭野戰病院に收容された。幸に氏の弟俊一氏も特務兵として同一戰場に在つたが爲め親しく氏を介抱し野戰病院に於ても醫官の手厚き治療を受けた。然かし何分重傷にして同日悼ましくも愛弟より末期の水を與へられ戰勝を聞かされつゝ莞爾として瞑目した。氏の掩護協力せる速射砲隊は其の後大に活躍して敵陣地を壓倒震駭して突擊の動機を作り二十二日午前六時目指す堅壘を占領之を確保せしむるに至つた。

氏や剛膽慧敏にして或は重要なる斥候要員となり或は掃蕩戰の先驅となりて赫々たる武勳を奏し又堅忍持久泥土高粱の諸障碍を突破し任務の前には水火も敵火も眼中になかつた。其の成果たるや悉く戰勝の尊き礎石となつた。洵に是れ皇軍歩兵の本領を發揮し又一般軍人の模範たる者であつた。斯かる有爲にして忠勇なる士を喪ふ眞に痛惜の情を禁じ得ないが氏が愛弟の恩愛限りなき看護に瞑目せるはせめてもの事であつた。あゝ氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史を飾り其の不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國の前途に將た一家の將來に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　水田義數

瀕死の重傷を負ひ尙彈藥補充を叫ぶ彈藥手「遼州」

氏は廣島縣蘆品郡新市町の人にして父を梅吉母をムツと云ひ大正五年九月十日に生れ未だ獨身であつた。性溫厚篤實に

して孝心深く上長を敬ひ幼者を慈しみ義務心厚く氣慨に富み事に臨みては沈勇果斷にして世人の愛敬を受けて居た。昭和六年三月鄉里の高等小學校を卒業し其の後は阪神鐵道株式會社に勤務しつゝ關西工業學校夜學部に通學し昭和十年三月之を卒業したが頭腦明晰にして小學校在學間より常に優良なる成績を擧げて居た。昭和十二年三月現役兵として天津駐屯步兵聯隊へ入營し克く軍務に精勵し是れ亦良成績であつた。

支那事變起るや間もなく品部部隊に屬し機關銃中隊の彈藥手として七月十五日以來通州附近の警備に就いた。當時北支に於ける支那軍は勿論一般民衆も抗日意識に燃え日を追ふて不穩の形勢となり遂に七月二十七日に至り我が軍は通州の支那軍に對し武裝解除を要求した。然るに支那軍は之に應ぜざるのみならず不法射擊を行ひたるを以て所屬部隊は斷乎此の敵を攻擊するに決し氏は第四小隊の彈藥手として攻擊部署に就き午前四時より攻擊を開始した。敵は兵營周圍の圍壁を利用し其の西北方の廟附近及兵營東南側の潞河中學及獨立高地等を利用し堅固なる防禦工事を設けて頑强なる抵抗を試みた。我が第一線部隊が攻擊前進に移るや敵は猛烈なる射擊を開始し就中南門附近には迫擊砲の集中射擊を浴びせ來り我が軍の死傷者續出するに至つた。此の頃我が友軍砲兵は兵營圍壁に據る敵を猛射すると共に兵營を砲擊して火災を起さしめ黑煙濛々天を掩ひ圍壁に命中炸裂するの光景凄慘壯絶を極めた。氏の所屬小隊は第一線たりし第二中隊に配屬せられて此の砲擊間待機中であつたが午前七時三十分より攻擊前進を再興した。然るに我が砲擊の中止と共に再び敵の重輕機關銃に迫擊砲は我が第一線步兵を目がけて猛射を浴びせて來た。此の時所屬小隊は敵前僅かに百五十米に近迫しありて全く敵の十字火の中に曝されて居た。然れども氏の所屬小隊は之に屈せず敵の銃眼に對して有效適切なる射擊を繼續し右後方に位置せる主力機關銃火力と共に當面の敵に多大なる損害を與へた。然れども未だ制壓を受けざる殘敵は依然として頑强なる抵抗を續けて居た。斯かる激戰の中に沈着勇敢なる氏は行動困難なる高粱畑の中を而かも嵐の如き烈しき彈雨を冒して後方彈藥小隊位置まで往復し銃側に彈藥を補充し遺憾なく機關銃の火力を最高度に發揮させた。戰鬪は益々激烈となり氏は午前八時十分頃後方より彈藥を運搬し銃位置の後方約十米に到達せんとする時腰部腹部に貫通銃創を受け「ヤラレタ」と叫んで打ち倒れた。其の聲を聞きたる分隊長は之を小隊長に報告し小隊長は銃側者に命じて氏を後送させたが氏は其の際戰友に對し「俺に構はず彈藥を運んで呉れ、彈藥はどうしたと云ひ續け最後に「お國の爲めだ」と叫び悲壯の戰死を遂げた。所屬小隊は氏の尊き奮鬪に依り緊要時機に機關銃の全威力を發揚するを得協力步兵中隊の攻擊前進並に突擊の動機を作爲し玆に戰勝獲得の途を開拓するに至つた。

氏や鄉に在りては溫良誠實の模範青年であり出でゝ軍務に服するや朴直忠實の模範兵であつた。果然聖戰に從ふや能く其の重任を自覺し彈雨の中に沈勇機敏自己の職分に邁進し斃れても尙自己の任務を顧念し竟に職に殉するに至つた。其の崇高なる責任觀念たるや眞に皇軍々人の精華と謂ふべきである。あゝ斯かる忠誠勇武の士を早くも聖戰の初期に喪へるは眞に痛惜を禁じ得ざるも氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史に輝きて芳名を百世に傳ふべく假令肉體は短き現世を終るとも其の雄魂は不滅に生きて護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り又一家の守護神として遺族の前途に尊き加護佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳七等功七級　水石、武雄

機關銃隊員、拒馬河畔の激戰に彈藥を補充し敵機爆彈に殪る（空爆）

氏は群馬縣佐波郡玉村町の人にして父を德十郎母をくにと云ひ明治四十五年三月十九日に生れ未だ獨身であつた。資性溫良にして義務心厚く事に當りて剛毅果斷の人であつた。大正十五年三月玉村小學校高等科を卒業し又昭和四年三月玉村實業補習學校本科を卒業し其後は家庭に在りて父母を扶け家業に精勵して居た。昭和八年一月現役兵として高崎歩兵聯隊へ入營し其後滿洲事變の爲渡滿し各地の警備討伐の重任を果した功に依り勳八等白色桐葉章を賜はり昭和九年十一月滿期除隊となつた。

支那事變起るや昭和十二年九月應召森田部隊に屬し機關銃中隊の彈藥小隊員として勇躍征途に就いた。斯くて北支到着以來二堡王口鎭小邊舖附近の敵を擊破して京漢線に沿ひ敵を追擊し永定河畔の戰鬪に於ては辛莊附近の攻擊に大に活躍して重機關銃隊の威力を發揚せしめ以て赫々たる戰勝を獲得した。

永定河畔の戰鬪に於て勝利を得たる所屬部隊は息をもつかず敵を急追したが九月十五日東茨町附近に於て突如有力なる敵部隊と衝突するや氏は敵彈雨注の中を物ともせず適時適切に彈藥を重機關銃隊の射擊陣地に補給し以て所屬中隊の威力を最高度に發揚せしめ又中隊が西葦坨に轉進を命ぜらるゝや彈藥小隊と第一線との連絡に任じた。然かし附近の地形は錯雜し指揮連絡極はめて困難であつたが氏の周到なる注意と勇敢なる活動は克く其の連絡を確保し以て所屬中隊の戰鬪を容易ならしめた。

九月十六日第二大隊が拒馬河の渡河點正面の敵に對し攻擊中氏の所屬第一大隊は午後一時三十分を期し同河の渡河を開始し所屬中隊は第四中隊に續いて渡河せんとした。然るに此際第二大隊正面の敵は頗る頑强に抵抗し渡河半ばにして渡河作業隊員に多數の負傷者を出し爲に一時作業を中絶するの已むなきに至つた。茲に於て氏の所屬中隊は機を失せず對岸の敵部隊に猛射を浴びせて之を制壓し敵の射擊も漸く緩徐となるや此機に乘じ午後二時三十分戰銃隊彈藥小隊の順序を以て渡河を開始した。氏は尙も降り注ぐ敵彈を沈着機敏に車輛並に其他の彈藥器材を渡河せしめ午後三時對岸に戰鬪準備を整へた。續いて馬匹の渡河に移らんとする頃中隊主力は第二大隊の苦戰に協力中にして彈藥補充は急迫を告げて居た。分隊長大藤伍長は率先車輛を曳きて彈藥補充に赴かんとするを目擊せる氏は自ら志願して其車輛の輓曳に加はり第一線に赴く途中敵彈愈々烈しく竟に敵前四百米に於て車輛を止め其後は彈藥箱を背負ひ更に前進を續けた。此時俄然上空に敵飛行機飛來するや今迄沈默しありし敵兵は猛烈なる射擊を浴びせ來り氏等の身邊も危險となつたが氏は敵機も敵彈も意に介せず一意第一線の所屬機關銃隊に彈藥を補充した。時恰も同機關銃隊は彈藥缺乏しありし折柄とて之に大に力を得愈々敵に

猛射を加へ茲に戰勝の第一歩を獲得した。氏は重任を果たし歸還せんとして車輛附近に至りし時敵飛行機の爆擊に遭ひ不幸右頭部に爆創を受け壯烈なる戰死を遂げた。所屬部隊は氏等の尊き犧牲に依り午後四時戰鬪を開始し午後六時三十分敵陣地の一要衝たる望海庄の堅壘を奪取するを得た。

氏や北支の隆暑泥濘汎濫地帶の作戰部隊に屬し殊に重機關銃隊の車輛馬匹と共に言語に絶する辛酸を嘗め志氣盛々旺盛

象の模範となり又敵彈雨飛の中に毅然として彈藥補給に任じ重要なる戰機に克く所屬機關銃隊をして赫々たる武勳を奏せしめた。是れ洵に一死報國の念に燃ゆる忠烈の士にしてはじめて爲し得る所である。あゝ聖戰の初期斯かる勇士を喪へるは眞に痛惜に堪へないが氏の勳功たるや天晴れ皇軍戰史に牢記せられ又其英靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳七等に叙し青色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　水川榮吉

責任觀念旺盛なる彈藥手、小南留の激戰に其の任に殉る

氏は栃木縣下都賀郡桑村の人にして父を清作母をくにと云ひ明治四十五年三月五日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚篤實にして忍耐力に富み且不屈不撓の氣慨を有し又親に孝にして近隣の愛敬を受けて居た。大正十一年三月桑村尋常小學校を中途退學し其後は親を助けて家業を手傳ひ。昭和八年一月宇都宮歩兵聯隊に入營し間もなく滿州事變の爲渡滿し各地の警備討伐に從事し剛膽熱心克く任務を果たし功に依り勳八等白色桐葉章を賜はり同年一月內地歸還同九年七月歸休除隊となつた。氏は在營間特に銃劍術の技能優秀にして各直屬上官より屢々其名譽を表彰された。

支那事變起るや昭和十二年八月應召溫井部隊に屬し河村機關銃中隊の彈藥手として勇躍北支戰線へ向け征途に就いた。北支到着後は降雨泥濘に惱まされ從つて給養思ふに任かせず部隊は名狀すべからざる難行軍を續けたが氏は克く夫れ等困苦缺乏に耐え率先難局に當り其の任を果たした。而して所屬隊は九月中旬永定河畔の敵を擊退し京漢線に沿ひ追擊に移り九月十六日南台子の敵を一蹴し九月二十三日大劉莊の頑敵を屠り翌二十四日には早朝行動を起し保定の堅壘を攻擊して之を擊破した。其間氏は猛烈なる敵彈下に剛膽機敏なる行動を以て所屬分隊に適時適切なる彈藥補充を行ひ重機關銃の威力を最高度に發揚せしめた。

斯くて所屬部隊は石家莊附近の敵を擊破して愈々黃河北岸地區の掃蕩戰に入り十一月十一日河北省康平縣南小留附近の敵陣地を攻擊した此の時氏は右第一線たる第一小隊第一分隊に屬し午前十一時五十五分行動を開始し正午より攻擊を開始した。然るに敵の陣地は極はめて堅固にして守兵亦必死の防戰に努めた。所屬中隊は第一線たりし第三中隊と密接なる協同連繫を確保しつゝ逐次攻擊陣地を推進したが同日夜に入るも攻擊進捗を見ず辛うじて戰前三百米に前進し爾後の攻擊前進を準備した。翌十二日午前三時四十分頃彈藥小隊は所要の彈藥を指揮班位置に搬送集積したが時恰も敵彈嵐の如く猛烈にして附近の行動は極はめて危險であつた。然れども責任觀念燃ゆるが如き氏は戰局の重大性を自覺し敢然指揮班の位置に到り之れが分配を受け之を所屬小隊に補充せんと彈藥を背負ひ銃側に歸らんとせし一刹那銃の後方約二十米の位置に於て左胸部及び腹部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。時に午前四時三分であつた。所屬小隊は氏の尊き犧牲に依り運ばれたる彈藥に依り爾後頑敵に大打擊を與へ翌十三日午前四時には小南留南端の敵陣地を奪取し之を確保した。

氏や溫厚人に接し剛健不撓事に當る。默々として幾多の辛酸を克服し敵彈雨飛の下毅然として職責に邁進し義を山岳の

重きに置き死を鴻毛の輕きに比せる共高邁なる精神又共剛膽なる行動は正に皇軍々人の精華であつた。斯かる忠勇の士を聖戰の半ばに喪へるは痛惜哀悼禁ずる能はずと雖も士の戰場に臨むや素より生還を期せず。氏が兩事變に樹てたる不朽の功績は天晴れ皇軍戰史を飾り共不滅の英靈は護國の神と祀られ神靈尙も皇國を護り又一家の守護神として共前途に尊き佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　三浦雅美

十數倍の敵夜襲を撃退し天津東驛の守備を全うす

氏は廣島縣佐伯郡三高村字高祖の人にして亡父を周次母をクミと稱し大正五年一月十日生れで未だ獨身であつた。昭和五年三月三高村小學校高等科を卒業し神戸上組合資會社第一清貞丸の機關部員として勤務し以て入營時に及んだ。資性温厚篤實而かも進取の氣象に富み責任觀念旺盛にして前途有爲の青年を以て目せられて居た。

昭和十二年三月現役兵として北支駐屯軍歩兵聯隊に入營し熱心軍務に精勵しつゝありしが同年七月突如として支那事變勃發するや氏の所屬品部部隊は直に出動北寧線天津總站以東茶碇に亘る鐵道及軍用電線の保護及白河自由交通の維持に任じた。此の時氏は或は歩哨に或は巡察斥候の勤務に或は各種軍需品の護衛に任じ殆んど不眠不休の努力を以て克く共の任を完うした。

七月二十八日の夜半より天津市内の情況愈々不穩となるや氏の所屬小隊長は氏の屬する增尾分隊をして東站第一ホーム西側に陣地を占領し警備する事を命じ分隊長以下氏等一同至嚴なる警戒を爲しありしが二十九日午前二時宗哲元麾下第二十九軍第二十八師第二百二十八團及保安隊約三百名は左右二方向より夜襲して來た。氏は之を逸早く發見し直ちに增尾分隊長に報告すると共に分隊長以下一同既設陣地に據つて敵に猛射を浴びせ爲に敵は前進を中止した模樣であつたが敵は更に驛構内信號所及給水タンク附近に兵力を集結して再び夜襲して來た。此の時所屬小隊も亦第一線に增加し敵を猛射したが敵は頗る優勢にして我に十數倍し小癪にも小隊の直前に肉薄して來た。此の時氏等增尾分隊員は群がる敵中に手榴彈を投擲し共の潰亂に乘じて分隊長以下突擊に移り周章狼狽する敵を刺殺し竟に敵は屍體を遺して退却した。然るに敵は我を小數と侮り再び信號所及給水タンク附近に集結し黎明我に向つて重輕迫擊砲を猛射し來ると共に共掩護下に更に攻擊に轉じて來た。氏は當時分隊の最左翼に位置し共の左川村隊と連繫しつゝ沈着勇敢に敵を猛射して居たが給水タンク前の敵機關銃が猛威を揮ひある事に氣付き分隊長に報告するや增尾分隊長は氏に該機關銃射手を狙擊する事を命じ分隊長自らも氏と共に狙擊し先づ機關銃の傍にありし輕機關銃二を沈默せしめ尙も重機に向つて狙擊を續けありしが午前八時頃無念氏は頭部共他に一度に數彈を受け壯烈なる戰死を遂げた。然かし氏等の奮鬪尊き犧牲に寡兵克く衆敵を擊退し東站驛を依然確保して我が軍隊及軍需品輸送に何等の支障なからしめたのであつた。

氏は聖戰に參加を命ぜらるゝや次兄に書を寄せて「今や北支の風雲急にして我は國防の最前線に立つた。愈々頑迷なる

支那軍に正義の鐵拳を加へんとす。素より此身は自己の體にあらず。大君に捧げし身體で故郷の人々や神戸の人々の笑の種となるが如き事は斷じて致しません。兄上郷く武勳に飾られ再び故郷の地を踏めるとは計られぬが吾も帝國軍人決して未練の振舞は致しません。入營時に送られし人々の御好意の萬分一たりとも報ゆべく懸命に努力する覺悟です云々」と述べて居る。果せる哉入營後僅々數ケ月を經過せるに拘はらず其射擊技能は百發百中の特技に達し剛勇果敢選ばれて形勢最も不穩なる時機に警戒勤務に服し慧眼逸早く敵襲を發見し爾後目ま苦しき戰況に最も機敏適切に優勢なる敵を擊破し以て守地を確保し爾後に於ける軍隊並に軍需品の鐵道輸送に毫も支障を來さしめざりしは偉大なる功績と謂はざるを得ない。あゝ斯かる有爲にして精悍なる勇士を早くも聖戰の初期に喪ひたるは痛惜に堪へぬが氏が赫々たる武勳は千載に傳へて芳ばしく其不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に加護佑助を垂るゝことであらう。

氏は戰死の日先づ歩兵一等兵に續いて同日更に歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　三艸義夫

一身を君國に捧げて母の恩に酬ゐんとす

氏は兵庫縣赤穗郡赤穗町の人にして亡父を平吉母をミネと云ひ大正五年十月二十五日生れで未だ獨身であつた。資性温厚にして家業に精勵し親に孝行であつた。昭和四年三月尾崎尋常小學校を卒業其の後家業に從事し昭和十一年十二月徴兵として龍山歩兵聯隊に入營した。

支那事變起るや間もなく南雲部隊第九中隊に屬し第一小隊第三分隊の小銃兵として勇躍征途に就いた。其の出陣に當り家郷に寄せたる書面の一節に「唯々御國の爲めに身を投じ皆々様や母上の御恩の萬分の一に酬ゆる覺悟をしてゐます。種々と永い間御世話に相成且御厄介をかけ濟みませんでした(中略)一意國家の御爲めに盡す絶好のチヤンスが訪れたのだ。此の時働かねば、やる時期がない。確かりやつてもう家へは歸らぬとの決心です。母上や兄上には必死の覺悟で居て下さい」とあり其の眞劍なる決意の程が察せらるゝ。

北支戰線到着後氏の所屬隊は直ちに唐山附近の警備に任じた。當時北支の暗雲は低迷して蘆溝橋の衝突は愈々重大化せんとせる際として將兵一同日夜緊張警備の任に服して居たが竟に我が軍は勘忍袋の緒を切り氏の所屬隊は南苑攻擊の爲め七月二十六日午後十一時北平南方約二里黄村驛に下車し氏の中隊は尖兵中隊となり翌二十七日午後零時五十分前進を起した。此の日無風にして氣溫百四十度其の灼くが如き炎熱を冒して高粱繁る間道を南苑に向つて前進した。暫くして前方に派遣せる斥候の報告に依り敵は行宮南方高地に陣地を占領しあるを知り中隊長は此の敵を攻擊する爲め直ちに第一第二小隊を第一線に展開し攻擊準備を整へた。敵の陣地前は丈餘の高粱畑にして深さ膝を沒する水濠を廻らし重輕機關銃迫擊砲等を配備して頑强に抵抗した。氏は中隊が展開するや第一線第一小隊第三分隊に在て雨下する敵火を意とせず剛膽にも彈雨に身を曝して熱心敵情を熟視しありしが忽ち敵の自動火器の位置を發見し又敵陣地の狀況を觀察して之を報告し爾後に於ける小隊長の指揮を容易ならしめ午後二時三十分愈々

攻撃の開始せらるゝや沈着正確なる射撃を以て逐次敵を制壓し其の前進に方りては率先々頭に立ちて勇敢に躍進し大に分隊の志氣を振作しつゝありしが第二回目の躍進中惜しくも腹部に貫通銃創を受け其の場に倒るゝに至つた。然し氏は之に屈せず立ち上り再び前進せんとせしも重傷に堪へず竟に又斃れて「殘念です、やられました。仇を〳〵」と聲もかすかに壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏の鄕に在るや頗る親に孝にして今次事變出陣に際しては再び生還を期せず所謂親に孝ならんと欲せば須らく君に忠なるべしと一死奉公以て孝の乏しきに代へんとした。果せる哉其の忠誠の迸る所敵を見て忽ち勇み積極果敢沈着剛膽散兵たるの本分を完うして遺憾なかつた。而かも斃るゝも尙戰はんとせる如きは正に軍人精神の發露と謂ふべきである。開戰劈頭氏の加き忠勇の士を喪ふ痛恨盡きざるも死生命あり。傲慢不遜の敵に對し膺懲戰の序幕に於て散華せる氏の武勳は赫々として千載に輝き芳名は萬古に朽ちざるべく又不滅の英魂は護國の神となり神靈出でゝは聖戰を守護し入りては老母の多幸を加護して已まぬであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　宮川恒吉

剛勇快活一隊の志氣を鼓舞し掩蓋機關銃を撲滅す

氏は群馬縣山田郡川内村の人にして父を埒太郎母をモトと云ひ明治四十三年四月二十日に生れ未だ獨身であつた。性快活明朗にして諸運動に長じ既に十二三歳の頃には二三米の岩上より見事なる水中跳込を演じ又十五六歳頃には庭球代表選手として縣内の强豪と覇を爭ふ等體力氣力自づから向上するに至つた。大正十四年三月川内南小學校高等科を卒業特に書方に長じ群馬縣學藝品展覽會に於て優等賞狀を受領した。昭和五年三月には川内南實業補習學校本科を卒業し爾後父の家業たる大工職に精勵した。昭和六年一月現役兵として高崎歩兵聯隊へ入營し熱心軍務に精勵し昭和九年六月滿期除隊となつた。歸鄕後は再び大工職に就いたが昭和十二年八月より太田町中島飛行機製作所木工部に採用され勤務中であつた。

支那事變勃發するや八月二十一日應召森田部隊に屬し征途に就いたが北支到着後は泥濘と飢渴に惱まされつゝも志氣旺盛敵を急追し永定河々畔股家鋪附近の戰鬪に於て氏の中隊は旅團豫備隊となり同河の渡河に方りては氏は猛烈なる敵彈下を物ともせず車輛部隊を掩護しつゝ渡河し且附近の殘敵を掃蕩して所屬中隊の任務達成に貢獻した。

九月十六日拒馬河々畔望海庄附近の戰鬪に於ては新井准尉の指揮する第二分隊の小銃手として午後零時三十分行動を起し午後二時三十分より望海庄附近の敵に對し攻撃を開始した。敵は堅固なる既設陣地に據り頑强に抵抗し特に其の側防掩蓋機關銃は最も活躍して我が軍の前進を妨害したるを以て氏の小隊は速かに此の機關銃を撲滅すべき命令を受けた。氏の所屬分隊は第一線中央分隊として正面より之を攻撃したが敵は必死の猛射を浴びせ來り前進頗る困難であつた。併し氏は志氣旺盛左右の戰友を激勵して一進一止敵に肉薄し遂に肉彈を投じて之を撲滅し更に勇躍前進中午後五時三十分頃敵兵約一中隊は我が中隊正面に向ひ逆襲して來た。所屬小隊は好機に投じて敵の側背に

突入し見事に之を撃破し潰亂敗走の敵に尾して可西務の一角に突入して敵陣地を奪取した。其の間氏は終始勇敢奮闘分隊の中堅となり眞に目覺ましき活躍であつた。所屬小隊は尚も部落深く急追中なりしが此の時南方より敵機飛來爆彈數發を投下し刺さへ四圍に潜伏せる敵兵一擧に逆襲に轉じたが所屬大隊は直ちに之に應戰し敵兵並に敵機を撃退し部隊主力の渡河戰闘の成功に重大なる素因を形成するに至つた。此の間氏の勇戰奮闘は亦一隊將兵の深く感激せる所であつたが惜しいかな敵の投下爆彈の破片に依り右大腿部に爆創を受け壯烈なる戰死を遂げた。

氏や快活明朗にして常に分隊の志氣を鼓舞し慧敏剛勇にして常に難局に當り百折不撓克く堅陣大敵たりとも懼れず頑敵を屠り戰勝の端緒を拓いた。九月十二日附で兩親に宛てたる手紙は氏の絶筆となつたが其の一節に「當地獨特の高粱も實り初め冷朗の秋を目前に控えて居ります。小生愈々新任務に就く日も近日中です。皇國の爲め全智全能を發揮して一死君恩に報ゆるの秋です。御一同樣にも充分御身大切に家業に勵まれん事を御願ひ致します。組合や近所の方々にもよろしく云々」と氏の高潔なる覺悟又骨肉知己に對する行屆きたる心くばり共に徹底せる軍人精神の發露と謂ふべきである。あゝ今や明朗にして忠誠勇武の士を喪ふ眞に愛惜の情に堪へないが氏の遺勳たるや皇軍戰史を飾りて芳名を百世に傳ふべく又氏の英靈は不滅に生き尚も皇國並に一家の前途に尊き佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　宮本芳雄

優勢なる匪賊に包圍せられ奮戰力闘の後玉碎す

氏は和歌山縣日高郡御坊町の人にして亡父を庄助母をアイと云ひ大正五年四月三日に生れ未だ獨身であつた。性溫良にして義務心厚く特に孝心深かつた。昭和五年三月御坊尋常小學校を卒業し其の後は御坊町日高紡績會社に入社して業務に精勵し諸人の信用を受けて居た。昭和十二年一月現役兵として和歌山歩兵聯隊へ入營し間もなく滿洲派遣部隊に屬して渡滿し三江省方面に於て警備に就いて居た。氏は入營以來終始一貫熱誠を以て軍務に服し成績亦良好にして特に選ばれて軍犬兵となり湯源に於て軍犬の飼育訓練に從事したが氏の溫良なる性格と倦む事を知らざる精勵努力とに依り其の成果大に見るべきものがあり渡滿後父を喪つたが父の冥福を祈りつゝ一層軍務に精勵し上官戰友より深き信頼と感激とを受けて居た。然るに竹簾鎭方面は匪賊の巣窟となり且其の性質極めて不良性を帶び殊に支那事變勃發以來は共產匪と合流して滿洲國の攪亂を企圖し所在に横行するに至つた。玆に於て所屬部隊長は之れが徹底的討伐を企圖し討伐の爲め日も尚足らざる有樣であつた。九月下旬に至り氏等軍犬兵全部も命に依り竹簾鎭に集結し同方面の警備に當る事になつた。

所屬部隊は十月初めより十一月初めにかけ竹簾鎭附近の警備に當つたが氏は軍用犬飼養訓練に從事する外共和村附近の討伐を初めとし五回に亘る討伐及數回の檢索に從事し不眠不休の努力を以て所屬部隊の任務遂行に寄與せる所頗る多かつた。十一月四日堂垂中尉は竹簾鎭西方約四里に在る三道流の友軍に糧秣補給の爲め支那馬車三十七輛を護送し部下要員二十六名を自動貨車二輛に分乘せしめ午前八時竹簾鎭を出發した。氏は池上分隊の小銃手として第二車に乘車し三道流に到

着して糧秣を交付し午後二時歸還の途に就いた。午後二時三十分頃共和村附近に差しかゝるや俄然前方の部落及道路兩側に潜伏せる敵約二百名より亂射亂擊を浴びせられた。其の距離僅かに五六十米突にして全く敵匪の包圍を受くるに至つた。堂垂中尉は直ちに下車應戰を命じた。氏は直ちに下車し分隊長の指揮下に道路方面の敵に對し猛射を加へて之に多大なる損害を與へたが此の奮戰中無念にも頭部に貫通銃創を受け堂垂中尉以下二十名の將兵と共に枕を並べて壯烈なる戰死を遂げた。爾後救援隊の來着に依り此の敵を擊破し全部の死體は收容されたのであつた。

氏は戰死の前日次のやうな最後の手紙を書き母親宛に發送して居る。「愈々最後の日が來たやうですから一筆申送ります。自分は內地を出發する時から覺悟致して居りますから演習にでも來て居る樣な氣が致します。私としては充分に孝養を盡す事が出來なかつた事が心殘りです。家の名譽國の爲め命を捨てる事は容易な事ですから充分忠義を盡す考へです。此の點は御安心下さい。時間がないので詳しい狀況をお知らせも出來ませんが大體は新聞に書いてある通りと思へば間違ひありません。此の數日間長途の强行軍を續けましたので身體は少し疲れましたが脚氣の方は少しも出ず此の體なら充分に忠節を盡す事が出來ます。貯金も少し許りですが最後が來たら屆けて貰ふ樣になつて居ます。他人にひけを取る樣な事はないから呉れ呉れも御安心下さい。時間がなくなりましたから之れで失禮します御身お大切に左樣なら」と切々の言々是れ純忠の發露であり澄み切つたる心理であつて讀む者をして襟を正さしめずには措かない。果然大敵に包圍され到底勝算なき苦境に處し乍ら泰然自若自己の職分に死鬪を續け竟に玉碎するに至つた。あゝ場面は北滿敵は匪賊にして世人の注目を牽き難き狀況下の奮鬪ではあつたが今次事變下の滿洲警備たるや實に暴支膺懲の聖戰と密接不可分の關係に在り且對蘇關係亦尖鋭化しありし當時に於ける氏等の任務は極めて重大であつた。實に氏等の尊き人柱ありて初めて皇軍の背後が安定し滿洲國の治安を維持し得たるもので氏の功績たるや亦皇軍戰史に牢記せらるべきである。嗚呼良兵良民の鑑たりし氏の壯容今や空しと雖も不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍步兵上等兵勳八等功七級　宮田信二

熾烈なる側防火を受けて奮戰し敵の包圍運動を破碎せる砲手

氏は岡山縣兒島郡宇野町の人にして父を柾太郎と云ひ母は既に歿し大正四年八月二日に生れ宮田久代の養子となり未だ獨身であつた。資性溫順にして小事に拘泥せず一旦決意したる事は遂げずんば已まざるの氣慨を持つて居た。昭和五年三月宇野小學校高等科を昭和七年三月には宇野農業補習學校を卒業し其後は家庭に在りて家業に從事するの傍ら鄕里の靑年訓練所に入り入營時に至つた。昭和十年十二月現役兵として龍山步兵聯隊へ入營し在營間諸勤務演習に精勵し模範兵として屢々直屬上官より賞詞を與へられ同十二年六月善行證書を附與せられ歸休除隊となつた。

支那事變起るや間もなく應召南雲部隊に屬し步兵砲隊砲手として勇躍征途に就いた。斯くて急遽衞戍地を出發し七月二十日北寧線唐山に到着して同地を守備し嚴重北支情勢の推移を監視して居たが七月二十五日夜半郎坊驛に於て日支兩軍衝突するに及び所屬部隊は先づ團河村附近に蟠居せる敵を擊破すべき任務を以て同村附近に到着し二十七日午後零時三十分より戰鬪の爲行動を起した。敵は部落の圍壁及墓地を利用し銃眼或は掩蓋工事を既設して相互の側防を律し以て堅固なる陣地を構成し又附近の地形は高粱畑を以て掩はれ通視連絡を妨げ僅かに陣地前數百米間は射界を淸掃されて居た。氏の所屬小隊は大隊長金少佐の指揮に屬し前記の如く運動困難なる高粱畑を通過し亂射亂擊の敵彈下を敵前六百五十米の所に放

列を布置した。氏は其際第二分隊の砲手として分隊の中堅となり克く分隊長を輔佐し齊整迅速且機宜に適する陣地進入を完了するを得た。午後二時三十分愈々射擊を開始するや氏は彈藥の整備補充に任じ以て分隊の迅速なる猛射に毫も支障なからしめ傍ら絶えず敵情監視を怠らず適時敵情の變化を報告して小隊長の戰鬪指揮を容易ならしめた。

其後陣地を推進するや氏は敵の熾烈なる彈雨を物ともせず臂力前進に協力して火砲を所望の地點に推進した。此時最近距離より猛烈なる敵の側防火を受け而かも敵の有力なる一部隊は我が軍を包圍するの企圖を以て迂回中にして戰況頗る急迫を告げた。氏は此際進んで四番砲手に代り正確迅速なる操作を以て發射速度を最高度に發揚し迂回部隊に甚大なる損害を與へて潰亂せしめ敵の企圖を完全に破碎した。惜しむべし此際氏は頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。

氏は鄕に在りては誠實業を勵み自己の責務を自覺して孝養怠りなく軍に從ひては熱誠眞摯克く軍務に精勵し殊に秋季演習時には連日の疲勞にも拘はらず自ら斥候を志願し慧眼機敏克く敵情地形を搜索して貴重の情報を擧げ眞に粉骨碎身の至誠を認められ衆兵の模範として表彰された。果然今次聖戰に參加するや所屬部隊が情勢の急迫に應じ神速機敏の行動を要するに當り氏は報國の一念燃ゆる所殆ど寢食を忘れて職責に邁進し而かも戰況愈々凄慘を極め火砲の行動容易ならざる地形の下に決死的奮鬪に依り克く歩兵砲の威力を發揚し至大なる戰果を收むるに至つた。あゝ斯かる忠勇義烈の士を早くも聖戰の初期に喪へるは眞に痛惜に堪へずと雖も氏の功績たるや天晴れ皇軍戰史に牢記して其芳名を傳へらるべく又不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國を護り又養家並に實家の前途に限りなき佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　南　俊次郎

病を押して討匪に參加し決死傳令の任を果たし四合堂の華と散る（愛馬美談）

氏は和歌山市納定の人にして亡父を義淸母をよねと云ひ大正三年十二月十九日に生れ未だ獨身であつた。性溫厚篤實にして孝心深く又慈愛心に富み諸事熱誠着實寸暇をも利用し學業修養に努め未だ曾つて歡樂の巷に足を踏める事なく稀に見る模範青年であつた。昭和二年三月貴志村立尋常小學校を卒業後宮北青年學校に通學して其の課程を修了し又平井町の玉置酒店に店員として住み込み誠實業務に精勵し店主及顧客の寵愛を受けて居た。昭和十一年一月現役兵として和歌山歩兵聯隊へ入營し忽ち其誠實熱心と義務心の旺盛なるとを認められ將兵一同の愛敬を受け極はめて愉快に軍務に從事して居た。偶々休暇を許さるれば先づ主家を訪づれて手助をなし店主初め諸人の感激を受け又入營後間もなく父を喪つたが氏の悲嘆ははたの見る目も涙の種にして多年勤儉貯蓄せる貯金の全額を拂涙して葬儀費に提供したとの事である。氏は機關銃中隊に編入せられ良成績を擧げて居たが翌十二年四月滿洲派遣龜井部隊に屬し堂垂中隊長の馬取扱兵として渡滿した。

渡滿後暫く遼陽附近の警備に就いたが六月下旬三江省竹簾鎭に移駐し同地方面の警備に服した。此地方は僻地にして交通不便王化未だ潤はず反滿抗日匪の策源地となつて居た。氏は克く異境の風土氣候にも心身の鍛練に努め其本務たる乘馬

の保育調教に遺憾なきを期すると共に時に或は匪情偵察斥候となり或は機關銃手又は彈藥手となりて數度の討伐に從事し其都度勇敢機敏衆の模範として奮闘した。特に中隊長の身邊に戰闘する場合には常に中隊長の身邊に細心の注意を傾注して之を庇護する等全く泪ぐましき至誠を現はして居た。

九月の初め匪賊約六十名は竹簾鎭の西北方約六吉米に在る四合堂附近に蟠居し不穩の情勢あるを知れる中隊長は氏の所屬大西小隊をして之が討伐を命じた。氏は此時風邪に冒され數日前より臥床中であつたに拘はらず病體を押し決然之に參加した。小隊は午前十一時竹簾鎭を出發し現場へ急行した。氏は小隊指揮班附屬小銃手の一員として參加し午後一時三十分より攻擊を開始したが敵匪は頗る頑强に抵抗し激戰三時間に亘り敵前五十米に達せしが敵火熾烈にして一時小隊長と第一線分隊との連絡も杜絶せんとするや小隊長は大聲にて「機關銃は現在地で掩護射擊をする。第一線分隊は直ちに突擊せよ！」と叫んだ。併し戰場は喧噪にして徹底せずと見たる氏は「自分が行つて來ます」と獨斷飛鳥の如く駈出して之を確實に傳達した。更に右前方に陣地變換中の敵自動火器を發見し機を失せず小隊長に報告すると同時に自ら小銃を執りて之を猛射し次で匍匐前進を以て躍進中敵彈飛來頭部に貫通銃創を受け壯烈なる戰死を遂げた。然かし所屬小隊は氏等の尊き犧牲に依り敵に多大なる損害を與へ間もなく之を潰亂敗走せしむるに至つた。

因に氏は內地出發の際豫て愛育せる老齡馬「金道」に好物の人參を與へ乍ら「お前も十八歳で人間で云へば老齡だ。達者で暮らせよ。俺も手柄を土產に凱旋して來るからな」と云ひ聞かせたが其の後班長中島軍曹が內地歸還の上金道を連れ無言の凱旋をなせる氏の實家を弔問した。然るに氏の實家附近は小路錯綜し班長の一行は途に迷ひ困惑した。併し金道は制止もきかずわかり難き道をずん／＼進んで氏の實家前に立止まつた。軍曹は靈前に南！　金道に連れられて來た南！　わかるか」と合掌すれば遺族就中氏の母はたまりかねて戶外に出でゝふさ／＼した鬣を撫で馬の首にしがみついて愛子の心を移してやつた。あゝ氏が生前の慈愛馬の心に通じ馬亦恩人の家を銘記して美談を遺した。

氏や溫顏慈愛人に交はり馬に接す滿洲警備に任ずるや廣漠無聊の北滿に隆暑に堪へ祁寒を忍び不逞の共匪を討伐して克く警備の重任を全うした。而して責任觀念の旺盛なる病を押して四合堂の討匪に隨ひ敵彈雨飛の中に決死貴重の命令を傳達し以て戰勝の途を拓いた。斯かる忠誠の士を喪へるは痛惜に堪へざる所而かも北支、中支の華々しき戰ひに勤々もすれば世人の視目を牽き難き北滿警備に於て玉碎せるは一層其の感を深からしむるものがある。されど皇軍主力が支那大陸に作戰する間に於て滿洲匪賊は共產匪と合流して滿洲の擾亂を企圖し對蘇關係亦尖銳を加へたる當時に於ける氏等の尊き犧牲は決して一局地の討匪戰にあらずして今次聖戰と密接不可分の赫々たる勳功と謂はねばならぬ。必ずや氏の功績は天晴れ皇軍戰史に牢記せられ芳名は後世に謳はるべく不滅の英靈は護國の神と仰がれ神靈尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日步兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　見澤德一

勇敢なる機關銃彈藥手、張家口の激戰に奮闘し集團地雷に玉碎す

氏は埼玉縣北埼玉郡南河原村の人にして繼父を春之助母をたかと云ひ大正五年二月二十二日に生れ未だ獨身であつた。

資性溫厚眞摯にして責任觀念に富み熱誠職務に勉勵し諸人の愛敬を受けて居た。昭和四年三月南河原小學校高等科一年を終了し其後は家庭にありて父母を扶け農業に從事してゐた。昭和十二年一月徴兵として麻布歩兵聯隊に入營間もなく滿洲に派遣せられ齊々哈爾附近の警備に任じ軍務に精勵良成績を擧げ同年七月一等兵に進級した。

支那事變起るや小林部隊に屬し第二機關銃中隊に編入せられ石倉小隊西山分隊七番彈藥手として昭和十二年七月末急遽天津に出動し八月中旬まで天津附近の警備武清附近の殘敵掃蕩開平附近に於ける保安隊の武裝解除に任ぜしが此間氏は終始奮勵克く其任を完うし更に內蒙古張北附近に轉進し同地附近の警備に就いた。

八月二十日所屬部隊が外長城線附近に進出せる敵を擊攘するに決するや所屬小隊は大隊の右第一線たる第五中隊に配屬せられ同日午後一時より長城線へ火點の攻擊を開始し第一線兩小隊の中間地區より中隊の主攻擊正面たる第一小隊の戰鬪に協力した。氏は敵彈雨注の中を物ともせず勇敢機敏に分隊長の手足の如く活躍して彈藥の補充を迅速圓滑ならしめ爾後戰況の進展と共に陣地變換を爲す毎に機を失せず銃側に彈藥を充實し分隊をして猛烈なる發射に伴ふ彈藥の射耗に支障なからしめ常に適切有功なる射擊を實施せしめて第五中隊の攻擊前進を容易ならしめた。かくして第五中隊は攻擊前進を續行し敵前數百米の地點に進出せる頃右前方より敵自動火器の斜射を受け前進意の如くならざるに至りしが機關銃小隊は直に之に對して制壓を加へ第五中隊の前進を容易ならしめ更に（へ）火點附近の重火器或は散兵等に對して遺憾なく機關銃の威力を發揮し第五中隊の近迫を容易ならしめ第五中隊は逐次敵に肉薄して午後七時三十分頃他隊に先んじて（へ）火點の突擊に奏功することを得た。第五中隊敵陣を奪取するや機關銃小隊は直ちに前進して中隊に追及し敗退せる敵を猛射し且長城線南側のトーチカに據れる敵を制壓し以て第五中隊をして（へ）火點の占領を確實ならしむることを得しめしが長城線南側トーチカに據れる敵は尙も小銃機關銃を亂射して抵抗せしにより第五中隊は更に第二第三小隊を第一線とし之に對し攻擊を續行した。機關銃小隊は第三小隊に協力し夕刻よりの雨は益々激しく四面暗黑の中地形の嶮峻を踏破し敵の猛射を意とせず該トーチカに對し歩兵小隊と共に勇猛果敢に突入した。此の際氏は第一線歩兵同樣白刃を揮つて所在の敵を突き捲り午後九時頃該トーチカを遂に占領した。然るに第一線小隊は更に又前方一軒家の敵を掃蕩することゝなり機關銃亦之と共に前進し該家屋の敵を擊退して之を占領するや敵の設置せる集團地雷爆發し小隊長以下十一名と共に壯烈なる戰死を遂ぐるに至つた。

氏の戰陣に立つや機關銃射擊に緊要不可分の彈藥手として彈雨の下死生を顧みず積極活躍常に銃側の彈藥を充實し機關銃の威力を發揮せしめ又暗夜嶮峻に屈せず突擊に際しては率先突入して奮戰格鬪唯々戰勝に向ひ全力を傾倒して邁進し遺憾なかつた。かくの如きは實に氏が忠誠の致す所と謂ふべく其の緒戰に於て內蒙の華と散りしは痛惜に堪へざるも開戰勞頭一戰玉碎して以て皇軍の武威を宣揚し暴慢不遜の敵を膺懲したる拔群の武功は千載の下皇軍戰史に輝き又英魂は不滅に生きて護國の神となり神靈尙も皇國を守護し又一家の守護神ともな

りて其の將來に尊き佑助を垂るゝ事であらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　椎名太一

沈着剛膽なる傳令任務を完遂して殉る

氏は茨城縣北相馬郡山王村の人にして父を作次母をてえと云ひ氏は未だ獨身であつた。資性誠實にして責任觀念に富み事に當りて不屈不撓遂げずんば已まざるの氣慨を有つて居た。鄕里の高等小學校を卒業したが幼少より頭腦明晰學業優秀にして模範生と稱せられ卒業時には表彰狀と共に賞品として硯箱壹個を附與せられた、昭和十二年一月現役兵として水戸歩兵聯隊に入營したが下士官候補者を志願し第二位の好成績を以て採用せられた。

支那事變起るや石黒部隊に屬し第九中隊指揮要員として八月下旬勇躍征途に就いた。斯くて九月上旬北支戰場に到着し同月下旬所屬部隊が石頭村附近の敵陣地攻擊に方りては所屬中隊は中央第一線となり二十一日午後十時行動を起し二十二日午前四時三十分より攻擊を開始した。氏は敵彈下を勇敢機敏に行動し克く中隊内の連絡に遺憾なからしめつゝ指揮班員と共に中隊長に隨從して攻擊前進し敵前至近の距離に進出した。然るに此處に一大水濠に出遇ひ忽ち爾後の前進困難となつた。此の時敵は得たりと正面及左右より熾烈なる十字火を浴びせ來りしが所屬中隊長は敢然敵陣地に突擊を決意して前進を全うした。氏は此の時率先身を躍らして水濠に跳び込み機敏にも圓匙を以て前岸に足場を作り又濠外より綱を垂れて互に後續の兵を引上ぐる等果敢に水濠を通過した。續いて中隊長の「突込め」の號令で氏は中隊長の身邊を離れず勇敢に

敵陣地の一角に突入し接戰格鬪の後之を奪取した。然れども此の陣地には尙多數の殘敵健在し或は手榴彈を投し或は制高の地點より小銃機關銃火を浴びせ來りて頑强に抵抗して居た。氏は之に怯むことなく手榴彈を投げつけては敵を殪し白刃を揮つては敵を刺殺しつゝ一歩一歩と地歩を進め遂に敵の第一線中重要地點を奪取して頑敵の死命を制し以て所屬大隊主力の戰果擴張を容易ならしめた。

所屬部隊は敵を追擊して南進し十月中旬には石家莊元氏附近の掃蕩戰に參加したが十月十二日午後零時四十分より孟村の敵陣地を攻擊した。所屬中隊は大隊の第一線となり晝間各種銃砲火器との協調に依り攻擊前進を起すや氏は指揮機關の一員として大隊本部及歩兵砲との連絡を擔任し其の密接なる協同に依り孟村東北角への突擊を奏效せしめ特に突入時に於ける突擊支援射擊の最終彈と突擊發起の微妙なる連絡を遺憾なからしめた。又中隊の突入に方りては突擊に關する中隊命令を第一小隊長に傳達し終り中隊長と共に突擊に移り敵前約三十米に達せる時無念にも敵彈の爲め頭部に貫通銃創を受け竟に壯烈なる戰死を遂げた。然れども所屬中隊は氏等の尊き犧牲に依り同日午後四時十分孟村を完全に占領するを得た。

氏は頭腦明晰にして成績群を拔き誠實進取克く上下の信賴を受け選ばれて中隊指揮機關となつた。一度び戰場に臨むや剛膽機敏克く中隊長の手足の如く活躍して適時適切に命令通報を關係部隊に傳達して部隊相互の連繫に遺憾なからしめ而

かも難局に遭遇するや率先身を挺して一隊の志氣を鼓舞し戰勝の端を拓いた。あゝ斯かる忠勇義烈而かも前途有爲の士を喪へるは痛惜に堪へずと雖も氏の功績芳名は千載の下皇軍戰史を飾り其の不滅の英靈は護國の神と仰がれ尙も皇國並に一家の前途に尊き加護を垂るゝであらう。

氏は戰死の日歩兵上等兵に進級し次で勳八等に叙し白色桐葉章並に功七級金鵄勳章を賜はつた。

陸軍歩兵上等兵勳八等功七級　重松政夫

孝悌且勇敢なる擲彈筒手、揚子崗に奪闘して職に殉す

氏は愛媛縣伊豫郡廣田村の人にして亡父を力松母をスガヨと云ひ大正四年十月十日に生れ未だ獨身であつた。資性溫厚篤實にして義務心厚く確乎たる信念を持つて居た。例へば在營間父を喪ひたるも父の敎訓を守り歸鄕もせず默々として軍務に精勵し時の聯隊長より表彰せられし如き其の一例である。昭和三年三月廣田尋常小學校を卒業し昭和七年四月廣田青年訓練所へ入所同九年三月同所の課程を修了し其の後は宇品商船會社に勤務して居た。昭和十年十二月現役兵として朝鮮大邱歩兵聯隊へ入營し熱心軍務に精勵特に銃劍術の技能優秀にして屢々表彰せられ又精勤章をも附與せられた。

支那事變起るや昭和十二年七月鈴木部隊に屬し西田中隊の擲彈筒手として勇躍征途に就いた。出征に方り實兄宛に書を寄せて「愈々出征の日が決定されました。兄上當日は故鄕の空から見送つて下さい。待ちかねた戰場へ立つ時がやつて來た。勇ましく出て行きます。此の事は母上へは絶對に云はぬやうにして置いて下さい。又心配して病氣にでもなつたら困りますからね」とあつた。更に戰場から「此の身は國家のものです。敵の二百や三百僕一人で引受ける覺悟です。若し戰地の露と消えたら魂丈けは故鄕へかへるから其の時は喜んで迎へて下さい。此の小包をお送り致しますから受取つて下さい。入用な品でもあつたら使つて下さい。寫眞が澤山あるから大切にして下さい。入營以來の貯金通帳も戰場には無用ですからお送りします。母上に砂糖でも買つて上げて下さい」と認めてあつた。玆にも氏の純眞なる孝悌と報國の丹心を窺ふ事が出來る。

斯くて七月二十七日團河村の戰闘が開始せらるゝや第二小隊第四分隊の擲彈筒手として重要目標に對し適時正確なる射彈を以て之を壓倒し又特に敵前二百五十米に於て敵騎兵約二百名の東方に移動するを發見するや機を失せず之に迅速なる射擊を指向し以て多大なる損害を與へた。翌二十八日には南苑の攻擊に參加し克く分隊長を輔佐し兵營内の敵を攻擊するに方りては中央北側に位置せる敵砲兵及敗退する敵歩兵に對し適時適切なる猛射を加へて所屬隊の戰闘に大に貢献し續いて北平周邊の掃蕩戰には自ら進んで斥候となり敵情捜索に任じ又傳令勤務及警戒勤務に服する等終始熱心積極的に活躍し又長辛店に於ける集中掩護に於ては小隊長を輔佐して陣地の構築敵情捜索各種警戒勤務に任ずる等寧日なく奮勵し同地守備の重任を果たした。

八月二十日敵兵約二箇師は揚子崗東西に陣地を占領しあるを知り所屬鈴木部隊は此の敵の中央部たる揚子崗附近の敵陣地を攻擊すべき目的を以て同日未明闇を衝いて前進し午前八時四十分我が尖兵中隊は早くも敵の第一線より猛射を受くる